

修学旅行日記の時代：1927年徳島商業学校満鮮への旅

荒武 達朗
ARATAKE Tatsuro

徳島大学総合科学部 人間社会文化研究 第29巻

2021年

修学旅行日記の時代：1927年徳島商業学校満鮮への旅

Era of School Excursion Diaries: Focusing on the School Trip in Manchuria and Korea by Tokushima Commercial School, 1927

荒武 達朗

目 次

はじめに

第1節 昭和前期『徳島毎日新聞』に掲載された“修学旅行日記”

第2節 徳島県立徳島商業学校の満鮮修学旅行：徳島県初の海外修学旅行

おわりに：修学旅行日記の時代

附録：1927年度（昭和2年度）徳島県立商業学校満鮮修学旅行日記（全文）

別表：昭和前期修学旅行シーズン（4～6月）徳島県中等教育機関修学旅行関係記事

はじめに

【補記】本稿は荒武達朗「昭和前期大陸を訪れた若者たち：1927年徳島初の海外修学旅行」『令和2年度年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書 異文化に照らし出された四国：外国語文献と異文化的視点を持つ関連文献の調査から』総合科学部、2021年3月刊行をベースとして大幅に改稿し記述を増補したものである⁽¹⁾。

社会の諸事象を考察する上で旅行が有効な分析視角の一つであることに異論はあるまい。それは過去の時代を扱う研究でも同様である。戦前期の日本でも人びとは娯楽の一部として旅行を嗜んでいたのであり、その質的・量的な拡大と発展は当時の世相を如実に反映していた。

旅行の形態は個人旅行、団体旅行と様々ではあるが、中でも後者が「旅の大衆化」に貢献した部分は大きい。その恩恵を被ったのは成年層の個人及びその家族だけではない。初等教育機関を含めた各種学校もまた修学旅行を広く実施し、学生たちは教育という名目をかりて外の世界で見聞を広げたのであった⁽²⁾。この修学旅行もまた当時の社会を理解する手がかりを提供してくれるのであり、社会史研究にとって格好の考察対象である。修学旅行の歴史を回顧すれば

(1) 徳島大学附属図書館リポジトリにて公開。

(2) 山本志乃『団体旅行の文化史：旅の大衆化とその系譜』創元社、2021年。その第Ⅱ部「学びの旅」が修学旅行の歴史についてまとめている。

明治初年より心身の鍛練を目的とした遠足が行われていたが、記録が残る本格的なものとしては1886年（明治19年）の東京師範学校の長途遠足がその始まりであったとされる。もともと軍事訓練の性格を帯びたものから1901年（明治34年）に兵式体操が分離され、見物見学主体の修学旅行が主流となった。さらに女子教育機関の充実につれて女学生の修学旅行も出現した。記録が残る限りでは1889年（明治22年）の山梨女子師範学校の旅行が女子の修学旅行の最初とされる。全体として見れば大正から昭和前期にかけては多種多様な学校が修学旅行を取り入れられるようになった⁽³⁾。また学生の旅先は日本本土にとどまらなかった。このような海外修学旅行は日清戦争後の1896年（明治29年）長崎商業学校学生による上海での調査を嚆矢とするという⁽⁴⁾。1905年（明治38年）の日露戦争の勝利、続いて1910年（明治43年）の韓国併合の後には戦跡・植民地の見学を通して国民的アイデンティティを育成するという要素が附与された。日露戦争翌年の1906年（明治39年）には文部省と陸軍省が企画し全国各道府県の中学生・教職員延べ3,694人が3週間にわたる“満洲修学旅行”を実施した⁽⁵⁾。その後大正から昭和前期には数多くの学校が朝鮮・満洲への修学旅行を行事として取り入れた⁽⁶⁾。

1931年（昭和6年）に満洲事変が勃発、1937年（昭和12年）に日中戦争が全面化、翌38年4月には国家総動員法が公布され、この一連の展開の中で人的・物的資源の統制運用が強化された。一般的に戦時色の強まる暗い時代としてイメージされる時期である。だが高岡裕之氏は1930年代には各種形態での旅行ブームが生まれていたことを明らかにしている。戦争の拡大局面では一時的に人びとの旅行も自粛されるが、戦局の膠着と戦死傷者数の減少によって人びとの旅行は再び隆盛へと向かう。この間、実質的に観光旅行的性格を具えていた修学旅行は1940年（昭和15年）6月に禁止が呼びかけられた。しかし一方で国民精神涵養を目的とした伊勢神宮など建国神話に関連付けた聖地巡拝は容認され、同年の皇紀2600年奉祝行事の大々的な参加へと繋がっていった。この風潮は1941年（昭和16年）の太平洋戦争開始後まで続いた⁽⁷⁾。この1940年前後の社会と旅行についてはケネス・ルオフ氏の著作が詳しく論じている。純然たるレジャーに対する風当たりは強くなっていったが、皇室・神話に関わる聖蹟・聖地への巡拝には何百万人もの国民が参加し、さらには植民地朝鮮、また関東州・満洲国へも学生を含む数多くの人びとが観光に訪れた⁽⁸⁾。しかし1942年（昭和17年）以降は観光どころではなくなり、

(3) 星野朗「修学旅行の歴史（戦前の部）」『地理教育』26、1997年。全国修学旅行研究協会『修学旅行総覧：新しい修学旅行』全国修学旅行研究協会、1997年、第一章「修学旅行の変遷と意義」。

(4) 関儀久「明治期の地方商業学校に於ける海外修学旅行について：熊本商業学校・函館商業学校の事例を中心に」『教育学研究』82-2、2015年。

(5) 高媛「戦勝が生み出した観光：日露戦争翌年における満洲修学旅行」『Journal of Global Media Studies』7、2010年。

(6) 前掲山本志乃、2021年、第Ⅱ部「学びの旅」参照。

(7) 高岡裕之「観光・厚生・旅行：ファシズム期のツーリズム」（赤澤史朗・北河賢三『文化とファシズム：戦時期日本における文化の光芒』日本経済評論社、1993年所収）。

(8) ケネス・ルオフ『紀元二千六百年：消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版、2010年。第3章から

社会から急速に旅行は姿を消した。

本稿の目的はこの修学旅行を通して地域社会の世相の一端を描出することにある。上述の通り修学旅行はその時々の政治、経済、社会の状況の影響を強く受けている。同時にまた民衆の文化をそのまま表現しており、分析視角として有効であろう。ここで使用する資料は学生たちが記した旅行記、旅信、旅記である。歴史研究にとって日記・手紙類は特段珍しい資料ではないが、本稿の特徴は地方紙に掲載されたこれらの文章（本稿では「旅日記」と総称）を利用することにある。学生は旅行中あるいは旅行直後に自らの体験や感想を旅日記に記し、これを新聞社に郵送した。徳島の地方紙である『徳島毎日新聞』⁽⁹⁾は修学旅行シーズンになると新聞紙上にこの旅日記を連載し、訪問先の様子や修学旅行生の感想をそのまま県民に伝えたのであった。我々はここから修学旅行の形態のみならず、当時の交通・宿泊・観光など旅行の諸相、学生の実態とその社会関係、メディアと地域社会の連関など、様々な事象を考察する上で重要な情報を読み取ることができるのである。旅日記の掲載は早い場合では執筆から数日の内に活字が組まれ紙面を飾った。つまり新聞紙上において学生と地域社会の人びとの間には書き手と読み手の関係が成立しており、人びとは一定の興味関心を持ってこれら旅日記を読んでいたのである。このような旅日記は全国紙には掲載されることはなく、ローカルな話題を多分に伝える地方紙だからこそ載せられたものであった。そのタイトルと掲載日は文末別表に提示した通りであるが、その数は管見の限り 600 本以上に及ぶ。戦前期の旅日記は 1924 年（大正 13 年）に姿を現し、昭和 10 年代に隆盛へと向かい、1940 年（昭和 15 年）を最後に姿を消した。この間を「修学旅行日記の時代」、あるいは「旅日記の時代」と称してもよいだろう。

まず第 1 節では当時のメディアに掲載された旅日記を基に昭和前期の徳島県の中学校、高等女学校、師範学校、実業系学校が実施した修学旅行の実像を概観する。ここから当時の地域社会において修学旅行が人びとの関心事となっていたことが明らかとなるだろう。膨大な数の旅日記は長短、巧拙が様々であるが、読み物としても面白い。しかしその全てを取り上げることは出来ないで、その中から内容的に優れたものを例に旅日記の体裁、学生が旅先で見た世界と彼ら／彼女らの意識変化について分析を行う。徳島県においては徳島県立商業学校⁽¹⁰⁾、徳島県女子師範学校（女師）・徳島県立徳島高等女学校（徳島高女、併称して「女師・高女」）⁽¹¹⁾が大陸での修学旅行を実施した。ここでは旅日記の典型例として徳島商業学校の実施した旅行を扱うこととする。徳島商業学校の称するところでは、これが徳島県最初の海外修学旅行である第 5 章が聖地・聖蹟観光、朝鮮および満洲観光を詳述している。

(9) 徳島県立図書館および国立国会図書館所蔵分を使用した。一部例外を除き国会図書館の所蔵状況の方が良好であるが、2019 年末以来の感染症の流行拡大により移動に制限がかけられた為、徳島県立図書館所蔵分を中心に検討し、欠号部分を国会図書館所蔵分で補うという方法をとった。また同紙及び徳島のメディアについては徳島新聞五十年史刊行委員会編『徳島新聞五十年史』徳島新聞社、1997 年に詳細な沿革が述べられている。

(10) 現在の徳島県立商業高等学校。

(11) 現在の徳島県立城東高等学校。

った。

本稿では資料を引用するに当たり、旧字体を常用漢字に改め、踊り字は相応する語句に変換し、適宜句読点を補っている。また文中には「満洲」「満鮮」「鮮満」「支那」という表記が当たり前のように出てくるが、これは当時の日本人による呼称に従っている。満鮮旅行、鮮満旅行、満韓旅行などと記される大陸への修学旅行は「満鮮修学旅行」と表記を統一する。

第1節 昭和前期『徳島毎日新聞』に掲載された“修学旅行旅日記”

まずは当時の『徳島毎日新聞』の紙面に掲載された修学旅行「旅日記」の全体像を概観しておこう。文末に掲載した「別表 昭和前期修学旅行シーズン（4～6月）徳島県中等教育機関修学旅行関係記事（学校別）」を一覧されたい。これは便宜上1923年（大正12年）度から1941年（昭和16年）度の春季修学旅行シーズンの記事及び旅日記の題目と掲載日時を整理したものである。表の備考の※印は旅日記ではなく修学旅行の事実を報道する記事であることを示している。

なお興味深いことに誌面に掲載される旅日記は高等女学校のものが多く中学校など男子の通学する中等教育機関（学校名に▲印を付けたもの）のそれが少ない。この理由は定かではないので大方の教示を請いたい。

現在の公立学校の修学旅行が長くても6日を超えないのに対して、当時の徳島の修学旅行は10日間から2週間程度の旅程が組まれていた。文末別表からその行き先について見ると、まず特徴的なものとして、徳島中学校の九州修学旅行（1934年度、36年度）、徳島農業学校の農業実見を兼ねた愛知・甲州信州・静岡・伊豆大島・北海道研修（1934年度以降各年）、阿波中学校の皇紀2600年奉祝に合わせた樞原・伊勢への聖地巡拝（1940年度）と海部高女の樞原神宮奉仕活動（1939年度）がある。

これらを除いたその他の多くの学校の旅程は、「関西（京都・大阪・奈良）」「伊勢」「静岡東部と神奈川（伊豆・箱根・江ノ島・横須賀）」「東京」「日光」を組み合わせている。中には日光から「信州（善光寺）」「金沢」「天橋立」を周遊する、あるいはその逆ルートをとる学校もあった。徳島と本州との間の交通は徳島港・小松島港と神戸・大阪天保山の航路が中心であり、県中西部の学校では高松・宇高連絡船・岡山経由という道をたどることもあった。本州に渡ってからの都市間の移動は夜行を含めた鉄道を利用し、各観光地では観光バスやタクシーも活用している。早朝に目的地に到着した場合もほとんど休息も取らずに見学するなど、限られた日程の中で数多くの地点を巡るハードなスケジュールが組まれていた。旅日記は修学旅行で得た驚きや発見を叙述するとともに、端々に強行軍の旅路と疲労をうかがわせるくだりも散見される。それは第2節で見る徳島商業学校の満鮮修学旅行にも共通している。旅日記のそれぞれが交通史・観光史研究にとっても興味深いデータを含んでいるが、ここでは紙幅の関係上具体的な考察は出来ない。

奈良の樞原神宮、伊勢神宮、横須賀、帝都東京などへの訪問は天壤無窮の皇運を再認識し帝

国の成長・発展を学習するという意義を見いだすことができる。だが徳島発の修学旅行先で人気の箱根、江ノ島、日光、善光寺、金沢、天橋立は純然たる観光地であり、見聞を広げる以外の教育的目的は感じられない。いわば教育という名を借りた観光旅行と化していたのであり、当時においても修学旅行に対して批判の目が向けられることもあった。例えば『徳島毎日新聞』1932年（昭和7年）4月29日の記事は徳島女師師範・高等女学がこれまでの「多数の小使銭を必要とされて居た女学生修学旅行」を改め、東京旅行に際して不況の折「生徒の小使銭を極度に限定して十円以内と定めた」ことを報じる。この10円は本稿で後に挙げる根拠に従えば、今の感覚で大体3万円強に相当する⁽¹²⁾。これは土産などの購入や遊興の為に大金を所持する修学旅行生がこの頃現れていたことを示している。1936年（昭和11年）5月11日の記事は次のように警鐘を鳴らしている。

「中等学校生徒や小学生に取って最も楽しい修学旅行は団体生活を訓練し見聞を広める上で非常な効果のある事は疑ひないが、最近その効果を疑はしむるのみが却って逆に凶悪化を受ける事実が尠くない。」⁽¹³⁾

これに続けて修学旅行先・旅行後の学生の不祥事（旅行先の繁華を知った女学生の出奔、旅行先からの脱走、旅行後の態度悪化）の事例が紹介される。また日本が中国との全面戦争を開始し多くの戦死傷者が出ていた1938年（昭和13年）の5月6日の記事もまた修学旅行の観光旅行化を批判し、経費節減、引率教員の自制を要求している⁽¹⁴⁾。

このように規制・統制は次第に強化されつつあったのだが、観光旅行化の趨勢を抑えることは簡単なことではなかった。先に触れた1940年（昭和15年）の阿波中学校の聖地巡拝の旅においても、樞原神宮・伊勢神宮の他に奈良京都の名所、高松の屋島を旅程に組み込んでいることが読み取れる。風当たりの強くなってきた修学旅行に皇紀2600年奉祝という要素を加えつつ、観光を楽しむ姿は当時広く行われていたようだ⁽¹⁵⁾。

その修学旅行先の様子を逐一県民に伝えたのが本稿で考察するところの修学旅行「旅日記」である。このような旅日記はいつ頃から新聞に掲載されるようになったのだろうか。以下の表1は文末別表を基に各年度修学旅行シーズン（4月～6月）の修学旅行に言及した記事数（関係記事数）、旅日記を掲載した学校数（旅日記校数）、旅日記の連載本数（旅日記連載数）をまとめたものである。例えば女師・高女は関東・関西方面旅行と満鮮修学旅行の2本の連載を掲載することがあるので⁽¹⁶⁾、旅日記連載数は旅日記校数よりも多くなっている。

(12)「徳島高女修学旅行お小使節約」『徳島毎日新聞』1932年（昭和7年）4月29日。貨幣価値換算の根拠は本稿第2節の①を参照すること。

(13)「修学旅行の弊 近來続出の不祥事に教育者も疑い出す」『徳島毎日新聞』1936年（昭和11年）5月11日。

(14)「修学旅行へ県から注意 父兄の負担を軽減 引率教員は行動を慎め」（『徳島毎日新聞』1938年（昭和13年）5月6日）。

(15)前掲ケネス・ルオフ、2010年参照。

(16)1935年（昭和10年）の女師・高女はこの5年生の関東関西方面と満鮮方面に加えて3・4年生の東京

表1 『徳島毎日新聞』掲載修学旅行関係記事及び“旅日記”数

	関係記事数	旅日記校数	旅日記連載数	備考
1923 (大正12年)	3	—	—	
1924 (大正13年)	12	2	2	
1925 (大正14年)	2	—	—	県より修学旅行自粛推奨
1926 (大正15年)	3	2	2	
1927 (昭和2年)	7	3	3	
1928 (昭和3年)	6	3	3	
1929 (昭和4年)	—	—	—	全て欠号
1930 (昭和5年)	1	—	—	欠号部分多く詳細不明
1931 (昭和6年)	7	4	5	女師高女 連載2本
1932 (昭和7年)	5	3	3	欠号部分多く詳細不明
1933 (昭和8年)	—	—	—	欠号部分多く詳細不明
1934 (昭和9年)	8	8	9	女師高女 連載2本
1935 (昭和10年)	6	7	9	女師高女 連載3本
1936 (昭和11年)	4	9	10	女師高女 連載2本
1937 (昭和12年)	7	8	9	女師高女 連載2本
1938 (昭和13年)	7	9	10	女師高女 連載2本
1939 (昭和14年)	2	9	11	女師高女・徳商連載各2本
1940 (昭和15年)	2	6	6	満鮮旅行直前で中止
1941 (昭和16年)	1	—	—	

出所：文末別表「昭和前期修学旅行シーズン（4～6月）徳島県中等教育機関修学旅行関係記事（学校別）」を整理。

管見の限り1923年（大正12年）以前の『徳島毎日新聞』の紙面には旅日記を確認することはできない。同年は修学旅行に関する報道記事が3本みられるだけである（文末別表の備考の※印）。これらは日程・旅程、あるいは出発や報告会開催を伝える短信に過ぎない。

修学旅行旅日記の連載は1924年（大正13年）5月16日に始まる徳島商業学校の「旅路より」がその最初である。これは3回連載された。5月17日開始の「三好高女東京修学旅行」は合計12回連載され旅行の状況と学生の感想を詳細に記している。同校は徳島→神戸大阪→奈

 方面旅行の旅日記を掲載した。

良→伊勢→名古屋→江ノ島と鎌倉→東京→日光→長野善光寺→名古屋→京都大阪→徳島という長大なルートの旅行を敢行した。これが徳島の修学旅行の黄金ルートである。

しかし翌25年（大正14年）度は徳島県内で「今回愈々各中等学校長に向け修学旅行の如き旅費の多額に要する程度のもは成るべく見合す様通牒」があり、修学旅行の実施は見送られた⁽¹⁷⁾。それ故、この年は旅日記は見られない。

1926年（大正15年）には修学旅行に対する自粛は解除されたようである。旅日記は「三好高女修学旅行」（5月19日～6月9日）と「徳島女師高女旅行団」（5月22日～31日）の連載2本であった。

翌、1927年（昭和2年）度の旅日記は女師・高女学生の「初旅日記」が5月22日から31日にかけて、県立農業学校学生の「旅のたより」が5月14日から24日にかけての紙面に連載された。なお昭和2年度で注目し値するのが徳島県立商業学校の「満鮮旅行記」であるが、これは本稿第2節で詳論する。以上、昭和2年度の旅日記は3校分3本である。

続く1928年（昭和3年）度もほぼ同様で、旅日記は徳島商業の「徳商鮮満旅行記」（タイトルは編によって異なる）と女師・高女の「徳島女師高女旅行団より」、徳島農業の「徳農旅行団」、以上3校3本の連載である。後の昭和10年代の旅日記連載の隆盛に比べれば、この大正から昭和前期にかけての時期に『徳島毎日新聞』に掲載された旅日記はそれほど多くはない。

1929年（昭和4年）度と1930年（昭和5年）度は徳島毎日新聞の所蔵状況が徳島県立図書館および国立国会図書館ともに極めて悪く、旅日記の詳細は分からない。

この2年の空白を挟んだ後、1931年（昭和6年）度は美馬高女1本、富岡高女1本、女師・高女の東京方面旅行と満鮮修学旅行の各1本、及び徳島農業の北海道旅行1本の計5本の連載が確認される。1932年（昭和7年）度は6月分がすべて欠号であるのでおそらくは遺漏があるだろう。女師・高女と徳島師範の関西・関東旅行、三好高女の修学旅行旅日記3本のみ存在を知ることができるが、特に三好高女の旅日記は1日分しか無い為概要は不明である。また同年は満洲事変の翌年にあたり、該地の治安が危ぶまれたことにより女師・高女と徳島商業学校満鮮修学旅行は中止となった。

翌1933年（昭和8年）度の『徳島毎日新聞』は徳島県立図書館・国会図書館ともに未所蔵である為、旅日記の掲載状況は分からない。これまでの考察を踏まえればおそらくは1932年（昭和7年）の頃までは、修学旅行旅日記の掲載は盛んではなかった、少なくとも昭和初年より微増傾向にとどまると推測していいだろう。

ところが1934年（昭和9年）度以降の紙面には多くの旅日記が見られるようになる。34年度は女師・高女、名西高女、富岡高女、美馬高女、香蘭高女、小松島高女、撫養高女の各高等女学校と徳島農業、合計8校の旅日記が連載された。女師・高女は5年生の東京方面と満鮮修学旅行の各1本を掲載しているので本年の旅日記は合計9本と、この年は前々年度に比べて倍

(17)「中等学校生徒県外旅行に反対」『徳島毎日新聞』1925年（大正14年）4月25日。実際に女師・高女が夏期恒例の希望者による1週間程度の登山旅行を中止したという記事がある。「徳島女師高女登山中止」『徳島毎日新聞』1925年（大正14年）4月28日。

1937年（昭和12年）の旅日記は前年より1校減少し、女師・高女（満鮮方面と関東方面の2本）、三好高女、富岡高女、香蘭高女、名西高女、撫養高女の6校の高等女学校並びに徳島商業、徳島農業、以上8校分（合計9本）が確認できる。そしてこの年は修学旅行シーズンが終わる6月に満洲農業移民の送出が本格実施、7月には日中戦争全面化の契機となる盧溝橋事件が勃発した。この日中全面戦争前夜の徳島において修学旅行旅日記はどのように扱われていたのだろうか。前ページの図は『徳島毎日新聞』1937年（昭和12年）5月11日の複数頁に亘って掲載された旅日記を抜粋、再配置したものである。右上は女師・高女が満洲国の新京にて鄭孝胥國務総理を表見訪問した記事（「元気で新京視察」）である。その他、上から順番に富岡高女（「富岡高女旅信」）、三好高女（「三好高女旅記」）、徳島商業学校の満鮮修学旅行（「徳商鮮満旅記」）、女師・高女の満鮮修学旅行（「女師・高女満鮮旅信」）、同じく東京旅行（「徳女東京旅記」）の日記・私信が同日に掲載された。主に高等女学校の修学旅行旅日記は県民にとって関心を引く記事となっていたのである。

盧溝橋事件は当初の想定と異なり日中の全面戦争の引き金となった。12月に首都南京を占領することで人びとは戦勝に沸き立った。しかし1938年（昭和13年）の4月から5月の徐州攻略戦の後にも戦局は拡大していった。連戦連勝を伝える記事とは裏腹に、地域社会での人員の動員が強化され、戦死傷者の増加が人びとにも実感されるようになった。この年の紙面は各地で実施される村葬や慰霊祭の記事が多く見られるようになる。

それにもかかわらず修学旅行は停止されることはなかった。徳島商業と女師・高女の満鮮修学旅行もこれまでと同様に挙行された。全体として見ればこの年は女師・高女（満鮮修学旅行と関東方面の2本）、三好高女、香蘭高女、美馬高女、名西高女、撫養高女、富岡高女、板西高等実業女学の8校の女学校、そして徳島商業の合計9校分の旅日記（計10本）が連載された。これは日中戦争の全面化以前と同じ水準である。この時の徳島地域社会の世相を端的に伝える一例を示せば、下図のように各村での慰霊祭の実施（「牛島村葬」「大山村葬」）を報ずる一方（上段から下段）、徳島商業学校の満鮮旅行日記（「徳商鮮満旅行団」）が掲載されている（下段）。また左の広告は前線への慰問袋の販売を「僅か四、五銭の送料で戦線の勇士が大喜びの慰問品」と宣伝する。



1938年（昭和13年）10月の武漢占領以降は戦局は比較的小康状態になった。1939年（昭和

14年) 度には5月にノモンハン事件が勃発するものの、戦争はまだ大陸の出来事であり、内地の人びとはまだ平和と大衆文化、消費や娯楽を享受する機会に恵まれていた。この年は前年と同様9校(計11本)の旅日記が見られた。富岡高女、香蘭高女、女師・高女(満鮮及び東京)、名西高女、撫養高女、海部高女の6校の高等女学校、加えて徳島商業、徳島農業及び撫養商業の3校である。その行き先も女師・高女と徳島商業の満鮮修学旅行を始め、関東、伊勢、京都奈良、北陸と、これまで同様の観光旅行的な性格を帯びていた。旅日記の掲載本数はこの年をピークとする。泥沼化する戦局と修学旅行など大衆娯楽の隆盛という矛盾した状況がこの時期を特徴付けている。ただし最後の海部高女の旅行目的が樞原神宮での奉仕活動であったという点は注目すべきである。大半の旅行は従来と変わらなくとも一部の学校が翌年の皇紀2600年奉祀に向けた活動を取り入れつつあった点は興味深い。

翌1940年(昭和15年)は6校(香蘭高女、富岡高女、撫養高女、板西高等実業女学4校の女学校と徳島農業、阿波中学)へと減少した。また旅日記自体が短く簡素化されたように見える。同年6月、全国的に不要不急の修学旅行の自粛が求められ、各校の修学旅行は縮小した。また女師・高女の朝鮮・満洲旅行はその直前になって中止が決定した。

「交通輸送の関係上修学旅行団の口止が叫ばれてゐる際、徳島女子高女校の満鮮修学旅行も六月四日出発予定であったが今に文部省の許可が来ないので半ば中止の形大となつてゐるが両校では許可あり次第プランを立直し決行する事となつてゐるが……今の処許可が来ないので行悩んで居る。尚関東方面の修学旅行団は予定の如く行ふ筈である。」⁽¹⁸⁾

5月20日の記事によれば関東方面の旅行は実施の見込みであったが、満鮮修学旅行については出発直前になって文部省から許可が下りなかったようである。この年、徳島商業学校の満鮮修学旅行も行われることはなかった。また旅行に対する規制が次第に強まり観光的要素を排除する傾向が生まれた。その動向を反映して阿波中学などは「聖地巡拝」と称して伊勢神宮など皇国神話に関連した土地を訪問する修学旅行を実施するのである。同校は宇高連絡船経由で関西へ向かったが、岡山からは専用の特別列車に乗車したと伝えている⁽¹⁹⁾。ただしその旅程の一部に京都や屋島などの観光地を入れていることから、従来の観光という要素も組み入れようという意図を見ることができる。1940年代初頭の人びとは情勢と折り合いをつけつつ、旅行を楽しもうとしていたのである。ただし小学校の修学旅行に至っては、この1940年をもってほぼ中止となったと考えられる⁽²⁰⁾。この年9月、北部仏印進駐、日独伊三国軍事同盟にて日本と米英との対立は深刻の度を増した。

翌1941年(昭和16年)度、修学旅行旅日記はもはや『徳島毎日新聞』の紙上を飾ることはなかった。紙面には成人の研修や視察を名目とした旅行の記事を見いだすことができるが、学生たちについては勤労奉仕や心身の鍛練などといった健全な国民像を伝える報道を見いだすの

(18) 「女師高女校満鮮旅行行悩み」『徳島毎日新聞』1940年(昭和15年)5月20日。

(19) 「阿波中学校聖地巡拝旅行 第一信」『徳島毎日新聞』1940年(昭和15年)5月20日。

(20) 「列車混雑緩和のため小学校の修学旅行禁止 大規模の学術大会等も制限」『徳島毎日新聞』1940年(昭和15年)5月11日。

みである。そして12月に日本はアメリカ・イギリスなどとの戦争へと踏み切った。戦時下においてしばらくは旅行に出かける風潮は見られたが、1942年（昭和17年）以降はほとんどその姿を消した。修学旅行旅日記の時代はその前年に終わりを告げていたのである。

第2節 徳島県立徳島商業学校の満鮮修学旅行：徳島県初の海外修学旅行

この修学旅行旅日記には何が書かれているのだろうか。本稿ではその具体例の一つとして徳島県立徳島商業学校が挙行した満鮮修学旅行の旅日記を取り上げる。その全文は本文の後に掲げたので適宜参照されたい。

このような大陸への修学旅行が本格的に実施されるのは日露戦争後に朝鮮と南満洲での權益が強固なものとなってからのことである。本稿冒頭でも言及したように戦争翌年の1906年（明治39年）7月から8月にかけて、全国の中学生・教職員延べ3,694人が文部省と陸軍省の企画に参加し満洲を訪れた。徳島でも徳島中学校（現、徳島県立城南高校）の学生が満洲へと赴いた。高媛氏のまとめるところでは徳島中学校の14名の学生と教諭1名が参加したこととなっているが、実際の随行教員数は4名以上であり、他校の教師も含んでいることが報道より読み取れる。その1人である徳島高等女学校校長の山岡光太郎氏と他2名は奉天にて一行より別れ朝鮮方面へ視察に向かった⁽²¹⁾。この満洲修学旅行についても『徳島毎日新聞』に「満韓葉書だより」という旅日記が全14回にわたって掲載されたが、執筆者は学生ではなくこの山岡高女学校校長である⁽²²⁾。高媛氏の論考の文末附表（表4）で引率教員が“倉塚源太郎”とされているのは当時の報道に従えば“鞍橋”教諭が正しい⁽²³⁾。また『徳島中学校城南高校百年史』は「満洲旅行」というコラムを設けこの旅行について簡単に触れている。参加者として第5年生割石四郎、原菊太郎、第4年生武田次郎、横田精一、第3年生大西嘉七、蜂須賀喜彰、那波利貞の7名の名前だけを記している⁽²⁴⁾。この学生の中的那波利貞氏は藩政時代の漢学者の家系を継ぐ東洋学研究者として著名である。若き日の彼が満洲で何を見たかは興味深い問題であるが詳細は不明である。ただし徳島中学校の満洲旅行は全国的な企画への応募であり学校独自が計画したものではなかった。この徳島中学校有志の満洲渡航もまた検討すべき課題であるにせよ、徳島の学校が主体的に取り組んだ試みとしては徳島県女子師範学校・徳島県立徳島高等女学校（女

(21)「徳中満韓旅行生帰県期」『徳島毎日新聞』1906年（明治39年）8月17日。「徳中満韓見学一行の消息」『徳島毎日新聞』1906年8月18日。

(22)この頃の『徳島毎日新聞』には欠号が目立つため全てを確認することは出来ないが、管見の限り同紙の1906年（明治39年）7月29日、8月7日、10日、14日、15日、17日、21日、23日、24日に連載が確認される。

(23)「徳中満韓旅行生の消息」『徳島毎日新聞』1906年（明治39年）7月29日、「満韓旅行生一行の消息」『徳島毎日新聞』1906年8月14日。

(24)前掲高媛、2010年、文末附表。城南高校百年史編纂委員会『徳島中学校城南高校百年史』城南高校百年史編纂委員会、1975年、p.96（同校校友誌『渦の音』12号、1906年に依拠、筆者未見）。

師・高女)と徳島県立徳島商業学校の2校の取り組みを挙げることができる。

この中で女師・高女の満鮮修学旅行については井上銀晴編『続・帰らざるふるさと徳島』に「朝鮮・満洲修学旅行」と題して写真と回想文が収録されており、県内でも一定の認知度がある⁽²⁵⁾。1942年(昭和17年)刊行『創立四十周年記念沿革史』によれば満鮮修学旅行の挙行は1928年(昭和3年)に本校に赴任した田辺校長の発案に依るものであるという。同校長は前任地が熊本県第一師範学校であり、1926年(大正15年)に満鮮修学旅行を実施した経験があった。それをもとに1930年(昭和5年)に女師・高女でも実施する運びとなった。同沿革史は、
「然も之は、本県として男女を通じ団体の種類を問はず、鮮満への団体旅行を実施する最初の試みとして、慇からず世人の注意を惹いた。」

と記し、同校の試みが県内初であると述べる⁽²⁶⁾。残念ながらこの1930年度の女師・高女による満鮮修学旅行の詳細は、校友誌である『後彫』の当該年度分が存在せず確認することができない。また『徳島毎日新聞』も5月と6月上旬がほとんど欠号であり、どのように旅日記として県民に対して伝えられたかが分からない。

一方、徳島商業学校の満鮮修学旅行は現在、女師・高女のそれに比べて知名度が低く後に言及されることはない。しかしながら同校編纂の『徳商五十年史』は「本校における初の試みとして」1927年(昭和2年)5月2日に「第1回鮮満旅行」が実施されたと述べている。当時の『徳島毎日新聞』の記事には「徳島県最初の此の大旅行の決行」と報じられた⁽²⁷⁾。加えて彼らが帰校して一月余りたった6月26日には一般市民向けに報告会も開催された。

「徳島商業の本年度第五学年修学旅行は従来の東京方面を変更し広く海外の智識を得る目的で遠く鮮満の地を旅行したが、今回の旅行は同校はもとより県下各学校の修学旅行としても全く嚆矢であり、従って今後の団体旅行界に一時代を劃するものであるとし、同校講演部主催の下に『学生の見たる朝鮮』『学生の見たる満洲』とを一般に紹介するため六月廿六日(日曜日)午後一時より同校講堂にて左のプログラムにより鮮満旅行報告講演会を公開することになった。出演者は左の通り。

開会の辞	柏原虎太郎
鮮満へ第一歩	森本 博
仁川より京城へ	豊川 章一
鮮都の印象	高田 益之
西朝鮮所感	高井 一男
石炭の撫順より奉天迄	菊川 儀雄
戦跡の旅順より虎の大連へ	秋山 健二
朝鮮の風習	吉田 □

(25)井上銀晴編『続・帰らざるふるさと徳島』私家版、1974年、pp.220-221。

(26)徳島県女子師範学校・徳島県立徳島高等女学校『創立四十周年記念沿革史』同、1942年、pp.51-52。

(27)徳島商業高等学校『徳商五十年史』同、1960年、pp.147-154。「徳商昭和二年度鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』1927年(昭和2年)5月6日。

朝鮮を見て	桜川 影雄
見たままの満洲	岡田俊太郎
鮮満私見	武井 清
閉会の辞	三原 忠夫 ⁽²⁸⁾

徳島商業学校弁論部の主催の下、合計 10 人の学生がそれぞれの興味に従って報告を行ったようである。その内容は修学旅行生が旅先で見た様々な事柄に及ぶ。この 2 日後の紙面には次のような記事が掲載された。

「徳島商業学校辯論部主催の満鮮事情講演会は廿六日午後一時から同校講堂に於て開催した。聴衆は約二百名で、既報生徒其れ其れ満鮮を見た儘の人情風俗やら所感やらを演べ五時三十分盛会裡に閉会した。」⁽²⁹⁾

報告会は 26 日午後 1 時から 5 時 30 分まで 4 時間以上にわたって続いた。聴衆はおそらく延べ人数で 200 名と盛会であったという。残念ながら彼らが何を壇上で語ったかは記録が残っていない。しかし徳島商業学校の挙行した満鮮修学旅行は徳島初の画期的な快挙と受け止められ、徳島の市井の人びとの耳目を集めたと言えよう。

ただ彼らの満洲・朝鮮行きが計画当初から熱烈に希望されたものではなかった点は指摘しておかねばならない。『徳商五十年史』は校友会誌（第 22 号、筆者未見）を引用して当時の事情を次のように伝えている。

「『一寸毛色をかへて鮮満地方へ修学旅行をしたら』とは学校での可成り長い間の懸案だったのです。でも従来どうしたものか—或は未だ機運が熟さなかったのか—生徒間にあまり、さうした方面への興味を、そそらなかつたようです。『鮮満へ行っても悪くはないが、矢張り手近な関東地方へでも行く方が面白いよ』といふような訳で今年（昭和二年）卒業した先輩なども、その修学旅行をする時に『内地』『朝鮮』とに分つて札入をして見たが、後者への希望者がその半数に過ぎなかつたといふことです。……然し『蒔いた種は何時かは生へる』といふたとへの如く自然的の現象か或は時代の推移に伴ふ近代的副産物たる—人口増殖—食糧問題—移民奨励等々によって、漸次人心を浸蝕しつつある海外発展思想に不知不識の間に刺戟を受けたせいも『五年生になったら鮮満へ行くんだ』といふ私達の斯うした考えは、いつとはなしに固く強いものになってしまった。そして四年生の時には、その事に関して主任の先生方から得た口振りから私達のさうした強固さは更に確実性を帯びて来た訳です。」⁽³⁰⁾

この回想によれば校内で満鮮修学旅行について数年前から検討されていた。しかし当の学生たちの間では盛り上がり欠けていたようである。文中の「関東地方へでも行く方が面白いよ」、「『内地』『朝鮮』とに分つて札入をして見たが、後者への希望者がその半数に過ぎなかつた」

(28) 「『学生の見た満鮮』徳島商業旅行団の公開報告講演会」『徳島毎日新聞』1927 年（昭和 2 年）6 月 23 日。

(29) 「徳商校辯論部の満鮮講演」『徳島毎日新聞』1927 年（昭和 2 年）6 月 28 日。

(30) 徳島商業高等学校『徳商五十年史』同、1960 年、pp.147-154。

という記述は、彼らの意識が内地以外にはそれほど向いていなかったことを示している。本節末尾でも触れる様に当時の徳島は俗に「進取の気風」「海外雄飛の気象」乏しき土地として自嘲気味に語られるところであった。

しかし大正から昭和に変わる頃には人口増加、食糧問題、移民などの問題が議論される中で対外拡張の気運が高まった。前稿で論じたように日露戦争後 20 年以上が経過し人びとの満洲に関する記憶は徐々に薄れつつあったのだが、この頃に再び当地を意識するようになったのである⁽³¹⁾。また中国においても 1926 年の国民革命軍による国内統一戦争（北伐）開始など、新たな変化の胎動が生まれていた。この動きは中国各地における列強の利権とも衝突し、日本の世論もまた中国への関心を高めていた。この日本社会の変化と中国情勢の進展の中で徳島商業学校の満鮮修学旅行も実施が検討されるようになった。そしてそれは 1927 年（昭和 2 年）度に徳島県立商業学校 5 年生の学生の徳島最初の海外修学旅行へと結実したのである。

この満鮮修学旅行の旅日記が『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 6 日から 6 月 10 日までの紙面に掲載されている。記事の構成は次の通りである。

- 「徳商昭和二年度鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 6 日
- 「徳商昭和二年度鮮満旅行記（二）」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 7 日
- 「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 10 日
- 「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 11 日
- ※「徳商学生団来る 県人の熱誠なる歓迎」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 12 日
- 「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 12 日
- 「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 13 日
- 「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 14 日
- 「徳商鮮満旅行団通信」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 17 日
- 「徳商満鮮旅行記」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 22 日
- 「徳商満鮮旅行団通信」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 23 日
- 「徳商満鮮旅行団通信」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 24 日
- 「徳商満鮮旅行記（四）」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 26 日 注：（五）の誤りか。
- 「徳商満鮮旅行記（六）」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 6 月 1 日
- 「徳商満鮮旅行記（七）」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 6 月 3 日
- 「徳商満鮮旅行記（八）」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 6 月 5 日
- 「徳商満鮮旅行記（九）」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 6 月 7 日
- 「徳商満鮮旅行記（十）」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 6 月 8 日
- 「徳商鮮満旅行記（十一）」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 6 月 9 日
- 「徳商満鮮旅行記（十二）」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 6 月 10 日

(31) 荒武達朗「旅順の“剣山記念塔”と戦前期徳島の地域社会」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』28、2020 年。この前稿は昭和初年の旅順の東にある「剣山（けんざん）記念塔」の建設と顕彰、並びに日露戦争とそれにより獲得された権益に対する再認識を論じた。

備考：※印は徳島毎日新聞社京城支局による報道記事である。

以上 19 編の日記（他に京城支局からの記事 1 編あり）は参加した 5 年生 2 名の執筆によるもので、前半部分の出発から朝鮮半島を抜ける（5 月 14 日の記事）までが X 氏の担当、後半部（5 月 17 日の記事以降）朝鮮国境から満洲、帰国までが Y 氏の担当であった。“徳島初”であるが故か、各編が相当の分量を有し旅行の様子、執筆者の見聞した事物を詳細に伝えており史料的価値が高い。本稿ではその一部を抜粋しつつ満鮮修学旅行の実態、学生たちの見た日本内地・植民地朝鮮・中国東北地方（満洲）の様子、そこから得た印象を紹介する。記述を引用するに際しては“『徳島毎日新聞』掲載日時”として記事標題は省略する。

①昭和二年度徳島商業学校満鮮修学旅行の概要

まず日記の記述から彼らの旅程を整理する。5 月 6 日の記事は出発の前段階から準備の様態を記している。

「我等が鮮満方面旅行を企図すると聞かれるや四月十一日といふに早くも大阪鮮満案内所員が滴翠閣へ出張せられ、徳商生一同に鮮満旅行宣伝活動写真を見せて下さって、其後奔走を続けられ、五月一日（日曜日）所員学校へわざわざ出張せられて内地鮮満周遊券及旅館券を発行して下さい。」（『徳島毎日新聞』5 月 6 日）

4 月 11 日に大阪の鮮満案内所員が徳島に出張し徳島公園（現、徳島中央公園）にあった滴翠閣にて鮮満旅行宣伝活動写真を徳商生に向けて上映した。その後諸準備を経て、5 月 1 日、すなわち出発の前日に同所員が再度来徳し、内地鮮満周遊券と旅館券を交付したという。翌 5 月 2 日、空模様は「然し天候を憂ふる色が時々現れる『雨かなア』実になさけない声だ」とすぐれなかったが、「校長を始め先生達や後に残る友達が見送りに来て呉れ」「旅行隊は徳日新聞写真班のカメラに収まり」「汽笛一声我々徳商旅行団は懐しの徳島に暫くの別れを告げ長途の旅へと上った」のである（『徳島毎日新聞』5 月 6 日）。

以下に旅日記より読み取れる旅程を示す。各日程に【括弧】で附した日付はその活動に対応する記事が徳島毎日新聞に掲載された日を示している。旅行日と記事掲載日のタイムラグを見ると、徳島出発から広島までの記事がそれぞれ 4 日後の紙面に載り、下関（乗船後は発信できないので実質上釜山以降）から朝鮮に接する中華民国東北地方の安東到着までの各回は掲載まで 6 日の時間差がある。中華民国との国境を越えた後、5 月 9 日の安東見学の情景を描いた旅日記はその内容から判断して安東で発信されたものではない。この記事は 5 月 17 日、つまり安東見学より 8 日後の紙面に掲載された。徳島商業の旅行団は 5 月 17 日夕方に徳島に帰還しているので、この日記は奉天もしくは関東州の大連から徳島へと送られたはずである。5 月 10 日以降の日記はそれぞれ 5 月 23 日以降順次掲載されている。またこの部分は Y 氏の執筆にかかるが、これより前の X 氏の日記に比べて一篇ごとの分量が増え修辭を凝らしたものとなっているので、あるいは帰徳後に推敲を重ねた上で新聞社に提出された可能性もある。

5月2日【記事掲載5月6日】 出発 徳島→小松島→兵庫 神戸自由行動 →車中泊
5月3日【以下同じ5月7日】 →海田市→呉 呉軍港見学 →広島 広島大本営等見学
広島泊
5月4日【5月10日】 広島→宮島 宮島見学 →下関 下関自由行動 →船中泊
5月5日【5月11日】 →釜山 龍頭山見学 →大邱 大邱市内・商業学校見学
→車中泊
5月6日【5月12日】 →永登浦 →仁川 市内・港湾・月尾島見学 →京城 朝鮮神宮
参拝 朝鮮物産陳列所見学 夕方市内自由行動
○本町通り（現、明洞キル）から鐘路まで道に迷い10時旅館帰着 京城泊
5月7日【5月13日】 朝鮮銀行・南大門・府庁・京城普通学校・総督府・昌慶苑見学
→車中泊
5月8日【5月14日】 →平壤 平壤神社・玄武門見学 →新義州 鴨緑江の鉄橋を徒歩
で満洲へ渡る 安東日本人町自由行動 9時旅館帰着 安東泊
5月9日【5月17日・ここまでX氏の執筆】【5月22日・ここからY氏の執筆】
安東市街見学 油房・支那人街見学安東 →奉天 奉天市内見学 奉天泊
5月10日【5月23日】【5月24日】【5月26日】 奉天 →撫順 撫順炭坑見学
→ 奉天 奉天泊
5月11日【6月1日】 北陵から奉天市内・満蒙毛織会社見学 →車中泊
5月12日【6月3日】【6月5日】 →大連 →旅順 203高地・博物館・表忠塔・白玉
山・東鶏山北堡壘見学 →大連 大連泊
5月13日【6月7日】 大連港埠頭事務所・満鉄本社・満鉄病院・大連商業学校・沙河工
工場・星ヶ浦・満蒙物資参考館見学 夕方、大連市内自由行動 大連泊
5月14日【6月8日】 大連 →船中泊
5月15日【6月9日】 船中泊
5月16日【6月10日】 →関門 下関・門司自由行動 →船中泊
5月17日【6月10日】 →神戸港 →兵庫港 →小松島 →徳島

この徳島商業学校の満鮮修学旅行は15泊16日に及び、他の徳島発国内修学旅行の旅程（大体10日から2週間程度）よりも長い。旅行の手配を行う鮮満案内所が発行した『鮮満支観光旅程（大正11年3月改訂）』によれば東京発14泊15日の学生団体旅行代金が96.95円である⁽³²⁾。徳商旅行団も同様の行程であるが、広島で余計に一泊している。徳島から下関への交通費は東京発よりは安い、この広島での一泊分の費用がかかっている、全体としての旅行代金はあまり変わらないと考えていいだろう。これがどれほどの価値を持つかは物価と比較するか、或いは所得と対照するかで判断が分かれるところである。ここでは給与を基にその負担額を考

(32)南満洲鉄道株式会社鮮満案内所『鮮満支観光旅程（大正11年3月改訂）』南満洲鉄道株式会社鮮満案内所、pp.25-36。

えてみたい。1926年（大正15年＝昭和元年）9月より1年間かけて行われた内閣統計局の調査によれば、全国六大都市を中心とする調査地の給料所得者一世帯当たりの収入は平均で月額137.17円であった⁽³³⁾。2020年（令和2年）度日本の勤労者世帯の「勤め先収入」の月額平均は473,297円である（ここから直接税・社会保険料など世帯全体で97,946円が差し引かれる。2倍強に及ぶ正規・非正規格差は考慮に入れない）⁽³⁴⁾。昭和2年と令和2年を単純に比較することはできないが、満鮮修学旅行が世帯当たりの収入の約70%を占めているとすれば、今の我々の実感するところでは大体33万円の旅行となるだろう。世界的感染症拡大直前の2019年度の修学旅行について行われた公益財団法人全国修学旅行研究協会の調査に依れば、全国公立学校の海外修学旅行の費用の平均はニュージーランド、アメリカ、フランスが25万～27万円、私立高等学校ではオーストラリアとニュージーランドが約30万円、アメリカ本土が約33万円、ヨーロッパが約33万～36万円となっている⁽³⁵⁾。つまり徳島商業学校そして徳島女師師範・高等女学校の満鮮修学旅行の負担額は、私立高等学校に通う高校生のアメリカ・ヨーロッパへの修学旅行と同程度とすればイメージしやすい。

満鮮修学旅行の日程は過密であり全行程中車中泊が3回（神戸→海田市、京城→平壤、奉天→大連）、船中泊が5回（関釜連絡船1泊、大連航路3泊、瀬戸内航路1泊）であった。この中で下関、京城、安東、大連、門司で自由行動が許可されたことが確認されるが、それ以外は基本的に官庁・機関・施設・戦跡及び景勝地を訪問するプログラムが詰め込まれていた。例えば釜山では午前8時10分に上陸10時出発、大邱は午後1時頃到着10時出発、平壤は午前6時前到着、10時出発と滞在時間が僅かであったにもかかわらず、市内の観光地・施設などを駆け足で巡っている（『徳島毎日新聞』5月11日、14日）。この短時間の訪問を有意義なものにする為に貢献したのが各地の県人会である。この点については後に述べてみたい。

前述の通り満鮮修学旅行は満鉄鮮満案内所の事前説明と手配した周遊券とクーポン券に基づいて実施された。そのため実施校はどれもよく似たルートをとることとなる。実際、現地では幾つかの学校が離合しながら行程を共にしていたようだ。

「（関釜連絡船にて）今夜は熊本商業、香川女子師範と同乗だ。」（『徳島毎日新聞』5月10日）

「（仁川月尾島にて）そこで山口中学と一緒にになった。ずぼんに白線を入れてあって大層八釜敷いやつだ。」「（京城の旅館にて）山口中学校が又先へ休息して居た。」（『徳島毎日新聞』5月12日）

(33)内閣統計局『労働統計要覧. (昭和6年版)』内閣統計局、1931年、pp.287-315。

(34)総務省統計局・家計調査「第1-2表1世帯当たり1か月間の収入と支出（総世帯のうち勤労者世帯）」より。<http://www.stat.go.jp/data/kakei/index.html>。

(35)（公財）全国修学旅行研究協会『2019（平成31・令和元）年度全国公私立高等学校海外修学旅行・海外研修（修学旅行外）実施状況調査報告』全国修学旅行研究協会、2021年1月、「Ⅲ 2019（平成31・令和元）年度全国公私立高等学校の海外修学旅行実施状況」の「5 実施学年・実施月・旅行日数・旅行費用」http://shugakuryoko.com/chosa_3.html。

「(撫順炭坑にて) 此処で私達はお隣の香川女子師範学校の旅行団と一緒にになり、撫順見学総ての行動を共にしてきた。」(『徳島毎日新聞』5月26日)

「(旅順戦跡にて) 一緒になったものには熊本商業、八幡浜商業、香川女子師範、愛媛女子師範等がある。」(『徳島毎日新聞』6月3日)

「(大連一門司間にて) 共に乗った福山師範、大分農業、熊本商業、香川女子師範皆甲板へ出て来て輪投げに興じ退屈な海上の昼を過ごしてゐる。」(『徳島毎日新聞』6月9日)

当時、主に西日本を中心とする各県の中学校、師範学校、女子師範学校、商業学校、農業学校など多彩な中等教育機関が満洲・朝鮮へと修学旅行団を派遣していた。

徳島商業の学生が他校に対する意識を述べる事例は多くはないが、上の『徳島毎日新聞』5月12日に“山口中学校”の学生に対する対抗心が見えて興味深い。もっともこのくだりは校友会誌に再掲される際には削除されている⁽³⁶⁾。撫順や旅順は満鮮修学旅行の中でも欠くことのできない訪問地であったが、ここでは数校の旅行団が一緒に行動した。この内、香川女子師範学校(現、香川大学教育学部)は下関を出てから門司に帰るまでほぼ同一の旅程をたどっている。船中はこの季節の乗客の多くが修学旅行の学生であった様だ。1935年(昭和10年)の女師・高女の旅日記(校友会誌に掲載)には次のように記されている。

「六つの中等学校を満載したこの吉林丸は、正に学生丸の感。あちらにもこちらにも男学生が輪投げに興じてゐる。女なるが故に仲間にも入れて貰へず、船室に引きこんで連日の睡眠不足の取り返し。」⁽³⁷⁾

この「満載」「学生丸」という表現から修学旅行シーズンの大陸航路が学生で貸し切り状態であったことが読み取れる。各学校はほぼ同一の旅程の一種のパッケージツアーに参加していた。この団体旅行の増加と発展が当時の「旅の大衆化」を推進したのである⁽³⁸⁾。女師・高女の日記からは男子学生と女子学生の関係性も見えて面白い。一方、この点について徳島商業の学生の日記にも女学生に言及する部分がある。5月17日徳島帰着直前の淡路島東部沖合の船中で、

「由良辺りで女学校の旅行団の乗ってゐる船とすれちがったが只黙々と行き過ぎてしまった。こちらの船には白い手巾がひらめいてゐたのに。」(『徳島毎日新聞』6月10日)

と、若干恨みがましい文を書いている。男女間の交流が大っぴらには憚られる時代であった。なお、文末表の事例から類推するに、この女学校は徳島の女師・高女であったと考えられる。彼女らは5月17日徳島から船で神戸へ渡り、その後関東と関西を巡った。

さて徳島商業学校の修学旅行団の活動は、すべて満鮮案内所を通じた包括的な手配によるものであったわけではない。各訪問地での彼らを実際にサポートしたのは現地で暮らす同校の卒業生や徳島県人会であった。いくつか例を挙げれば、

「(大邸) 多数の県人の出迎へを受けて駅前小山旅館へ行って休息し小憩の後先輩の御案内で市内見学」「県人会から招待を受け学校食堂で夕食を御馳走になった。先輩県人大邸

(36) 前掲徳島商業高等学校『徳商五十年史』1960年、pp.151-52に引用。原典筆者未見。

(37) 「朝鮮満洲への旅」『後彫』35、1936年、p.160。

(38) 前掲山本志乃、2021年参照。

商業学校の御好意を厚く感謝致します。」（『徳島毎日新聞』5月11日）

「（京城）七時十六分永登浦着、徳島毎日新聞京城支社長尾関亀繁氏が京城徳島県人会代表にてお迎へにおいでになって居た。」「（仁川）仁川商業学校教諭、本校先輩のお出迎へを受け、同氏達の御案内で仁川府内見学」「（再び京城）龍山駅には憲兵少佐赤澤氏がお迎へ下さった。京城駅着、同駅にも県人会員数名のお出迎へあり。」「本日の仁川県人会及京城県人会員尾関、赤澤其他の諸氏のご尽力を感謝しつつ……」（『徳島毎日新聞』5月12日）

「（京城・朝鮮総督府）して食堂で京城府県人会から洋食を御馳走して下さい。次に朝鮮年中行事及び朝鮮の農業の写真各二巻を映写して下さい。後で本県出身大成功者の一人たる農村経営者藤井氏⁽³⁹⁾の有益な体験談其のお話しあり。又総督府庁にお勤めになってゐる本県出身者の御挨拶あってそれから広い玄関を見る。」（『徳島毎日新聞』5月13日）

「（平壤）県人会のお出迎へをうけ絵葉書を下さった。」「県人会からお菓子を下さった。」（『徳島毎日新聞』5月13日）

「（奉天）何の知人もなく頼るべき人もない旅人には、一面識なく唯同県人といふ誼を以て色々御面倒を見て下された在奉県人の方々がどんなに強く感じたか、どんなに嬉しかったか。」（『徳島毎日新聞』6月1日）

「（大連）今夜は私達は大連徳島県人会の招待で支那料理屋の晩餐会へ出席した。次から次へと来る支那料理に夜の更けゆくのも知らず舌鼓を打って食べた。」（『徳島毎日新聞』6月5日）

「（大連）今日は異国の空を離れる時よ。午前十時幾多の県人先輩の方々の御見送りを受けて二百余人の県人の住む大連を去って行く。」（『徳島毎日新聞』6月8日）

大邱・平壤のように滞在時間が半日に満たない都市も含めて、ほぼ全ての街で県人会が出迎え、観光案内、食事、歓迎会開催、送迎などの労を執っていた。この後に続く各年の徳島商業学校、女師・高女の旅行も同じであり、その旅日記全体を通じて現地の卒業生・県人会への感謝の気持ちが綴られている。このことから各校は事前に朝鮮・満洲各地の県人会と連絡をとり便宜を依頼していたと推測できる。徳島県や現地の県人会としてもこの満鮮修学旅行は一大イベントであったと言えよう。

②大日本帝国の成長と発展

彼らの訪問先は大日本帝国の威容と植民地経営の成功、満洲での利権の実情を感得・理解させるところが選ばれた。国内ではまず呉・広島に立ち寄り軍港と大本營を参観している。

「七時着直に呉軍港へ行く。軍艦霧島が停泊して居たが時間の都合で拝観出来なかったの

(39)フルネームは藤井寛太郎。香坂昌孝『模範農村と人物』求光閣書店、1917年、pp.123-126他に伝あり。徳島県麻植郡鴨島の人。

は残念であった。其の他駆逐艦潜水艇等ざっと二十隻程停泊して居た。四面皆山で何処が港口か一向見当が附かない。それから呉海軍工廠を拝観した。朝飯を食ひ外した者が多数あるらしい。僕も其一人だが疲労すること甚しい。航空母艦あさぎ（二万七千噸）名は聞き落としたが先日進水式を挙^マ行^マした妙義の姉妹艦である軽巡洋艦、其他潜水艇など建造中であつた。其規模の大なるに一驚した。」（『徳島毎日新聞』5月7日）

航空母艦「あさぎ」は「赤城」の誤り、軽巡洋艦「妙義」は重巡洋艦の「妙高」であろう。この時代、軍機保護法は施行されてはいたが、人びとは様々な軍事情報に親しんでいた。港湾の形状、集結する艦艇とその名称、建艦の進捗状況などは、同法の1937年（昭和12年）の改定後となれば明らかに抵触している内容である。昭和初年はまだ牧歌的で鷹揚とした時代であつた。広島大本営参観では

「申すもいと恐れ多いけれど玉座は誠に御質素なもので当時御使用の時計は今の民間に使用してゐるのと少しもお変りがなかつたといふことを承はるに及んでは誠に恐懼の至りと申さねばなりません。」（『徳島毎日新聞』5月7日）

と、約30年前の日清・日露両戦争に思いをはせた。彼らはこの後、この戦争によって獲得された植民地朝鮮と満洲へと足を運ぶ。

植民地において彼らはまず各地の神社（仁川、京城、平壤）を参拝、さらに日清戦争・日露戦争に係る戦跡を訪問した。仁川では日露開戦発端となったロシア艦撃沈の講話を聞き（『徳島毎日新聞』5月12日）、平壤では日清戦争時の原田重吉一番乗りの玄武門を見学している（『徳島毎日新聞』5月14日）。そして満洲では相当の紙幅を割いて旅順戦跡見学の様子を叙述している。

「白玉山の前方には旅順の会戦に戦死せし勇士の骨をおさめた納骨祠が立ってゐる。一同最敬礼をして祖国の為に一身を犠牲にし淋しく異境の山頂に眠れる勇士を慰めた。遙か北方には水師營の町が眺まれる。霞たなびく東方には剣山が眺まれる。我が閉塞隊を悩ました黄金山も狭い港口のかたはらに聳へてゐる。飽る迄血を呑みし白玉山の風光や絶佳である。大倉君日本アルプスにて風葬するなれば、我この天地にて雨葬にして淋しく眠れる勇士を慰めよう。やがて此处を辞して東鷄冠山北堡壘へ向つた。此处ぞ明治三十七年十二月十八日我が十一師団決死隊の占領せし処なるぞ！ おおペトンの大堡壘よ！ これに投げられし我軍の肉弾や如何ならん。何も知らずに打出されるマキシム機関銃に倒れ行く我軍の果敢なさ、俯仰佇立正しく断腸の感がある。累々と転がる大石、隧道を作って進んできた我軍の跡、深い塹壕総てが昔の儘、厳めしいペトンの大堡壘も我軍の弾丸に打くだかれて哀れを止めてゐる。実にや乃木將軍の苦心の跡が窺はれる。」（『徳島毎日新聞』6月5日）

剣山とは前稿で取り上げた旅順の東にある剣山（けんざん）のことである。この攻略に徳島出身者で構成された第43聯隊が功績を挙げたとして、同県の剣山（つるぎさん）をもって命名した。執筆者Y氏の筆致は特に四国の第11師団が攻撃した東鷄冠山北堡壘の叙述で最高潮に達する。これらの戦いによって獲得された植民地、権益についてはその発展と成長、統治の“成

功”を誇らしく記し、それを当然のものとして考えていた。ただし前稿でも論じたように、日露戦争より 20 年以上が経過しており人びとの満洲への関心は薄れつつあった。これに対して大正年間から昭和にかけては日清・日露両戦争の顕彰と戦死者の慰霊の為、日本各地で忠魂碑の建設が盛んに行われるようになった。剣山記念塔もその一つであり徳島商業学生の満鮮修学旅行が行われたのと同じ 1927 年（昭和 2 年）9 月 25 日に除幕式が挙行された⁽⁴⁰⁾。この年に行われた徳島初の満鮮修学旅行もまた学生の意識を朝鮮・満洲へと向ける教育的意味を付与されたのであった。

この他、日本支配下の仁川の港湾施設、京城の近代都市建設、関東州の大連港の発展などが旅日記に記される。特に撫順炭坑はこの満鮮修学旅行の大きな目的の一つであり修学旅行生一同はその近代設備と巨大さに驚嘆の声を上げた。

「駅の前には撫順町行の電車が走ってゐる。之に乗って私達は先づ炭鉱事務所へ飛び込んだ。事務所といっても三層の花崗岩造り、全く厩大なものである。此処の講堂で撫順炭鉱に付いていささか予備知識を賜った。事務所の前にはこれと同等位の支那病院が建築中で、全く徳島では夢にも描けない。電車は可なり好い速力で走ってゐる。幾十分かの後私達は撫順の町へ吐き出された。……。一世に名だたる露天掘炭坑は駅のすぐ傍である。おお俯瞰せよ！ 覗けよ！ この雄大な露天掘の偉大さを！ 目に見ゆる処、踏む処、觸る処総て石炭ばかりである。地下幾千尺の下で働く坑夫は日の光も見ず命を賭して働いてゐるのに、此処で働く坑夫ばかりは皆暖かい春の慈悲光を受けて皆せっせせせと働いてゐる。皆幸福さうである。幸福に輝いた労働者は、南支から逃れてきた人もあらうがどんなに嬉しい事だらう。」（『徳島毎日新聞』5 月 26 日）

徳島では夢にも描けぬと新たな知見を得た感動を述べている。このようにして学生は多大な犠牲を引き換えに得た植民地朝鮮と満洲権益の実情を確認し、その発展に日本人として胸を張るのである。この 4 年後、1931 年（昭和 6 年）の満洲事変に際し、多くの人びとは「十万の生霊と二十億の国帑」をもって得られたこの権益を断固守るべしと熱狂した。大陸への修学旅行もまた参加した学生たちにその観念を確信させる役割を果たしたと考えられる。

③植民地朝鮮と中国東北地方（満洲）の社会

当然の事ながら朝鮮も満洲（中国東北地方）も本来は日本人の大地ではなかった。日記からはそこを武力をもって獲得したことに対する疑問も内省も感じられないが、同時に現地の人びとに対する偏見もそれほど見いだせない。初めて訪れた朝鮮や満洲の人びとに興味津々の目を向けて純粋に驚く様が見える。朝鮮では「棧橋には白色の朝鮮服を着た朝鮮人が多数立って居る」姿を釜山上陸の最初の印象として記した。記事の中に続けて「朝鮮人の呑気なのに驚く」「家の前に腰を下して長い煙管で煙草をプカプカ吹かして居る」と観察している。釜山から大邱に向かう道中で「僕の客車へ一人の鮮人が乗り込んだ。質問が矢の様に飛ぶ」と、好奇心を

(40) 前掲拙稿、2020 年。

隠さない（『徳島毎日新聞』5月11日）。大邱でも「鮮人家屋は立派なものは瓦屋根でそれて居る。床下にはオンドルが通って居る。普通以下のものは藁葺の平家建だ。道路は徳島のよりずっと広い」（『徳島毎日新聞』5月11日）と、街の風景から朝鮮と日本・徳島との文化の違いを書き留めている。

京城では夕方に自由時間があり学生たちはそれぞれ散策を楽しんだ。以下のくだりは団体行動の合間に自由行動を楽しむ学生の姿を垣間見ることができ興味深い。

「……。参観後賑やかな本町通りを通り永楽町二丁目旭旅館へ着いた。尾関氏とここで別れた。改めて同氏に厚くお礼申し上げます。時に午後五時、山口中学校が又先へ休息して居た。夕食後八時頃から府内見物本町通りを西へ行く。実に賑やかだ。内地人が多く出て居た。それから支那人町へはいった。支那の家は皆赤緑などの毒々しい色を塗ってある。朝鮮郵便局から北に折れ迷い迷って何時か鐘路通りへ出て来た。支那人朝鮮人が小さいテント張りの店を出して居た。内地人などは殆ど見当らない。淋しい気になった。友達といっても二人しかない。一人はしきりに心配して居た。巡査に二回も尋ねた。妙な小さな通りを歩いてやうやく本町通りの東へ出て来て皆は始めて胸を撫で下した。十時には或者は長い煙管を右手に或者は絵葉書をポケットに旅館へ帰った。」（『徳島毎日新聞』5月12日）

学生一行は本日の見学を終えた後、宿舎へと向かった。京城駅・南大門から北東に延びる南大門通（現、南大門路）が北にカーブしていくところに京城郵便局（現、ソウル中央郵便局）がある。その角が元町通の入口である。昭和通（現在の退溪路）が1938年に完成するまでは、元町通は日本統治時代京城の繁華街の象徴であった。元町通はこの昭和通の一本北を東西に走る道路である⁽⁴¹⁾。現在は明洞の繁華街の南端、入口付近が明洞キルと称する（キルは小路、街路表示は明洞 8na-キル）。宿はこの元町通を東に進んだ永楽町二丁目（現在の水標路、ソウル中部警察署がある通り）にあった。執筆者のX氏たちは夕食後、本町通を散策し京城郵便局を右に折れ南大門通を北上、黄金通（現、乙支路）、清溪川を渡って鐘路まで歩いたようだ。本町通りは日本人が多く居住しているが、鐘路周辺は朝鮮人と中国人の居住者が多いという。なお両者の間にある清溪川を挟んで地名も日本式の○○町から朝鮮式の○○洞へと変わっている。彼らはこの鐘路を見物し、道に迷って鐘路と本町通の間の入り組んだ市街地を通り抜け本町通の東へと出てきた。おそらくは現在の忠武路駅と東大門歴史文化公園駅の間回りだと推測される。鐘路からこの辺りにかけて、乙支路3街駅と乙支路4街駅周辺はこの記述を彷彿とさせるような入り組んだ街路が現在も残っている。彼らの不安と好奇心が交錯する心象、京城の夜間の情景を伝える興味深い内容である。

その翌日には朝鮮人の子供たちの教育現場を参観する機会に恵まれた。

「……京城普通学校を参観。授業が終わった後であったが、特別に六年生二組を残して観せて下さった。国語をやった。上手に読む。先生が誰か読みなさいといふと全部手を挙

(41) 日本統治期の京城の都市計画については廉叢圭『ソウルの起源京城の誕生：1910～1945 植民地統治下の都市計画』明石書店、2020年を参照のこと。

げる。時々カキケコ、タチツテト、タヂヅデドなど基本発音をやらして居た。ツが言い難ひ様で或生徒はスと発音して居た。なかなか日本人に負けない。然し朝鮮人同志で話す時には朝鮮語を使つてゐる。」（『徳島毎日新聞』5月13日）

後にこの文章が校友誌に再掲される際、朝鮮の子供たちが朝鮮人同士で話す時には朝鮮語を使うというくだりの後に「我等が英語を習つて滅多に使はない様なものか？」と文を補っている⁽⁴²⁾。植民地統治下の朝鮮の子供たちが日本語を学ぶことに対する疑念はない。しかし否応なく日本語を学ばざるを得ない彼らと、英語を学んでいる自分たちとの共通点を見出したようだ。

平壤は滞在時間も短くほとんど印象も残っていない。早朝に到着し午前10時には国境の新義州へと向かった。国境までの約220kmを6時間ほどかけて到着しているの、時速は30~40kmという計算となる。

「混合列車だから遅い遅い。徳島のより遅い。新義州方面へ来ると一面の平野で周囲に低い山が取り巻いてゐる。六時十分前列車は新義州へ着いた。同駅で下車して徒走で鴨緑江を渡る。税関は至極簡単で挨拶一つ。唯写真を持ってゐるものが証明書を交付してもらふのに少し時間を要しただけ。鴨緑江は長いこと東洋一、人路は鉄道線路の両側にあつて幅約一間半、安東駅の近くの同地一流旅館元宝旅館へ宿泊、いよいよ南満洲へ乗り込んだのだ。支那町は危険なので九時迄日本町に限り外出を許可され、九時一同南満洲での第一夜を明かそうとする。」（『徳島毎日新聞』5月14日）

国境の税関審査は簡単で鴨緑江を徒歩で渡つて安東へと向かった。安東の日本人街では自由行動が認められた。ここまでをX氏が執筆し、この安東に入つてからはY氏の担当である。日本帝国を出た直後の安東の街について彼は相当長文の感想を記した。

「眠たき目をこすりながら起きたのが午前七時、旅館の前には早くから支那人がわめきながら何やら売り歩いてゐる。異国の感じが心細いながらも感じられる。街路には緑濃きポプラ、アカシヤの木が茂つてゐる。疲れた旅人の心には一つの美しい慰めを与へてくれる。道は広くてアスファルトを敷き、アカシヤ、ポプラの繁つて植はつた安東の町は大変感じがいい。……亜米利加領事館の前を通つて支那街へ出ると人相の悪い支那人がブラブラしてゐて気持の悪さ、一体支那は感じがよくない。大陸の国民である為もあらうが何等やさしさが表れぬず何処となく獐猛な感じのする国民である。支那街の家は支洋折半風に建られ平均大建物が多い。各銀行の前には着剣した銃を擁した兵が番をして物々しい処がある。これを見ても支那の国情国民性の一端が窺はれる。」（『徳島毎日新聞』5月17日）

学生は初めての異国である中国に好奇心を示しつつ、その日本とは異なる異質さを記している。満洲事変前の当地は日本が勢力を拡大していたとはいえ、まだ京城でのように日本人が無防備に闊歩できるどころではなかつた。さらに安東より安奉線を北上して奉天に向かった。遼東半島中部の山脈を越え本溪湖を過ぎると平原が広がる。彼は満洲の大地について次の様な印象を得た。

「満洲の広野を走る汽車、鐘を鳴らして走つて行く。この鐘の音がとても大陸的で大陸の

(42) 前掲徳島商業高等学校『徳商五十年史』1960年、p.153。

風趣を一層そそり立てて旅人の心にひそんだ旅愁を慰めてくれる。……（奉天にて）車道の両側には赤シヤの立樹が蜿蜒と茂り全く欧州へでも来てゐる様な感じがする。旅館へ行く道々白色人種の夫婦共が沢山散歩をしてゐて異国の感がひしひしと身に迫ってくる。」（『徳島毎日新聞』5月22日）

「（奉天・北陵から市内への帰り道にて）何時の間にもやら服は満洲砂で真赤、全く満洲ならではできぬ事。本当に満洲気分タップリよ。」（『徳島毎日新聞』6月1日）
多くの日本人がそうであったように、彼らも満洲の広大な大地、異国情緒あふれる市街に旅情を感じた。

彼らは撫順・奉天を見学した後に日本帝国の租借地である関東州へと向かった。前述の通りここで彼らは旅順の戦跡を見学し、日本がこの地を獲得し勢力を拡大した経緯を実感する。そして関東州の中心地大連で満洲最後の夜を過ごすのである。

「（大連にて）道行く可愛い坊ちゃん嬢ちゃん、絶域花は稀ながら清く咲いた大和撫子は高く高く異境の天地に香ってゐる。行き交ふ支那人髪を長くたらしめたテヨンガー、前髪たらしめた可愛い娘、風にもなよぐ纏足の女、総てが支那の表現である。前髪たらしめた乙女の姿は可愛い、耳に下げたヒスイの耳輪は高貴である。美しく模様づけられた緞子地の服着た乙女は美しい。……。雨はれの夜は輝く街灯に映えた町へ土産の買い物に出掛け行く。昼に引きかへ夜の大連は入賑やかである。灯ともし頃になると何処からともなく支那人の露天店が街路狭く張出して来る。双手抜ける迄に買はれてきた土産は宿屋の部屋狭く、ならんでゐる。」（『徳島毎日新聞』6月7日）

当地は安東のように中国軍が警備する緊張感は見られない。夜間の自由行動も認められ行き交う人びとの姿など街の様子を物珍しく観察し、夜には中国人街の喧騒の中で買物を楽しんだ。

そして彼らは大連より帰国の途についた。この旅行で彼らは何を得たのだろうか。旅日記の執筆者Y氏の弁を借りるならば、

「清く晴れた昭和二年五月十四日の空には早くも朝日は輝いてゐる。今日は異国の空を離れる時よ。午前十時幾多の県人先輩の方々の御見送りを受けて二百余人の県人の住む大連を去って行く。……。さらばさらば県人の方々よ 懐かしの故郷は鎖国の阿波 進取の気とぼしき島人に 好き模範を示してあれ」（『徳島毎日新聞』6月8日）

と、各地でサポートしてくれた県人への感謝とともに、県外に足を踏み出すことに消極的な県民性に対して慨嘆の詞を漏らす。この徳島の閉鎖性についての言説は些か紋切り型であり、現在に至るまで広範に見られる。旅日記は次のように締めくくられる。

「四時半無事に十六日ぶりの懐しい徳島の地を踏んだ。奉天大連の大都会に見馴れた目には小松島の駅は安奉線の山中の一小駅としか写ってこない。鼻つく様な日本の国、小さい汽車、あの汽笛が何だか悲鳴をあげてゐる様に聞こえてくる。……。其の旅行が僅半月にしる、遠く満洲まで学びに出掛けた我等徳商健児の意や偉とすべきである。世は昭和の聖代に照されし御代なるぞ！ 高く掲げられたモットーは『日進日新』である。我等の遠く満洲まで修学旅行に行ったのも全く時勢の然らしむる処である。今後の日本を双肩に荷ふ

者として時代の趨勢に遅れては御国に対してすまない。阿波の人々の海外雄飛の氣象乏しきは正しく時勢に反してゐる事夥し。日本の現状を見る時は誰か安々としてこの祖国に止る事を得ようや。……。」（『徳島毎日新聞』6月10日）

徳島商業学校の学生たちは、元々は「そうした方面への興味をそそら」ず「手近な関東地方へでも行く方が面白い」と考え、内地か朝鮮かで投票を行っても「後者への希望者がその半数に過ぎなかった」という状況であった⁽⁴³⁾。しかしY氏の記すところによれば、2週間の満鮮修学旅行を終えた学生たちの考えは大きく変わったという。日本の国土の狭さを身をもって体験した彼らは閉鎖的な徳島を飛び出し大陸・海外へ“雄飛”する気概を語る。これもまた些か定型句の感想文ではある。だが旅は確かに学生たち様々な啓発を与えその世界観に影響を与え、自分たちと異なる社会や文化に興味を示すようになったという教育効果はあつただろう。日本帝国の拡大に対する疑念は微塵も感じ取ることはできない。この自負と確信は当時の日本国民の多くに共有される想念だった。

④近代中国の社会変容への理解

学生の中国本土の政治状況に関する学生の認識と理解はそれほど深くはない。この頃数年連続して中国本土では自然災害が発生し、多くの避難民が満洲へと流入してきた。旅日記の中にその情景について言及する箇所がある。

「それに南支の状態があの様であるから、支那農民の避難が多く撫順線の一番列車なんか何時も鈴なりで、満鉄の方は何時も避難民輸送の為貨車の四五十輛も連結した臨時列車を出して輸送してきたそうであるが、それでも運び切れなかったとの事。……。そして其の避難民の臭い事臭い事、全くお話にならないさうである。その為か私達の乗ってゐる客車の臭い事臭い事これ又お話にならない。文読む人の缺乏は斯の如く自ら国を乱し自ら苦しんで自ら亡んでゆく。実に今は哀れである。支那農民は可哀さうである。一年中の汗と力の代償として与へられたものは皆奪はれてしまひ、馬はとられ頼むは満洲と許り皆日本の勢力圏へと流れ込んでくる。早く誰か孔子か孟子の如き偉人よ出でて虐げられたこの哀れな農民を救ってやれ。……。さうでないとお前の目覚めた時には手も足も折られてしまひ立つに立てれぬ自己を見出さなければならぬだろうよ。」（『徳島毎日新聞』5月24日）

彼らは満洲へと逃れてきた人びとの不潔さに嫌悪感を隠さない。本節第②項で言及した撫順炭坑の情景描写でも「幸福に輝いた労働者は、南支から逃れてきた人もあらうが」とあつた。実際、避難民・労働者の出身地は華北であつたので、この点は事実誤認である。上の引用文の「南支の状態があの様」というのは中国の国民革命軍による全土統一の戦い、所謂“北伐”の進行と蒋介石による反共クーデターを指している。中国本土ではこの北伐の過程で各地の督軍（軍閥）割拠が解消されていったが、4月の共産党排除は一時的に武漢政府と南京政府の対立をもたらした。同時にナショナリズムの高揚も起因して外国の権益との衝突が表面化していた。学

(43) 前掲徳島商業高等学校、1960年、pp.147-154の引用する校友会誌22号（筆者未見）。

生は中国本土（南支）の混乱と満鉄附属地撫順の安定と成長とを対比し、前者の混乱について「支那農民は可哀さう」と評価する。満洲は張作霖政権の支配下にあるものの、日本は遼東半島先端の関東州そして満鉄附属地・商埠地を中心として勢力を保持していた。1928年（昭和3年）末に南京国民政府による中国統一が完成するが、学生たちが旅行をしたのはその前年、情勢が緊迫度を増していた時であった。

後半で彼は中国を救う「孔子か孟子の如き偉人」の出現を願っている。これは中国を停滞的な社会と見る当時の日本人の一般的な理解を反映したものであろう。彼らの中国像は一種古典的な世界観が基調であった。だが中国を統一に導いたの古の聖人ではなく蒋介石を首とする政治家・官僚・軍人たちであった。中国の自然や文化に対する悪意がなく同情的であろうとも、その翌年に実現する南京国民政府による中国統一にいたる過程を読み切れないところに、多くの日本人の中国理解の限界があった。もっとも一介の学生にそれを求めることは酷であろう。しかし彼の感想は当時の日本で広く共有されるもので、そこに一種の優越感があることもまた事実である。これが昂じた時、人びとの中には中国への干渉を当然と考える風潮が生じうる。またこれまでの戦争によって獲得された権益や植民地を当然のものとして些かも疑いの目を向けることはなかった。そこに戦前期日本の帝国主義的拡大を肯定する意識を見出すことは難しくない。今日的な視点に基づくならば、このような“草の根のファシズム”としての民衆の心性が大陸進出を支え、中国との衝突を激化させ、そして戦争という破局に至った。多くの日本人がそうであるように、自らの帝国主義的拡大を正当化しながらも、東アジアの民族主義の勃興と近代国家の形成に思いを寄せる視点に弱いという点は否定できない。

教科書的な理解に従えば 1920年代の後半に日本の戦間期の協調外交は動揺したとされる。彼らが満鮮修学旅行に赴いた 1927年（昭和2年）は日本の大陸政策にも変化が生まれた年であった。中国では北伐の途上で同年3月に途上の南京にて同軍による各国の領事館・居留民に対する暴力事件が発生した（第1次南京事件）。その直後に誕生した田中義一内閣の政策は対華強硬路線へと転じ、5月27日に居留民保護を名目に北伐への干渉、山東への出兵を決定した。所謂、第一次山東出兵である。これらの出来事を通じて人びとは、中国情勢の変化とそこに存在する権益の危機に気づかされることとなる。

だが世論は中国への出兵容認一色に染まっていたわけではない。本節の最後に当時の徳島にも中国の情勢を正確に理解し、この出兵に対する異論を提起する者がいた点は指摘しておきたい。徳島商業学校の学生が徳島に帰った2週間後の6月1日の社説「非国民呼はり」は政府の出兵に次のような論評を加えた。

「今度支那への出兵に就いて、其の理由の乏しい事を論じたに対して、同業日日（筆者注：徳島日日新報）は、之を以て自主的外交も、国威国権も忘れ者であるかの如く論じ、甚しきは出兵反対の人を以て、共産党と通謀する非国民であると罵ってゐる。……。

今濟南地方へ押寄せんとするのは、其の国民政府の軍隊である。共産主義の者とは反対に立ってゐる者である。而して日本の出兵は、其の国民軍が、武力革命を遂行するに邪魔になるから、国民党の政府は之を悦ばぬのである。……。只国民政府の居留民保護といふ事

が、完全に出来るか否やといふ点に於て疑があるばかりで、之は十分に信頼する事は出来ないと思ふ。けれども其れを以て出兵の理由とはならないのである。……。自主的外交といふのは、国際上の無理をせず、正当なる権利を主張して、他の強大国の鼻息を窺うたりせぬ事を云ふに過ぎない。支那へ対して勝手な振舞をすることが何の自主的であるか。……

我国には、何かといふと不敬呼はりをして、言論の自由を束縛せんとすに卑怯者がある。……。何かと云ふと非国民呼はりするものも、此の卑怯者と同じ心理の奴輩だ。非国民といふ言葉が許さるるならば、不道德な行為をなし、酒に呑んでくれ、色を漁り、国家に損害を与へてゐる者こそ非国民だ。〇〇費を私したり、〇〇事件を起したりする者こそ大々非国民ではないか。」⁽⁴⁴⁾

『徳島毎日新聞』の社説は、居留民の保護という点で問題があると留保しつつ（おそらく第一次南京事件などを指す）、国民革命軍の北伐が共産党とは距離をとるものであり、これに対する干渉には慎重であるべきという立場を取っている。徳島のメディア界における競争相手の『徳島日日新報』は積極的な干渉を主張し、合わせて『徳島毎日新聞』を攻撃した。これに対して本社説は再反論を加え、自主的外交を唱えつつも中国の国民政府の主権を尊重しない政府とそれに快哉を叫ぶ世論を論難している。同時に譲歩や強調、宥和を説く人びとを非国民・不敬として圧殺しようとする体制迎合的“同調圧力”を批判している点が興味深い。これは人びとの愛国心欠如を難詰し、政権への批判を反国家的と罵倒し、〇〇費を私する現在の政治風景にも通底するものがある。

徳島商業学校の学生たちが朝鮮・満洲で得た感動、帰徳後に抱いた海外雄飛の心情も日本帝国の勢力拡張と無縁ではあり得なかったが、国際社会の中の日本の役割、協調外交という感覚も人びとの間に存在していた。この段階では帝国主義的拡大に疑念を投げかけ内省を促す人びとも市井におり、1927年（昭和2年）の徳島の世論ではまだ多様な言説が語られていた。満鮮修学旅行に参加した学生がこの社説をどう読んだかは興味深いところだが、検証しようのない問題である。

そして翌1928年（昭和3年）3月15日の日本共産党の一斉検挙⁽⁴⁵⁾、さらに6月の治安維持法改正を経て、メディアの舌鋒は鋭利さを失っていく。1930年代に至ると自由主義的な論調もまた姿を消した。言論という点では統制色と戦時色が強まる暗い時代である。しかし民衆文化の発展という視点に立てば、昭和前期はその成熟する時期であったようだ。例えば本稿第1節で見たように、観光旅行としての修学旅行は変わらず隆盛していた。学生（特に女学生）が主役となる“修学旅行日記の時代”はこの後、本格的に爛熟へと向かったのである。

(44) 「非国民呼はり」『徳島毎日新聞』1927年（昭和2年）6月1日

(45) この三・一五事件の報道解禁が4月10日であり、徳島毎日新聞は11日にその事実を伝えた。その後、連日「共産党事件」『徳島毎日新聞』1928年（昭和3年）4月12日、「深省せよ」『徳島毎日新聞』1928年（昭和3年）4月13日という社説が掲載される。

おわりに：修学旅行日記の時代

前節で紹介した1927年（昭和2年）の徳島県立商業学校（現在の徳島県立商業高校）の満鮮修学旅行は同県最初の海外修学旅行であった。彼らが旅先で記した日記は植民地朝鮮、満洲事変前の中華民国東北地方（満洲）、そして各地在留邦人社会の様相の一端を伝える史料である。交通体系、宿舎、訪問機関及び景勝地の状況については当然のこととして、この史料からは当時の日本帝国内部を移動する学生たちの実像が浮かび上がってくる。毎年4月から6月の修学旅行シーズンになると各県の中学校、師範学校、女子師範学校、商業学校、農業学校など多彩な中等教育機関が数十名規模の団体を結成し、学生を満鮮修学旅行へと送り出した。これらの旅行団が集合離散しながら大体同じような行程をたどって朝鮮から満洲へと渡っていった。満洲事変前の修学旅行では朝鮮を北上、安東にて満洲へと入境、さらに北上して奉天・撫順へ、そこから南下して大連と旅順に向かい、大連港から門司へと帰国するのが一般的であった。満洲国が成立してからは奉天から更に新京（現、長春）へと足をのばす旅程が組まれている。多種多様な学校が同時期に満洲へと赴くことで、大連航路も学生の修学旅行客専用船の様相を呈していたと記される。これもまた戦前社会の一種の“グローバル化”であったと言えるだろう。

また彼らの旅程は相当に過密で盛り沢山の活動を組み込んでいた。交通や宿泊の手配については満鉄の鮮満案内所が事前に発行したクーポン券を利用していった。特筆すべきは実際の活動においては各地の県人会が修学旅行生受け入れのサポートを担当していた点である。それがわずか数時間の滞在であっても、県人が港や駅に出迎え、訪問地の解説、土産の提供、会食の準備を行っていた。満鮮修学旅行は現地に居住する同窓生や同郷人の好意によって成り立っていた。学生たちはこの県人ネットワークへの感謝の言葉を欠かさない。

当時の修学旅行に赴く学生たちが記した史料が本稿で使用した修学旅行の「旅日記」である。日記を記す、記録を残すという行為は現在においても普遍的に行われるものである。注目に値するのは昭和初年、正確には1924年（大正13年）より1940年（昭和15年）かけての時期、新聞が毎年の修学旅行シーズンに数多くの旅日記を掲載していたということである。これは『徳島毎日新聞』のような地方紙であるからこそ見られた傾向であろう。この史料群を一覧すると、昭和前期の修学旅行の実態並びに世相に関する貴重な情報を含んでいることが看取される。この全体像を理解すべく第1節では徳島県内の各学校の修学旅行旅日記を分析の対象とした。当初、大正から昭和に変わる頃には旅日記の掲載は散発的であったが、1934年（昭和9年）前後からは各校の学生たちの日記が何本も連載され紙面に彩りを添えることとなった。各種学校の中でもとりわけ高等女学校の修学旅行団の日記が連載されたのが興味深い、何故高女生（現在の女子高生）の日記がコンテンツとして注目されたのか、その理由は定かではない。

この修学旅行が堅実な教育目的に基づくものだけではなく、多分に物見遊山的内容を含んでいたことは否定できない。学生たちは国内に張り巡らされた鉄道網とバス路線を駆使し、景勝地を効率よく巡っていった。これは昭和前期の民衆文化の発展、及びその一環としての旅行の成長を直に反映していると言える。修学旅行日記の新聞紙上への掲載も、読み手となる人びと

の需要があることを前提としている。県民がどのように旅日記を読んだのかは史料として確認することはできない。けれども国内行き、満鮮行きを問わず修学旅行報告会などの企画開催が新聞に報じられたことから類推すれば、学生の旅行は世間の一定程度の関心を引いていたと言える（1927年の徳島商業、徳島農業。1931年の女師・高女、富岡高女等。文末別表参照）。この昭和10年代の隆盛を経て太平洋戦争の勃発直前の1940年（昭和15年）に至る時期は、“修学旅行日記の時代”と評価することができる。1937年（昭和12年）以降の日中戦争の激化、国民生活に対する統制強化という時期に、表面では旅行の自粛が求められていたとしても、修学旅行生の旅日記は変わらず新聞紙上に載った。本稿で提示したように戦死者の慰霊を行う各村の「村葬」を伝える記事と、華やいた旅行先の状況や学生の感想を伝える旅日記が同じ紙面に並んで掲載されるのがこの間の特徴であった。そして1940年（昭和15年）に至って修学旅行の中止が推奨され、学生以外の人びともまた表立って旅行を嗜むことを憚るようになった。だがその中でも阿波中学校のように皇紀2600年の奉祝行事に合わせた聖地巡拝の旅の途中で観光地に立ち寄るといふことも行われていたのであった。この点は本稿冒頭で紹介したケネス・ルオフ氏の研究が叙述する1940年前後の世相と一致している⁽⁴⁶⁾。翌1941年（昭和16年）の修学旅行シーズンは未だ日米関係が破綻していない時期ではあるが、旅日記の掲載はもはや見られない。その前年に修学旅行日記の時代は突如終わりを告げていたのであった。

(46) 前掲ケネス・ルオフ、2010年参照。

附録：1927 年度（昭和 2 年度）徳島県立商業学校満鮮修学旅行日記（全文）

●「徳商昭和二年度鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和 2 年 5 月 6 日

「五月二日！ 愈々我等の待ちに待った鮮満旅行出発日は愈々やって来た。斯くなる迄には幾多の難事が横はって居た。我等は之れに打勝つ為多大の努力を払った。特に南満洲鉄道株式会社大阪鮮満案内所⁽⁴⁷⁾の犠牲努力は甚大である。我等が鮮満方面旅行を企図すると聞かれるや四月十一日といふに早くも大阪鮮満案内所員が滴翠閣⁽⁴⁸⁾へ出張せられ、徳商生一同に鮮満旅行宣伝活動写真を見せて下さって、其後奔走を続けられ、五月一日（日曜日）所員学校へわざわざ出張せられて内地鮮満周遊券及旅館券を発行して下さい。かくして県当局の後援となり遂に徳島県最初の此の大旅行の決行を見るに至った。此処に初めて大阪鮮満旅行案内所へ厚く御礼申し上げます。

今にも泣き出しさうな天気だ。ああ出発早々から困った天気だ、と考へながら二三の友と徳島駅へ集合した。早大勢集合して居た。皆ニコニコ顔だ。然し天候を憂ふる色が時々現れる「雨かなァ」実に情けない声だ。やがて校長を始め先生達や後に残る友達が見送りに来て呉れた。少し後我等旅行隊は徳日新聞写真班のカメラに収まった。時間が来た。汽笛一声我々徳商旅行団は懐しの徳島に暫くの別れを告げ長途の旅へと上った。約三十分の後小松島駅⁽⁴⁹⁾へ吐き出され、今度は第二十八共同丸⁽⁵⁰⁾の巨大な体軀の中に落ち着いた。午前十時船は出港した。当日は東南風で沖は大そう荒れて居た。我々船に弱い仲間は蒸さ苦しい三等船室の隅に小さくなって寝て居る。船に強い連中は上甲板でしきりに校歌をどなって居る。中には阿波の十郎兵衛をやって得意然として居るものもある。又静に瞑目して思ひを関山の暮雲に馳て居る者もある。いや色々様々だ。雨がシトシト降って居る。天気が悪いは船に酔ふは泣き面に蜂どころでもありやしない。午後三時船は兵庫港⁽⁵¹⁾へ到着した。先発隊の者が大勢迎へに来て居た。先生は自由見学の為一まづ解散を許された。或は湊川神社⁽⁵²⁾へ参拝する者或は新市街へ走る者皆三々伍々

(47) 鮮満案内所は東京、大阪、下関に置かれ、朝鮮と満州の紹介、旅行の企画、各種切符の販売を行った。南満洲鉄道株式会社庶務部調査課『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』南満洲鉄道株式会社、1928年、pp.129-130。

(48) かつて現在の徳島中央公園内にあった。

(49) 旧小松島駅。現、小松島ステーションパーク。明治末年、徳島市内の新町川の中洲港が手狭であった為、小松島港を主要港とすることとなった。1910年（明治43年）阿波国共同汽船株式会社が徳島・小松島間に軽便鉄道を敷設する権利を獲得、大正2年（1913年）に竣工した。これにより港湾と鉄道を直結させた小松島港は大正年間以降設備の整備を進め、徳島と阪神を結ぶ阿摂航路の主要港となった。阿波国共同汽船株式会社『阿波国共同汽船株式会社五十年史』阿波国共同汽船株式会社、1938年、第一編参照。

(50) 阿波国共同汽船株式会社所有。前掲阿波国共同汽船株式会社、1938年、第三編参照。

(51) 兵庫駅近くの「兵庫突堤」を指す。淡路、徳島航路はここを発着場とする。

(52) 神戸市中央区。楠木正成を祭神とする。

思ひ思ひの方面へと向かった。午後九時頃一人の迷人もなく皆神戸駅へ集会、多数の先輩の見送りを受けて九時五十八分の急行列車に乗車して海田市駅へと向かった。」

●「徳商昭和二年度鮮満旅行記（二）」『徳島毎日新聞』昭和2年5月7日

「明くれば五月三日誰の顔も皆睡眠不足を物語って居る。午前五時三十四分海田市駅下車、同六時十分呉駅に向ふ。右手に広島湾を眺めなかなか好い景色だ。途中牡蠣養殖場を眺望、トンネルの多いこと驚くばかりだ。七時着直に呉軍港へ行く。軍艦霧島が停泊して居たが時間の都合で拝観出来なかったのは残念であった。其の他駆逐艦潜水艇等ざっと二十隻程停泊して居た。四面皆山で何処が港口か一向見当が附かない。それから呉海軍工廠を拝観した。朝飯を食ひ外した者が多数あるらしい。僕も其一人だが疲労すること甚しい。航空母艦あさぎ（二万七千噸）名は聞き落としたが先日進水式を挙行した妙義の姉妹艦である軽巡洋艦、其他潜水艇など建造中であつた⁽⁵³⁾。其規模の大なるに一驚した。一巡した後解散して昼食をとり零時十分呉を後に広島へ向つた。一時十一分広島駅着、一旦荷物を駅前鶴水旅館へ預けて置いて本校卒業の富永静雄氏が多忙中にもかかわらずと御案内して下さい。先ず旧広島城主浅野氏の別墅泉邸⁽⁵⁴⁾を拝観、流石浅野氏の御庭だけあって実に立派なものでつつじが今を盛りと咲いて居た。それから予定を変更して広島城大本営⁽⁵⁵⁾を拝観、何処かの学生が拝観して退城するところであつた。先ず先生から拝観心得を読み聞かされ五十二人を二組に分け案内者に案内され拝観した。申すもいと恐れ多いけれど玉座は誠に御質素なもので当時御使用の時計は今の民間に使用してゐると少しもお変りがなかつたといふことを承はるに及んでは誠に恐懼の至りと申さねばなりません。それから日清日露両戦役北清事変の際の分捕品を拝観した。鉄砲の長いものになると一丈、刀でも七八尺位のものがあつた。次に比治山公園を見物した。もう其頃にはポツポツ落伍者があつた。比治山公園⁽⁵⁶⁾は徳島城山より少し低い位で路が大さう綺麗だ。徳島公園よりは小さい。旅館へ帰つた時は五時であつた。夕食後九時迄市内自由見学、夜は非常に疲れて居たのでグッスリ眠つた。（付添教諭吉本、笠井両先生）」

●「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月10日

「明くれば第三日、徳商日和だ。予定を早めて八時六分広島に別れを告げ宮島へ向ふ。左広島湾を眺め、右に山を仰ぎ列車は約一時間の後宮島⁽⁵⁷⁾着、直に連絡船に乗り厳島へ着く。案内者の説明を聞きながら長廊下を廻る。全部朱塗りだ。次に宝物参観、それから解散して自由見学、

(53)それぞれ航空母艦「赤城」、重巡洋艦「妙高」の誤りであろう。

(54)広島市中央区。現在は縮景園として知られる庭園。

(55)広島市中区の広島城内。

(56)広島市南区。

(57)広島県廿日市市宮島町。

僕等数名は弥山⁽⁵⁸⁾に登る。頂上には数千貫とも計り知れぬ大巖が色々と奇形口作って居る。瀬戸内海口眺望実に絶景だ。時間が無いので直に下山した。やがて日本三景の一たる巖島に別れて下関へ向ふ。八時二十五分下関着、直に自由見学、時間が少いので大急ぎだ。徳島よりずっと小さい町だ。然し停車場は徳島駅の三倍位ある⁽⁵⁹⁾。実に堂々たるものだ。九時半関釜連絡船徳寿丸（三千八百噸）⁽⁶⁰⁾に乗り込んだ。今夜は熊本商業⁽⁶¹⁾、香川女子師範⁽⁶²⁾と同乗だ。十一時船は汽笛一声内地に別れを告げいよいよ朝鮮へ向った。玄界灘で船が揺れるといふので皆はすぐに眠りについた。」

●「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月11日

「明くれば第四日、六時頃には皆起床して日記や手紙を書いて居る。八時十分案じた事もなく無事釜山上陸、雨がシトシト降ってゐる。栈橋には白色の朝鮮服を着た朝鮮人が多数立って居る。洋傘は下関の鮮満案内所に預けて来たので弱った。荷物を駅へ預けて置いて龍頭山⁽⁶³⁾へ登った。釜山の町は一目に見える。案内者から色々と説明を聞いた。内地人は総人口十万人の内約四割だ。時間の聞き違ひから弁当が遅れた。十時駅前集合、一番後の客車一輛貸切りで大邱へ向ふ。広軌だ気持がよい。十一時に皆朝飯を食った。茶をくれた。実によく便宜を計って呉れる。左に洛東江を右に朝鮮特有の山々を眺めつつ列車は進む。河は濁って居る。山には二十貫位の石が沢山転がって居る。木は二、三尺位だ。汽車はよく走る。僕の客車へ一人の鮮人が乗り込んだ。質問が矢の様に飛ぶ。約三時間後、大邱駅下車、多数の県人の出迎へを受けて駅前小山旅館へ行って休息し小憩の後先輩の御案内で市内見学、人口七万六千、先づメートル宣伝会場⁽⁶⁴⁾を縦覧し次に有名なる大邱市場を見る。市日でなかったので落胆した。便所に漢文で落書してあったといふ話だ。それから西端の達城公園⁽⁶⁵⁾へ行く。設備の完全なることに於て東洋一たる煙草専売局を下に見る。後市内をずっと見学して東端の丘へ上る。市街を一望にあつめて居る気持のよい町だ。朝鮮人の呑気なのに驚く。家の前に腰を下して長い煙管で煙草をプカ

(58)原資料では文字が潰れて判然としない。或いは御山と誤記しているようにも見える。

(59)現在の下関駅ではない。旧駅は下関市細江町にあった。

(60)関釜連絡船の景福丸型の2番船。姉妹艦に昌慶丸。全て朝鮮王朝の王宮の名前より命名された。

(61)現、熊本県立熊本商業高等学校。

(62)現、香川大学教育学部。

(63)釜山市内。現在、釜山タワーが頂上にある。

(64)大正年間から昭和初期にかけて各地で度量衡でのメートル法普及の為の展覧会が開催された。例えば1927年（昭和2年）7月1日から5日にかけて東京自治会館で開催された「メートル法展覧会」ではメートル原器・キログラム原器の模型、各種説明（メートル法の覚え方など）、商品実物などが展示されている。東京自治会館編『東京自治会館報（昭和2年度）』第4号、1934年、pp.37-42。

(65)大邱駅の西方約1.5 km。

ブカ吹かして居る。それから大邱公立商業学校⁽⁶⁶⁾校舎参観、食堂、風呂などよく設備が整って居る。県人会から招待を受け学校食堂で夕食を御馳走になった。先輩県人大邱商業学校の御好意を厚く感謝致します。鮮人家屋は立派なものは瓦屋根でそれて居る。床下にはオンドルが通って居る。普通以下のものは藁葺の平家建だ。道路は徳島のよりずっと広い。学校で解散して市内自由見学、十時二十分旅館へ集合、同半駅集合、県人諸氏よりお土産品を下さった。汽笛一声先輩諸氏のお見送りを受けて大邱を後に京城へ。」

●参考：「徳商学生団来る 県人の熱誠なる歓迎」『徳島毎日新聞』昭和2年5月12日

「徳島商業学校生徒五十四名は吉本笠井両先生の先導にて六日午前七時大邱方面より永登浦駅に着、本社京城尾関支局長は同駅に京城徳島県人会代表として出迎へ一行と共に仁川行に乗替へ九時仁川着、仁川商業学校教師亀田氏案内役として出迎へられ八坂公園に登り案内者より仁川海戦当時の実況其他仁川港に関する詳細なる説明あり。海岸に出で仁川のほこりとすべき開閉式ドックを見学し支那人町を横断し風景絶佳なる月尾島に渡り塩風呂に一浴を試み、仁川県人会より中餐を供せられ県人会長杉野英八氏より往事の渡鮮困難は夢と去り関釜間僅に八時間にて航海する今日、県外の発展進出を望み朝鮮事業の有望を説き、今や朝鮮は産米の増殖計画を樹て十年後の朝鮮の産米二千数百万石算する訳にて現在にても已に昨年内地輸出は百万石を算するに至ると、将来朝鮮開発に関し前途有望なるを述べ、諸君も学校卒業後は鮮内の事業開発に奮闘を望むと簡単に挨拶あり。小憩の後一時発にて京城に向つた。午後二時京城着、赤澤、井原、近藤の諸氏の出迎へを受け直に赤澤氏の先導にて朝鮮神宮に参拝し境内より京城市内著名の官署建物等赤澤氏より詳細懇切なる説明をきき商品陳列館を経て定められたる旭旅館に入る。七日朝鮮銀行、京城府庁、京城放送局、小学校を見学し総督府新庁舎を見物し庁舎内の食堂にて藤井寛太郎氏より中餐を供せられ食後本府社会課の活動写真にて朝鮮風俗の写真及び農民の実況を見物し終りて藤井氏より

一、新進新取の気を養ひ海外進出を叫び

一、努力に関し不二農村の実例を説き人生最大の幸福は努力其のものにあり我県の如き箱庭式大地に齟齬せずよろしく鮮満の大地を撰べと諭し

三、善悪の損益勘定 或人は監獄内にありて選挙運動する不徳漢あるも終極の勝利は美行にあると云ふ事を説き

其他有益なる処世の要点を説き以て富永文一氏も簡単に大陸進出、鮮満の宝庫開拓の有利有望なる事を力説し吉本教諭より謝辞を述べ終りて階下大広間県庁内白亜の大殿堂を一巡、景福宮の遺蹟を見学して李王職植物園を見学し市内各所を見物して、午後十時五十五分奉天行列車にて一行大元気に平壤に向つて出発した。（京城支局報）」

(66)現在の慶大病院駅の近くにあった。

●「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月12日

「徳島毎日新聞社支局長に迎へられて

五月六日（第五日）昨夜は車中泊で非常に冷えた。窓など全部閉めてあるのに二月頃の気温で三時頃には殆ど皆眼を覚して或者はシャツ、オーバー等を着、持合せのないものは風呂敷に荷物を包んで体の上へ置くといふ有様で、昨夜中に風を引いた者数名あった。春時分鮮満地方へ旅行せられる方は冬シャツを是非携帯せらるる必要がある。七時十六分永登浦⁽⁶⁷⁾着、徳島毎日新聞京城支社長尾関亀繁氏⁽⁶⁸⁾が京城徳島県人会代表にてお迎へにおいでになって居た。八時同駅より仁川へ——上仁川駅で下車、仁川商業学校⁽⁶⁹⁾教諭、本校先輩のお出迎へを受け、同氏達の御案内で仁川府内見学、人口五万余、中内地人約二万、公園が二つある。僕達は仁川公園へ行つた。同園は小丘で丘上に天照大神をお祭りしてあるところの仁川神社⁽⁷⁰⁾、一名八坂神社参拝。同所で仁川商業教諭の仁川港の歴史及び大略の御説明あり。毎年二月九日所要所でかがり火を燃やして敵艦撃沈の日を記念する由⁽⁷¹⁾、直に下丘仁川港のドック式港見学⁽⁷²⁾、実際開閉して見せて下さつた。同港干満の差の甚だしいこと世界第二、約廿七八尺といふ話だ。それから昔勢力を有したといふ支那町⁽⁷³⁾を通り月尾島へ行く。同府は東へ東へと発展して行くといふ話だ。同島迄長い長い美しい道路がついて居る⁽⁷⁴⁾。同島の潮場に上つて休息。仁川徳島県人会長杉原氏の仁川米穀産出及輸出入状態ならびに其将来に関して有益な御講話あり。そこで山口中学⁽⁷⁵⁾と一緒に白線を入れてあつて大層八釜敷いやつだ。それから一同塩風呂へ入る。時間が来たので下仁川駅⁽⁷⁶⁾へ行く。仁川県人会から昼弁当を下さつて、一同の見送りの内に列車は京城へと——。龍山駅には憲兵少佐赤澤氏がお迎へ下さつた。京城到着、同駅にも県人会員数名のお出迎へあり。京城駅は大きな設備のよく整つた美しい駅だ。一同整理して駅前朝鮮神宮⁽⁷⁷⁾参拝に行く。未だ十分道路が改造せられて居なかつた。一同参拝後神宮より同神宮に関して御話があつた。同神宮は南山にあり天照大神及明治天皇の二神を御奉祀し申し上げた官幣大社で、大正八年起て同十四年十月十四日御霊体を東京から此処へお遷し申し上げ

(67) 永登浦駅は京釜線と京仁線の乗換駅である。

(68) 詳細不明。

(69) 正式名は仁川公立商業学校。

(70) 仁川には東公園と西公園があり、前者に仁川神社があつた。現在の首都圏電鉄水仁・盆唐線の新浦駅近くの仁川女子商業高校がその旧址である。

(71) 1904年（明治37年）2月9日の仁川沖海戦を指す。

(72) 仁川港は干満の差の大きさに対応する為に閘門が設けられている。

(73) チャイナタウンとして知られる。現在の仁川駅と自由公園（日本統治時代の西公園）の間に広がる。

(74) 日本統治時代より景勝地として知られる。

(75) 現、山口県立山口高等学校。

(76) 上仁川駅の間違ひであろう。現在の首都圏電鉄1号線の東仁川駅。

(77) 現在の南山公園である。

げ、用材は殆ど全部木曾檜材を御使用になって居るといふお話だ。それから境内で赤澤少佐殿の御説明あり、後ラムネを下さった。広い三方山に囲まれた京都みたいな町だ。それから下山して山麓の朝鮮物産陳列所を参観、旧総督府の跡だ⁽⁷⁸⁾、あまり目に止まる物も見当らなかった。参観後賑やかな本町通り⁽⁷⁹⁾を通り永楽町二丁目⁽⁸⁰⁾旭旅館へ着いた。尾関氏とここでお別れした。改めて同氏に厚くお礼申し上げます。時に午後五時、山口中学校が又先へ休息して居た。夕食後八時頃から府内見物本町通りを西へ行く。実に賑やかだ。内地人が多く出て居た。それから支那人町へはいった。支那の家は皆赤緑などの毒々しい色を塗ってある。朝鮮郵便局から北に折れ迷い迷って何時か鐘路通り⁽⁸¹⁾へ出て来た。支那人朝鮮人が小さいテント張りの店を出して居た。内地人などは殆ど見当らない。淋しい気になった。友達といっても二人しかない。一人はしきりに心配して居た。巡查に二回も尋ねた。妙な小さな通りを歩いてやうやく本町通りの東へ出て来て皆は始めて胸を撫で下した。十時には或者は長い煙管を右手に或者は絵葉書をポケットに旅館へ帰った。大そう疲れたのでグッスリと眠った。本日の仁川県人会及京城県人会員尾関、赤澤其他の諸氏のご尽力を感謝しつつ……（京城旭旅館にて）」

●「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月13日

「七日午前六時半頃一同起床、本日は第六日、昨夜はよく眠れた。九時半頃旅館出発本校先輩伊丹氏の御案内で府内見学、本町通りを歩いて朝鮮銀行⁽⁸²⁾へ行って参観、なかなか広い。地下室の大金庫に大そう驚かされた。それから左に南大門を見、電車通りに沿ふて行き京城府庁⁽⁸³⁾参観、四階建てで階上から府内を見下すと一眼だ。舎内一巡後同舎を後に左に大漢門を見、中樞院の前を通り、京城放送局 JODK⁽⁸⁴⁾参観、階上から京城第一高等女学校⁽⁸⁵⁾（内地人）の京城女子普通学校（鮮人小学校）がよく見える。それからすぐ下の先に見えた京城普通学校を参観。授業が終わった後であったが、特別に六年生二組を残して観せて下さった。国語をやった居た。

(78) 旧韓国統監府庁舎のことであろう。1910年に朝鮮総督府が設置された後、1926年（大正15年）まではこの庁舎を利用していた。

(79) 現在の退溪路の一本北、街路名はソウル中央郵便局の角の明洞 8na-キル（小路）である。本町通は日本統治時代京城日本人街の繁華街の象徴であった。

(80) 現在の水標路である。

(81) 現在でも鐘路と称する。こちらは朝鮮王朝時代からの繁華街、朝鮮人の居住者が多いエリアである。

(82) 京城郵便局の斜向かいにある。現在の韓国銀行貨幣金融博物館。

(83) 徳寿宮前にある。現在のソウル図書館。

(84) 現在の徳寿宮の裏の貞洞の丘に所在。津川泉『JODK 消えたコールサイン』白水社、1993年が参考となる。

(85) 京城公立第一高等女学校。放送局から見て北にあった。同校の学生については広瀬玲子の聞き取り調査による成果がある。『帝国に生きた少女たち：京城第一公立高等女学校生の植民地経験』大月書店、2019年。

上手に読む。先生が誰か読みなさいといふと全部手を挙げる。時々カキクケコ、タチツテト、タヂヅデドなど基本発音をやらして居た。ツが言い難ひ様で或生徒はストと発音して居た。なかなか日本人に負けない。然し朝鮮人同志で話す時には朝鮮語を使つてゐる。それから朝鮮総督府庁舎⁽⁸⁶⁾参観、昨年竣工したもので工事期間実に十カ年を要したといふ話だ。門は建造中だった。地下室から上へ上へと御案内して下った。そして食堂で京城府県人会から洋食を御馳走して下さった。次に朝鮮年中行事及び朝鮮の農業の写真各二巻を映写して下さって後で本県出身大成功者の一人たる農村経営者藤井氏⁽⁸⁷⁾の有益な体験談其のお話しあり。又総督府庁にお勤めになってゐる本県出身者の御挨拶あつてそれから広い玄関を見る。柱床など全部美麗な大理石で造られてある。いや玄関だけに限らない。殆ど全部柱床など大理石でつくられてあるといつてよい位だ。某君などは靴が濡つて尻持ちをついた。いや大笑ひだ。それから勤政殿及慶会楼を拝観、前者は朝見の儀其他重大な儀式、後者は宴会を行ふ御殿だ⁽⁸⁸⁾。約六十年前の建造物で現在朝鮮内木造建築物中最大なものだ。其他朝鮮博物館もあつたが時間がないので拝観出来なかつた。総督府庁以下何れも景福宮址にある。そこを出て電車に乗り昌慶苑を見物、同苑中には動物園、植物苑がある。時間がないので植物苑は見られないのは残念だった。なかなか広い。徳島公園の幾倍位あるか、とても分らない。閉門時間がきたので同苑を出て門前に整列、旧本校教諭近藤氏の御挨拶あり。同処で解散、午後十時駅前集合、同十時五十五分先輩及我等の友人の知人数名の御見送りを受け汽笛一声列車は北へ北へと。」

●「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月14日

「汽車の中でたたき起され、六時前プラットフォームへ吐き出された。冬シャツを二枚三枚着てゐるのに実に寒くてやり切れない。県人会のお出迎へをうけ絵葉書を下さった。弁当が未だ準備出来てゐなかつたので空腹をかかへて電車に乗り平壤神社を参拝し、七星門を通り朝鮮開拓、皇帝箕子廟を左に見下す。附近一帯城趾で周囲に箕子林があつて松が沢山ある。段々行って乙密台へ行く⁽⁸⁹⁾。相当立派だ。次に玄武門へ行く。説明によると日清戦役当時我日本兵原田重吉単身此の門を乗り越へ内より門を開けて我軍隊を入れたといふ由⁽⁹⁰⁾。牡丹台へは登らないで台下で記念撮影をする。転錦門を通り下山。人口十一万余、内地人二万五千、朝鮮第二の都会と聞くが余り印象がなく唯電気博覧会が眼についただけ。帰路は大同江に沿ふて途中小憩して駅へ帰る。やうやく弁当が出来たので買った。県人会からお菓子を下さった。次の列車で来る朋友二名を残して十時平壤発。多くのものが昼寝をしてゐる。新安州で弁当を食つた。混合

(86) 景福宮内に建設。朝鮮総督府は1926年(大正15年)に旧韓国統監府庁舎より移転。

(87) フルネームは藤井寛太郎。香坂昌孝『模範農村と人物』求光閣書店、1917年、pp.123-126他に伝あり。徳島県麻植郡鴨島の人。

(88) 新しい総督府庁舎はこの勤政殿の前に建てられた。

(89) 平壤神社以下すべて現在の平壤市街中心部の北側にある牡丹峰に所在。

(90) 1894年(明治27年)9月15日、平壤での戦いを指す。

列車だから遅い遅い。徳島のより遅い。新義州方面へ来ると一面の平野で周囲に低い山が取り巻いてゐる。六時十分前列車は新義州へ着いた。同駅で下車して徒走で鴨緑江を渡る。税関は至極簡単に挨拶一つ。唯写真を持ってゐるものが証明書を交付してもらふのに少し時間を要しただけ。鴨緑江は長いこと東洋一、人路は鉄道線路の両側にあつて幅約一間半、安東駅の近くの同地一流旅館元宝旅館へ宿泊、いよいよ南満洲へ乗り込んだのだ。支那町は危険なので九時迄日本町に限り外出を許可され、九時一同南満洲での第一夜を明かそうとする。僕は出発から南満洲乗込迄下手な文章で書いた。これからはY君が書いて下さる筈。」

(注：人名をイニシャルで表記した。)

●「徳商鮮満旅行団通信」『徳島毎日新聞』昭和2年5月17日

「長白山下しの朝風も肌に心地好く鴨緑江の川面を吹きくる風も暖かく異国の空は静かに明けて行つた。流れ静かな異国の河畔に泊つた旅人の顔には早朝日が輝いてゐるけれど旅人は起きようともせず心地好い暁の一睡を食つてゐる。旅人は余りに疲れ過ぎてゐる。けれどプログラムの進行上止むを得ない。眠たき目をこすりながら起きたのが午前七時、旅館の前には早くから支那人がわめきながら何やら売り歩いてゐる。異国の感じが心細いながらも感じられる。街路には緑濃きポプラ、アカシヤの木が茂つてゐる。疲れた旅人の心には一つの美しい慰めを与へてくれる。道は広くてアスファルトを敷き、アカシヤ、ポプラの繁つて植はつた安東の町は大変感じがいい。午前八時満鉄の方から安東市内を案内しに来てくれた。先づ最初満洲特産品たる豆粕豆油の製造所たる油房の見学に行つた。此の油房は陸記油房と云つて日本人経営の合資会社にして安東第一の油房である⁽⁹¹⁾。此処に其の油房の有様を記して見よう。油房の前は国境を流る彼の鴨緑江である。其処には幾多の彼の海賊船の様な黒帆の船が浮んでゐる。皆大豆の運搬船である。『ヤンヨウヤンヨウ』何とも判らぬ事を叫びながら船から大豆袋を此の油房の倉庫へ運んでゐる。此の労働者は所謂苦力である。大豆一袋の運搬賃が太平銀⁽⁹²⁾で一銭、一日中運び通しても五六十位のものであらう。そして見たら一日のエネルギーの代償として与へられる賃金は僅か五、六十銭である。日本内地普通労働者の賃金の三、四分の一にしか当らない。工場へ入ると圧搾された大豆を蒸す蒸気の為空気は多分に湿気を含み大変湿っぽい。此の労働者は皆支那人でとても日本人は六つケ敷く、二三ヶ月も働いたら肋膜炎になってしまうさうである。此処の労働者は素裸でよく働いてゐる。労働時間は十二時間^マ製で一日の給料七十銭、これでは日本人は労働者として支那人と競争する事は難事だらう。何を云つても支那人は

(91)陸記油坊は鴨緑江沿いの江岸路にあつた。満洲の油坊に関する調査研究は多い。大正～昭和初年の安東の油坊業については、南満洲鉄道株式会社興業部商工課『南満洲主要都市と其背後地』第1輯第1巻、南満洲鉄道株式会社興業部商工課、1927年、pp.286-291。

(92)太平銀は銀の塊である元宝銀の当地での呼称「鎮平銀」とコインである「大洋銀」とを混同したものであらう。ただし当地では「小洋銀」の流通が中心である。さしあたり森田元治郎・矢部仁吉編『満洲に於ける通貨及金融』満洲日日新聞社、1914年、第六編参照。

生活程度が低く一日の生活費は十銭内外であるから七十銭の賃金では余ってゐる事だらう。次に豆粕・豆油製造道程を記すと先づ大豆を二本のローラーの間を通じ圧搾し、之を適量にはかり之を蒸して、円形にして圧搾機にかけて豆油を搾り残りが豆粕である。其の技の熟練してゐる事全く賞讃するに値する。

十二時間労働制に支配された七十銭の賃金に甘んじてゐる労働者は哀れである。幾多の感謝を述べて油房の門を出た。表にはたくさんの支那人が集まって街路の傍で公然と賭博をやつてゐる。油房の中の労働者はあの様に懸命に働いてゐるのに遊ぶ者はこの様に矢張りブラブラして遊んでゐる。かくして亡国の民は自ら亡んで行く。誠に支那として亜細亜民族として同情に堪へない事である。

亜米利加領事館の前を通過して支那街⁽⁹³⁾へ出ると人相の悪い支那人がブラブラしてゐて気持の悪さ、一体支那は感じがよくない。大陸の国民である為もあらうが何等やさしさが表れぬ所なく獐猛な感じのする国民である。支那街の家は支洋折半風に建られ平均大建物が多い。各銀行の前には着剣した銃を擁した兵が番をして物々しい処がある。これを見ても支那の国情国民性の一端が窺はれる。

驢馬二頭仕立の馬車はジャンジャンと淋しい鈴の音を響かしながら走つてゐる。支那街を通りぬけて安東の背後に聳ゆる鎮江山⁽⁹⁴⁾へ登った。此処からは安東の街は一瞬の中に収められ、流れ静かな鴨緑江河畔は長白山の奥から流れてくる筏で埋められてゐる。

おお見よ！ 見よ！

此の美はしき流れを！

彼は白波を立て船を運び筏を流して久遠の彼方に向つて流れてゐる。

鎮江山には日露戦役の際九連城附近の激戦⁽⁹⁵⁾に戦死をした幾多の英霊を祭られる忠魂碑が聳へてゐる。

淋しく異郷の谷に眠れる勇士よ！

永にこの恵まれし安東の町を守つてくれ

桜も散りかけてゐる。桃も散りかけてゐる

美しい花の春は今この長春を去らんとしてゐる

『ポーッ』汽笛一條長駆奉天目指して列車は静かに安東を迂り出した。時正に、昭和二年五月九日午前十一時三十分愈々私達は国境を離れて行くのです。懐かしき故郷を離れて行くのです。

さらば！ さらば。懐かしの祖国よ！ 親しき友も！ 健在なれ！」

(93)安東市街は鴨緑江に沿い東北から西南方向に広がっている。北側が中国人街で鉄道駅に近い方が日本人街である。アメリカ領事館は鴨緑江からやや離れたところにある。茶木清太郎編『安東誌』安東県商業会議所、1920年、pp.7-28。また同書には大正年間の安東の地図が冒頭に収録されている。

(94)現在は錦江山と称する。

(95)1904年（明治37年）5月1日のこと。

●「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月22日

「満洲の広野を走る汽車、鐘を鳴らして走って行く。この鐘の音がとても大陸的で大陸の風趣を一層そそり立てて旅人の心にひそんだ旅愁を慰めてくれる。

鐘 鳴 汽車よ！ 大陸を横切って走る汽車よ！ 走れ走れ！ しっかり走れ！

広漠たるこの満洲の天地を温めた太陽も今や地平線下に眠らんとしてゐる。

おお赤い夕陽よ！ 蒙古荒しの風に吹きさらされたお前の顔は血がにじんでゐるじゃないか。明日又輝くは時清らかな純な顔をして我等の天地を照してくれ！ ね 赤い夕陽よ！ けれどけれど旅人は初めて接するこの雄大な大陸の日の入には全く魅せられてしまった。

夕日に映へた美しい空、輝いたレール総てが若い旅人の胸に物を思はせしめる。輝いた夕日も今や全く大陸を照す力も失せてポツネンと真赤になった図体を地平線上に現してゐる。

嗚呼美しい夕日よ！ 美しい、美しい！ 私は美しいと云ふ外何等形容する言葉を持ってみない。美しき大陸の日の入！ 全く旅人のみに与へられた天恵の慰めである。こんな美しい夕べが赤い夕陽に照された天地が二十幾年前には呪はれの戦禍に見舞はれた土地なのか。ああ世の流転の目まぐるしい事よ！

満洲の天地が静に眠らんとする頃ほい汽車は淋しい鐘の音を立てながら奉天駅へ到着した。時正に七時五分、奉天の第一印象は大変豪壮な明るい感じのする美しい町これである。建物は皆赤煉瓦か石造で大抵三四層である。木造建の家は一軒も見当らない。若し誰かが建てたら奉天の人達が見物に行く事だらう。何を云っても冬は零下何十度も下る満洲の事であるから木造では冬が越せないさうである。車道はアスファルトを敷き自動車はとてもいい速力で走ってゐる。車道の両側には赤シヤの立樹が蜿蜒と茂り全く欧州へでも来てゐる様な感じがする。旅館へ行く道々白色人種の夫婦共が沢山散歩をしてみても異国の感がひしひしと身に迫ってくる。宿は奉天一流の瀋陽館。今まで二流どこの宿にとまった私達にはとても勿体なさすぎる。全く紳士待遇であるけれどもちっとも悪い感じはしない。とても嬉しい。南満洲の真只中中外庶民の等しく腕を振ふ檜舞台の奉天は静かに夜のとばりに包まれてゆく。

旅人の身体も疲れた。

皆寝た。皆寝た。静かに眠った。若き旅人の心は幾多の美しいまどらかな夢路をたどってゆく。異国の空で結ばれしまどらかな夢路よ！ さも如何ならん。」

●「徳商鮮満旅行団通信」『徳島毎日新聞』昭和2年5月23日

「北満洲の大平原を過ぎて来た蒙古荒しは奉天の空を流れて行く。風は吹く吹く空は唸る。漂ふ雲は東指して飛んで行く。たれこめた夜のとばりも何処やら遠くへ吹き飛ばされて東の空は白々と明けてきた。晩は大分冷たのだらう。二重窓の硝子は皆露を結んでゐる。

雲足は大分速い。どす黒い雲がでてきた

ああ泣いてくれるな満洲の空よ！

お前は今日に限らず何時でも泣けるじゃないか

どうか意地悪はせずに泣かないでくれよ

ね 憧れの満洲の天地よ！

旅人は内地から来た遠来の珍客よ。

お前も輝いて旅人の勇姿を覗いておくれ。

だけれど晴れようともせず降らうともせず、唯どんよりと曇った空は冷い風の吹き荒むばかり。冷たい風冷たい風全く内地の雪風である。一寸用心してみないと直ぐに風邪を引いたり喉をいためたりする。これで四、五人喉をやられてしまった。誠に油断ならない。

九時四十分私達は今日も車中の人となつて東洋一の炭鉱撫順へ飛んで行った。

沿線の風向は唯平坦坦たる大広野の続くを見る許り。美しく耕された土地には今高粱と玉蜀黍の種が眠つてゐる。もう四五日もしたら芽をふいてくるさうである。未だ耕されず種の蒔かれてゐない土地も大分目につく。満洲の広野は大変肥沃で別に肥料はいらず収穫後の高粱の根は土のついた儘之を焼いて肥料にし、幹や葉は垣を作る。この垣は家の^マ囲りをグーッと取りまいてゐて一は馬賊を防ぐ為と一は寒い北満の風をさへぎるに備へてある。

一体支那といふ国は貧富の差の甚だしい処である。この無限に続いた大平原の多くは富豪の所有にかかはり一人で何千何万町と持つてゐる。これに反し農民はとても貧しい。けれど彼らは粗食油断なく好く働き一日十銭もあれば充分。耕すには馬二頭を使ひ大農法でどンドンどンドンやり速い事速い事。

食物といつても蒸した大豆に塩をかけて食べたなら上等である。けれど支那社会に中産階級の存在の薄弱は、社会をして健全な発達を望ましめない。

お話は變つて、奉天一体は今年に入つてから、まだ二度しか雨が降らないさうである。であるから土地は乾いてからから。早魃の時はどうも仕方がない。この広い所へ水を撒くといふ事も水を注ぐといふ事も全く不可能で唯雨の降るのを待つばかりである。昨年の早魃はとてもひどかったそうで何時も農耕時になると、北満から南満へと馬の大輸送があるのに、今年は今いふ大早魃の間南満の農民が馬の飼育に困難を感じたためか北満の地へ売り払つてしまつて此処に馬輸送の逆現象を引起し満鉄の方も大変忙しかつたそうである。

ついでに此処に馬の売買方法を話して見よう。蒙古辺りに産した馬は仲買人に買集められ、北満の広野に連れられてきて其処で売買が行はれて行く。其の方法は一種の賭博で一頭に付てではなく一群について行はれる。」

●「徳商鮮満旅行記団通信」『徳島毎日新聞』昭和2年5月24日

「買はんと思ふ人は先ず一定の金を渡しておいてそれから群がり集まつた大馬群に対し一鞭高く鞭打つのである。そしてその流れた方へ向つて行つた馬が渡した金の代償である。だから鞭の流れの方へ馬が行けば得であり少ければ損である。全く右へ振るか左へ振るか鞭の振方一つである。誠に大ざっぱな事をしてゐる。かくして買はれた馬は小売となり一頭替にて売られ、

南満の野へ下って来るのである。けれどもあまり好い馬はできないさうな。

それに南支の状態があの様⁽⁹⁶⁾であるから、支那農民の避難が多く撫順線の一番列車なんか何時も鈴なりで、満鉄の方は何時も避難民輸送の為貨車の四五十輛も連結した臨時列車を出して輸送してきたそうであるが、それでも運び切れなかったとの事。貨車と云っても内地の様に九噸や十噸や十二噸積のものとは違って二、三十噸積のものである。だから一日に何万人の避難民を輸送してきた事になってゐる⁽⁹⁷⁾。そして其の避難民の臭い事臭い事、全くお話にならないさうである。その為か私達の乗ってゐる客車の臭い事臭い事これ又お話にならない。

文読む人の缺乏は斯の如く自ら国を乱し自ら苦しんで自ら亡んでゆく。実に今は哀れである。支那農民は可哀さうである。一年中の汗と力の代償として与へられたものは皆奪はれてしまひ、馬はとられ頼むは満洲と許り皆日本の勢力圏へと流れ込んでくる。

早く誰か孔子か孟子の如き偉人よ出でて虐げられたこの哀れな農民を救ってやれ。
眠れる駿馬よ！ 早く目覚めよ！

さうでないとお前の目覚めた時には手も足も折られてしまい立つに立てれぬ自己を見出さなければならぬだろうよ。

避難民の輸送も今月に入っては少く、先の者も皆それぞれ落付いてゐるとの事。

ああ何が悲しいのか満洲の天地は到当泣いてきた。けれど農家の廻りにゐる豚はせつせつせつと何か食べてゐる。

満洲の荒野は、カオリヤン玉蜀黍の作り出される広い天地は、少しは湿るか知らん。けれど長降はしなかった。直に止んでしまった。早汽車は撫順の構内を走ってゐる。長い事長い事多分二哩近くもある撫順駅の構内を！」

●「徳商鮮満旅行記（四）」^マ『徳島毎日新聞』昭和2年5月26日

※（五）の誤記か

「撫順！ 撫順！！ 撫順！！ 何んといふ感じのいい名だらう。プラットフォームに降りた私達の目には駅の建物、出迎へてくれた満鉄県人の方の顔までが何となく黒く感じられる。此処で私達はお隣の香川女子師範学校の旅行団と一緒に、撫順見学総ての行動を共にしてきた。駅の前には撫順町行の電車が走ってゐる。之に乗って私達は先づ炭鉱事務所へ飛び込んだ。事務所といっても三層の花崗岩造り、全く巨大なものである。此処の講堂で撫順炭鉱に付いていささか予備知識を賜った。事務所の前にはこれと同等位の支那病院が建築中で、全く徳島では夢にも描けない。

電車は可なり好い速力で走ってゐる。幾十分かの後私達は撫順の町へ吐き出された。ああなんたる事ぞ！ 家は毀れ、煉瓦は累々ところがり全く戦禍に見舞はれた町の様に荒れ果てゐる。

(96) 1926年（民国15年）より国民革命軍による中国統一運動（北伐）が進行していた。

(97) 1927年（民国16年）華北で発生した自然災害により多くの避難民が満洲へと流入した。荒武達朗『近代満洲の開発と移民：渤海を渡った人びと』汲古書院、2008年、第四章。

家はありとてもガランとして人の気配もせず緑濃き街路樹もなんとなく活気がない。幼な子二人手をとって歌を唱ひながら行くのもなんとなく哀れである。

一世に名だたる露天掘炭坑は駅のすぐ傍である。

おお俯瞰せよ！ 覗けよ！

この雄大な露天掘の偉大さを！ 目に見ゆる処、踏む処、觸るる処総て石炭ばかりである。地下幾千尺の下で働く坑夫は日の光も見ず命を賭して働いてゐるのに、此処で働く坑夫ばかりは皆暖かい春の慈悲光を受けて皆せつせつせつと働いてゐる。皆幸福さうである。幸福に輝いた労働者は、南支から逃れてきた人もあらうがどんなに嬉しい事だらう。この歴大な露天掘が更に今の二倍大に拡大されてゐる。撫順の町は北方三哩許りの処へ移転中である⁽⁹⁸⁾。だから町があんなに荒れ果ててゐる事、哀れ淋しく残れる一軒屋で昼餐をした私達は大山炭坑へと進んだ。此処は坑内掘で一二三四呎の地下では幾千の人々が昼と知らず夜と知らず美しい自然にも恵まれず春に背いてせつせつせつと働いてゐる。お次は今問題となつてゐる『オイルシェール』から重油をとる搾油場である。仲々沢山搾られてゐる。残りかすは又炭坑へ送られ坑の充填用として用ひられてゐる。お隣には有名なモンド瓦斯工場がある⁽⁹⁹⁾。安く得られた瓦斯からは安い電気が生まれてくる。この電気が撫順炭坑の原動力で二四五〇〇キロワット、これで東洋一の炭坑も簡単ながら一通り見た訳である。帰りの汽車の中で疲れた私の胸はこんな事を考へてゆく。『我若し王者なりせばこの広漠たる大満洲の天地と之が併呑する宝庫を我が掌中に収めたらんに……』ガタンガタンと突然の車体の動揺は私の胸に結ばれた、夢想の樂園を現世へ呼びさまさしてしまった。早汽車は奉天へ帰つてきた、ああ、果敢なく散りし夕べの空想よ！

●「徳商鮮満旅行記（六）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月1日

「時は明治卅八年三月十日⁽¹⁰⁰⁾露軍の運命を背負つて立つクロパトキン大将をして（朕は包圍せられたり）と泣かしめた北陵⁽¹⁰¹⁾は千古のローマンスを秘めてほほ笑んでゐる。幽邃閑雅な平原の森の中に誇り顔に立つ北陵にて太宗文皇帝の霊が眠つてゐる。青く赤くあくどいまでに色どられた家は黄色く輝いた瓦を戴いてゐる。平々坦々たる満洲の広原にも春の訪れは花を咲かし鳥を歌はしめる。おお春の目覚めは輝かしい。今は梨花の酣よ！ 緑したたる若葉の中に鄙びた可憐さを持つ白い梨花が咲いてゐる。森をすかして見ゆる満洲の平原は深い平蕪の緑許り。

(98) 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』南満洲鉄道株式会社、1928年、pp.1133-1135。

(99) 満鉄による採炭事業については前掲南満洲鉄道株式会社庶務部調査課、1928年、第二編第四章。オイルシェール、モンドガス工場については飯塚靖「満鉄撫順オイルシェール事業の企業化とその展開」『アジア経済』44-8、2003年参照。

(100) 1905年（明治38年）2月21日～3月10日の奉天会戦を指す。

(101) 清朝太宗ホンタイジとその妻の孝端文皇后の陵墓。

お前はどこまで広いのか

お前はどこまで雄大なのか

私やお前の雄大さに憧れる。

けれどこの平原も曾ては我が同胞の血塗りし処かと思へば、我等の心も軽くは飛び立たない。時は移る境遇は変る。足下彫刻のある石段を踏んでみる。其処には一枚のヒスイの敷石がある。この石一つでも持って帰ったらよい土産になるだらうに…ヒスイの敷石！ 如何なる世界の富豪と雖も、これ許りはなからう。この一事を見ても、三百年前の栄華の昔が偲ばれる。此処へは支那人の紳士然たる人、若い夫婦等ブラブラ来てゐる。全く北陵は俗化してしまつてゐて奉天人唯一の遊園地らしい。此処ぞ奉天の町を去る事北方一里余り、正しく我等の行く最北端の地である。此処で記念撮影をして、又車上の人となり、馬は寸余の砂地を蹴って白煙濛々と煙の中に吞まれ行く。うつるうつる四方の風光は美しいメリーゴーラウンドの如くグルグルと、巡る巡る、思索は巡る。思索の走馬灯は駁々と巡る。馬車は止まった。処は満蒙毛織会社である⁽¹⁰²⁾。何時の間やら服は満洲砂で真赤、全く満洲ならではのきぬ事。本当に満洲気分タップリよ。

蒙古嵐に吹きさらされて

私の顔や真黒す

私しや満洲の盟君よ

飼ふた羊がたった百万頭

こんな歌が唄ひたくなる。蒙古満洲に産したラクダ毛、羊毛は皆この会社に運ばれて来て織布となり毛糸となり、毛糸となって市場へ出され行く。此処には十三、四の子供、娘が沢山働いてゐる。悪戯盛りの面白い時をこんなにして過ごさなければならぬ少年少女労働者は可愛そうである。文も読まず唯働くばかり。これでは支那の今後を双肩に荷ふ者としては余りに悲し過ぎる。隙行く駒の足は速み早日はトッピー暮れてしまった。奉天の町には灯が瞬いてゐる。闇に咲く露西亞の女が早歩いてゐる。輪の低い柄の長い人力車も朗らかに鐘を鳴らして走つてゐる。昼の活動から夜の活動に入らんとする町は騒がしい。先輩正木、松浦氏県人の方より絵葉書、筆等沢山に土産を戴き八時十五分閤をつんざく汽笛の音幾多の県人の方々の御見送りを受けて旅人は二十万の人の住む奉天を去って行く。（では皆さん。色々御世話になりました。どうか御健康に益々御発展なさるようにならう……）何の知人もなく頼るべき人もない旅人には、一面識なく唯同県人といふ誼を以て色々とお面倒を見て下された在奉県人の方々がどんなに強く感じたか、どんなに嬉しかったか、本当にあの人達の心は美しい。誰も彼れもあんな美しい心を持ってゐたらいまはしい醜い事変は世に起こつてこないだらうに……。」

(102) 奉天駅の裏側にある満蒙毛織株式会社であろう。同社については柴田善雅「満蒙毛織株式会社の1920年代の不振と『満洲国』期の再起」『大東文化大学紀要（社会科学）』52号、2014年が沿革、事業の実態を論じており参考となる。

●「徳商鮮満旅行記（七）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月3日

「走るよ 走るよ 汽車は唯一筋に闇の広野を横切って大連目指してまっしぐら、營口の空を右に眺め得利寺、金洲南山と傷しい日露の戦跡を経て汽車が満洲の門戸大連に着いたのは五月十二日朝まだき七時を過ぎる廿分、十数人の徳島県人会の方々が出迎へに来てみてくれた。なんといふきたない町だらう。之処が満洲の門戸大連か！

こんな処に十八万もの人が住んでゐるのか！ 大連のファースト、インプレッションは大変悪い。今日は旅順の戦跡巡行。午前八時廿分再び車中の人になって旅順へ向った。一緒になったものには熊本商業、八幡浜商業⁽¹⁰³⁾、香川女子師範、愛媛女子師範⁽¹⁰⁴⁾等がある。ポプラ、アカシヤの植はった沿線は赤土の山又山でコンモリと茂った森は何処を見ても視界には入ってこない。石ころ許りの土地は美しく耕されてゐるが何ができるのだらう。

第三軍の北進せし処、乃木將軍の駐屯処を過ぎて旅順へ着いたのは午前九時三十六分、二頭仕立の馬車で本校先ず先頭に二〇三高地へと馳せ登った。高く聳えた爾靈山の碑、激戦激戦又激戦鮮血山を覆ひ山形改むとまでいはれた爾靈山はいたましい姿をして露にむせんでゐる。

ああ廿幾年前の英雄よ！ 我が阿州健児は汝等の偉勲をしたって訪れてきたよ。淋しく異郷のかたほとりに眠れる勇士も久々に見る祖国の雄々しき若人を覗いてどんなにか嬉しがった事だらう。

案内者の説明を聞いてゐる私達に何時かまぶたが熱くなってくる。直ぐ足許には乃木保典氏の墓が淋しく立ってゐる。塹壕はその儘残ってゐる。爾靈山の頂上も空しく風雨にさらされて肌を現してゐる。電光式の道も残ってゐる。総てが若人の心に物を思はしめる。太平洋の風雲急を告ぐるとも、欧州の空には再び砲火轟くとも嘆き多きこの地よ！ 永に平和なれ！

再び馬車は馳せて美しく繁った林檎畑の中を抜けて博物館へ着いた。赤く熟した林檎を食べて渴を慰め戦ひを続けた勇士の姿が浮かんでくる。此処の博物館には考古学資料ミイラの蔵があるが余り興味を引かない。関東庁長官舎を過ぎて白玉山へ着いたのは午を過ぎる卅分。巍然と聳ゆる二百十八尺の表忠塔、国民赤誠の忠烈や千古不朽である日露の偉勲や満洲の空高く香り世界に広く玉と光る。頂上へ登れば旅順の市街や一目瞭然我が掌中にあり、東港西港我が足下にあり。工科大学、関東庁を眺め、今来た二〇三高地も遙か西方に霞んでゐる。」

●「徳商鮮満旅行記（八）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月5日

「白玉山の前方には旅順の会戦に戦死せし勇士の骨をおさめた納骨祠が立ってゐる。一同最敬礼をして祖国の為に一身を犠牲にし淋しく異境の山頂に眠れる勇士を慰めた。遙か北方には水

(103) 現、愛媛県立八幡浜高等学校。

(104) 現、愛媛大学教育学部。

師営の町が眺まれる。霞たなびく東方には剣山が眺まれる⁽¹⁰⁵⁾。我が閉塞隊を悩ました黄金山も狭い港口のかたはらに聳へてゐる。飽る迄血を呑みし白玉山の風光や絶佳である。大倉君日本アルプスにて風葬するなれば、我この天地にて雨葬にして淋しく眠れる勇士を慰めよう。やがて此处を辞して東鶏冠山北堡壘へ向った⁽¹⁰⁶⁾。此处ぞ明治三十七年十二月十八日我が十一師団決死隊の占領せし処なるぞ！ おおペトンの大堡壘よ！ これに投げられし我軍の肉弾や如何ならん。何も知らずに打出されるマキシム機関銃に倒れ行く我軍の果敢なさ、俯仰佇立正しく断腸の感がある。累々と転がる大石、隧道を作つて進んできた我軍の跡、深い塹壕総てが昔の儘、厳めしいペトンの大堡壘も我軍の弾丸に打くだかれて哀れを止めてゐる。実にや乃木將軍の苦心の跡が窺はれる。時は移つて戦役記念館へ来る。十珊砲に射抜かれた天井は其の儘に戦利品、攻囲戦に使用した武器、要塞の模型、突撃中の我軍の写真あり又新な感がある。これで旅順戦跡も一巡りした。天地有情の夕まぐれ、夜は静かに更けて行く。我が眠れる勇士の墓辺よ！ 夜よ暗れ、風よ静かなれ！ 今夜は私達は大連徳島県人会の招待で支那料理屋の晚餐会へ出席した。次から次へと来る支那料理に夜の更けゆくのも知らず舌鼓を打って食べた。私達には未だにその味が舌に残つてゐる。」

●「徳商鮮満旅行記（九）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月7日

「静なるべき暁の気は早くもけたたましい油房の汽笛に攪乱され極東の一端に位する大連の町は早くも目覚めた。明け方からしよぼしよぼ雨が降つてゐる。今日（十三日）は満鉄宮内氏本校先輩本荘氏の御案内で大連市内見物の段取り、午前九時先づこの大満洲産物の輸出港大連の埠頭事務所へ行った。道行く可愛い坊ちゃん嬢ちゃん、絶域花は稀ながら清く咲いた大和撫子は高く高く異境の天地に香つてゐる。行き交ふ支那人髪を長くたらしめたテヨンガー、前髪たらしめた可愛い娘、風にもなよぐ纏足の女、総てが支那の表現である。前髪たらしめた乙女の姿は可愛い、耳に下げたヒスイの耳輪は高貴である。美しく模様づけられた緞子地の服着た乙女は美しい。埠頭事務所⁽¹⁰⁷⁾の露台からは、二億五千万両の貿易をなし百万坪の海面を抱擁し十二万坪の野積場を有する大連港は一眸の中にあり、明日乗るバイカル丸が巨大な船体を埠頭に横付けてゐる。遙か北方は遼東の一端に連る千山山脈の千波万波が望まれる。お次が大分かけ離れて南満広野の盟主満鉄本社⁽¹⁰⁸⁾から新築なりし満鉄病院⁽¹⁰⁹⁾へと向かつた。六階建の病院は

(105) 前掲荒武達朗、2020年参照。

(106) 旅順の戦跡については前掲荒武達朗、2020年及び木之内誠等編『大連・旅順歴史ガイドマップ』大修館書店、2019年参照。大正から昭和にかけての同時代的資料としては弦木悌次郎『旅順戦蹟志』川流堂小林又七本店、1917年などが詳しい。

(107) 大連港埠頭事務所。現、大連港務局。この大連・旅順の探訪には木之内誠等編『大連・旅順歴史ガイドマップ』大修館書店、2019年に負うところが大きい。

(108) 現、魯迅路の鉄路局および満鉄旧址陳列室。

(109) 満鉄大連病院。現、解放街の大連大学附属中山医院。

実に堂々たるものである。此処には本県出身の眼科副院長森様がおいでになり色々御案内を下された。露台からは雨にかすんだ大連港を眺め北方山麓の住宅地、正金銀行、女学校、赤旗の翻った露西亜の領事館が見える⁽¹¹⁰⁾。やがて此処を辞して大広場⁽¹¹¹⁾へ出て来た。大都会の真只中に青々と繁った若葉は疲れた都会の人の目をやすめてゐる。午が来た。腹は空いた。昼餐した処は満洲野球界の覇者大連商業学校⁽¹¹²⁾、未来に幾多の三井三菱渋沢翁の生れくる商業学校同志は大変仲が好い。降ったり止んだり気紛れ天気は又降り出して来た。目指すは東洋一の沙河口大工場⁽¹¹³⁾、機関車、客車満鉄の必需品は皆造られ、工場の広い事広い事とても素晴らしい。雨もやんで暖かい日が輝いてきた。遼東第一の佳地星ヶ浦⁽¹¹⁴⁾に吹き寄す風も暖かく、久々に見る碧瑠璃の海が懐かしい。此処で満鉄の招待で茶話会があり渚伝いに歩いて有名な泥棒市⁽¹¹⁵⁾を過ぎて大満洲蒙古の秘むる無限の宝庫を陳る満蒙物資参考館⁽¹¹⁶⁾へ着いたのは夕暮れ迫る五時過ぎ、石炭、砂金、銀、水晶、羊毛等処狭きまでに列んでゐる。

我等の心は躍ってくる

おお秘められし宝庫よ！

汝和が掌中に収められん

さらば汝暫く影をひそめよ

捜索者の目は余りに厳にすぐる。雨はれの夜は輝く街灯に映えた町へ土産の買い物に出掛け行く。昼に引きかへ夜の大连は一入賑やかである。灯ともし頃になると何処からともなく支那人の露天店が街路狭く張出して来る。双手抜ける迄に買はれてきた土産は宿屋の部屋狭く、ならんでゐる。十三夜の月も朧にかすんで下界を照してゐる。何を夢みてゐるのだらう。眠れる旅人の顔には微笑が堪へられてゆく……。」

●「徳商鮮満旅行記（十）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月8日

「清く晴れた昭和二年五月十四日の空には早くも朝日は輝いてゐる。今日は異国の空を離れる時よ。午前十時幾多の県人先輩の方々の御見送りを受けて二百余人の県人の住む大連を去って行く。ああ思ひ出多き満洲の空よ！ 懐かしき奉天大連よ！ 早旅人は去って行く。さらば別れん暫く間、我再び見ゆるよ、その時は又今日の如く、双手を挙げて我等を迎へてくれ。ドラの響きもうら悲しく海上高く鳴り響き、美しく渡されたテープは五彩陸離として風に靡き、互に場所こそ異なれ其の心はテープを通じて戦いてゐる。

(110) 女学校は不明。その他はすべて中山広場に面している。

(111) 現、中山広場。

(112) 大連高等商業学校。現在の勝利路にあった。

(113) 満鉄沙河口鉄道工場。現在の沙河口区、中国中車大連機車車輛。

(114) 現在の星海広場近く、星海海浴場。

(115) 西崗子露店市場を俗に「泥棒市場」と称す。現、瀋陽路と長春路の間。

(116) ロシア統治時代のダルニー市役所の建物を利用。現在の煙台街にある。

さらばさらば県人の方々よ
懐かしの故郷は鎖国の阿波
進取の気とぼしき島人に
好き模範を示してあれ

浮城のバイカル丸⁽¹¹⁷⁾は静に岸壁を離れる。テープは切れる。切れる度に一脈の淡い悲しみが増してくる。見送りの人々の面も定まらず。姿も終には見分かぬ迄に消え失せて船は煙波縹渺たる晩春の彼方へ向って白波蹴って進みゆく。

港外には今着いた香港丸が静々と進んでゐる。二つの船の間には白い手巾が翻る。何も知らない旅人同志一は大海を渡ってきた人と一は今から渡らんとする者、そこには云ひ難い懐しさがある。本当に旅する人の心は純で美しい。旅順の空も依稀として見分けられない。

おお憧れの満洲の天地よ
南満の広野に淋しく眠り続ける雄士よ！

汝等の残せし偉勲には永久不滅の光が輝いてゐる。時は移って世は昭和の聖代よ。新帝登極の春は来って安寧と福祉と希望がある。国は彌々榮へ行く。おお不朽の勇士よ！ 眠れ眠れ安らかに眠れ！

十二時頃には船は洋々たる大海原を走ってゐる。見渡す限り碧瑠璃の空に融込んでゐるのを見るばかり。船は全く羅針盤航海に移った。ざんざんざの波の音、船べり打つ音も面白く、聞けばいみじき楽の音と我等の耳に入ってくる。太陽は没した。美しき夕映の空は波にくだけ十四夜の月はかすかに姿をあらはしてゐる。闇は海面静にたれこめて我等の船をつつんで行く。月は照る照る波間にくだけ船は機械の物憂い一脈のリズムを闇の中に響かして祖国目指してまっしぐら！」

●「徳商鮮満旅行記（十一）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月9日

「船は刻一刻と祖国へ近づいて来る。時間も一時間夜の間に進められ十四日は廿三時間。

船は『勇敢な水兵』⁽¹¹⁸⁾で其の名高き黄海の真只中を進んでゐる。気味の悪い迄に濁った大海原は無限の彼方にまで続いてゐる。

波は波を追って永遠に消えてゆき沖のかもめは波に生れて波に死し果敢なく散ってゆく。

共に乗った福山師範⁽¹¹⁹⁾、大分農業⁽¹²⁰⁾、熊本商業、香川女子師範皆甲板へ出て来て輪投げに興じ退屈な海上の昼を過ごしてゐる。

皆旅人である。明日は皆左右に別れなければならない人ばかりである。一緒にゐるのが僅二

(117) ばいかる丸。大阪商船株式会社所有。1921年（大正10年）製造。大阪―大連航路に就航した。『大阪商船株式会社五十年史』大阪商船株式会社、1934年、pp.243-248 及び pp.409-425 参照。

(118) 「勇敢なる水兵」の誤記。1894年（明治27年）9月17日の黄海海戦での故事に基づく。

(119) 1932年（昭和7年）廃止。その後広島県立福山誠之館高等学校が同校舎に移転。

(120) 現、大分県立三重総合高等学校。

三日にしろ旅でなれた人と別れなければならない事は若い旅人の心に悲しい事である。

午後船は朝鮮圏内へと入った。左に散らばった島影を通り行く白帆、右には霞棚びく彼方に隠見する濟州島を眺め暮色迫る中に玄海の荒波へと頭をつき入れた。五千二百噸の巨船も大自然の前には木の葉の如く翻弄され、誠に人間の創造物は惨めなもの。船は揺る揺る。気持ちが悪い。十五夜の月も惜気もなく振り捨てて皆早く寝てしまった。

玄海の荒波よ

お前は何故そんなに荒れるのだ

お前の為にどんなに旅人が悩んでゐるか

判らないのか！

もっと静かになってくれ

もっと穏かになってくれ

紫にほふ雲の彼方には夕やみの中に九州の連山がほほえんでゐる。玄海の荒波も夜の間に無事に乗越して船は早開門へ入った。先づ検疫があり狭い開門に停泊したのは十六日午前十時、此处で半分の乗客が降りてしまい、福山師範、大分農業、熊本商業、香川女子師範も皆降りてしまった。後に残ったのは唯本校のみ。五千二百噸のバイカル丸もヒソリしてしまった。出帆時刻まで各自思ひ思ひに下関なり門司へ渡って一寸見物して来た。午後二時半天津⁽¹²¹⁾の潮流に乗って船は世界の瑠璃の花園瀬戸内海へ向かつて静に迂り出した。穏かな海面に波のまにまに漂ふクラゲが突然の大波にもまれてひたまげにまげてゐる。

美しく映へた夕焼静な海面にくだける空の色、長閑な白帆の帰り船、これぞ世界詩人の憧憬境であり瀬戸の風光の生命である。

十六夜の月はこの恵まれし瀬戸の上を照らしてゐる。過ぎ行く島々も朧にかすんで月にぼんやりと姿を現してゐる。

船首に碎ける波の音を心地好い子守歌と聞きながら、旅人は明日は帰る故郷の人々の美しい笑顔を追ひながら深い眠りに落ちて行く。」

●「徳商鮮満旅行記（十二）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月10日

「長い長いと思った三晩四日の大連航路も飽る事なく無事神戸第四突堤⁽¹²²⁾へ着いた。時正に五月十七日午前十時四十五分税関も無事に通り双手抜ける迄に提げた荷物に手古摺ながら十一時半出帆の阿撰航路船に乗るべく急ぎに急いでやっと兵庫に着いたのは出帆時刻五分許り過ぎてゐた。けれど共同汽船会社の御好意で待ってゐてくれて幸に乗る事を得、荷物を船に置いた時は誰も彼も汗も^{ママ}みれ、大連航路の大汽船に乗ってゐた為か船が小さく見えて仕方がない。今日は大分風が荒く由良を出てからは大分揺って来た。由良辺りで女学校の旅行団の乗ってゐる

(121)詳細不明。

(122)神戸新港第四突堤。現在は神戸ポートターミナルがある。徳島・淡路航路はここから離れた兵庫駅近くの「兵庫突堤」を発着港とする。

船とすれちがったが只黙々と行き過ぎてしまった。こちらの船には白い手巾がひらめいてゐたのに。四時半無事に十六日ぶりの懐しい徳島の地を踏んだ。奉天大連の大都会に見馴れた目には小松島の駅は安奉線の山中の一小駅としか写ってこない。鼻つく様な日本の国、小さい汽車、あの汽笛が何だか悲鳴をあげてゐる様に聞こえてくる。恙なく終点の徳島へ着いた時には校長先生諸先生幾多の学校が出迎へてゐてくれた。蒙古荒しに吹き曝されて黒くなって帰つて来た、私達を見て皆驚いてゐた。半月ぶりに見る眉山は若葉の新緑が一層深くなってゐる。尽きせぬ思ひは空の星にまかせおき微笑み迎へてくれる人々の顔を描きながら家路へと急いだ。永年の望みであつた満鮮旅行も満鉄の限りなき御便宜御好意、存外県人方々の尽きせぬ御面倒諸先生の御配慮の結果無事に終り県下嚙矢の満鮮修学旅行が此処に完全に好成績を以て達せられた。其の旅行が僅半月にしる、遠く満洲まで学びに出掛けた我等徳商健児の意や偉とすべきである。世は昭和の聖代に照されし御代なるぞ！ 高く掲げられたモットーは『日進日新』である。我等の遠く満洲まで修学旅行に行ったのも全く時勢の然らしむる処である。今後の日本を双肩に荷ふ者として時代の趨勢に遅れては御国に対してすまない。阿波の人々の海外雄飛の氣象乏しきは正しく時勢に反してゐる事夥し。日本の現状を見る時は誰か安々としてこの祖国に止る事を得ようや。

我等の働く天地は広いよ！

あながちこの狭い日本に踟躕すべきものではなからうよ！

行かうよ

行かよう

阿州の健児よ！

目指す満洲はひとまたぎ！」

別表 昭和前期修学旅行シーズン（4～6月） 徳島県中等教育機関修学旅行関係記事（学校別）

■1923-40年（大正12年-昭和15年）4月～6月 『徳島毎日新聞』徳島県立図書館所蔵状況

所蔵状況は全体として見れば国立国会図書館の方が良好である。しかし2019年末以来の感染症の拡大により、徳島県内での作業が中心となった為、本稿の執筆に当たっては徳島県立図書館所蔵分を中心とせねばならなかった。
同館の欠号部分が多い年度は2021年秋立国立国会図書館所蔵分で補完した（斜体で表示）。これは国立国会図書館の所蔵状況を反映したものではない点に注意。
なお同紙は特に1929年から33年にかけては欠号部分が多く、1929年は徳島県立図書館・国立国会図書館ともに未所蔵である為未閲覧。
1924年、28年、30年、33年、36年、41年分の両館の所蔵状況は同じである。

- 1923年（大正12年）4月25,27日【徳図】、4月1-3,5-20,22,23,25,26,28,30【国図】、5月1-31日、6月未所蔵。
- 1924年（大正13年）4月1,3-30日、5月1-31日、6月1-30日。
- 1925年（大正14年）4月1-3,5-30日、5月1,16,18-31日【国図】、6月1-21,23,26,28-30日【国図】、5月1日・6月14日のみ【徳図】。
- 1926年（大正15年）4月1,2日【徳図】4月1-3,5-19,23-29日【国図】、5月1,3-31日【徳図】、5月1-31日【国図5月2日のみマイクロフィルム別】、6月3,5,9,16,18-20,23日【徳図】、6月4-7,9-13,15-24,27-30日【国図】
- 1927年（昭和2年）4月2,3,5,6,8,9,11,13-29日【徳図】、4月2-9,11,13-29日【国図】、5月1-31日、6月1-30日。
- 1928年（昭和3年）4月1-3,5-29日、5月1-19,21-25,27-31日、6月1-30日。
- 1929年（昭和4年）徳島図書館・国会図書館ともに未所蔵。
- 1930年（昭和5年）4月6,7,9,11,16,21,27日、5月6,7日、6月15,16,18-23,25,28-30日。
- 1931年（昭和6年）4月1-3,5-29日、5月1-31日、6月20日【徳図】、6月21-30日【国図】。
- 1932年（昭和7年）4月1-3,5-27,29日、5月1-13日【国図】、6月未所蔵。
- 1933年（昭和8年）4月未所蔵、5月20,21日、6月2,26,28-30日。
- 1934年（昭和9年）4月11-13,18-29日【徳図】、4月1-3,5-29日【国図】、5月2-5,7-9,11,13,14,16-19,21,22,24日【徳図】、5月1-31日【国図】、6月2-25,28日【徳図】、6月1-30日【国図】。
- 1935年（昭和10年）4月5-29日【徳図】、4月1-3,5-29日【国図】、5月1-13,15-31日【徳図】、5月1-31日【国図】、6月1-30日。
- 1936年（昭和11年）4月1-3,5-29日、5月1-31日、6月1-30日。
- 1937年（昭和12年）4月1-29日【国図】、5月1-31日、6月13-30日【徳図】、6月1-30日【国図】。
- 1938年（昭和13年）4月3,5-30日【徳図】、4月1-3,5-29日【国図】、5月1-30日、6月1-30日【国図】、6月30日のみ【徳図】。
- 1939年（昭和14年）4月1-29日【国図】、5月1-30日、6月1-30日。
- 1940年（昭和15年）4月1-3,5-25,27-29日、5月1-31日、【国図5月6日欠】、6月1-30日。
- 1941年（昭和16年）4月1-3,5-29日、5月1-31日、6月1-30日。

■凡例 ▲印：中学校・師範・商業・農業（男子校） 高女：高等女学 女師：女子師範 高実女：高等実業女学校
※印：修学旅行関係の記事（旅日記・旅信を除く）

■1923年（大正12年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
徳島県立図書館・国会図書館ともに6月分が欠号のため詳細判明せず				
女師・高女	女子師範修学旅行 五月三日出発	T12/4/14	11	※ 日光東京関西 5/4～5/14
女師・高女	女師高女生三日と四日に出発 修学旅行	T12/5/4	2	※ 東京日光および関西の2隊
女師・高女	女師生の旅行報告	T12/5/25	3	※ 24日午後報告会開催

■1924年（大正13年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
女師・高女	徳島女師高女近畿旅行	T13/4/13	3	※ 近畿方面 5月中旬出発
女師・高女	女師高女校修学旅行	T13/5/11	3	※ 5/17出発 旅程詳細
徳島中学▲	徳島中学の修学旅行	T13/4/15	3	※ 阪神方面 5/4～5/9
徳島中学▲	徳中修学旅行	T13/5/6	1	※ 5/4出発
徳島中学▲	徳中四年生旅行の日程	T13/5/7	5	※ 旅程詳細
富岡高女	富岡高女旅行	T13/4/24	2	※ 東京京都 5/4～5/11
富岡高女	富岡高女四年旅行日程	T13/4/25	3	※ 関東関西 5/1～5/14
富岡高女	富岡高女東京旅行団出発	T13/5/4	4	※ 5/1出発
撫養中学▲	撫中修学旅行	T13/4/28	2	※ 近畿方面 4/28～5/4
徳島商業▲	商業学校の修学旅行	T13/4/29	2	※ 5年北陸仙台関東関西 5/10～5/24、4年京都伊勢 5/11～5/17、3年香川
徳島商業▲	旅路より	T13/5/16	5	徳島・大阪・奈良・伊勢へ
徳島商業▲	京都より（上）	T13/5/18	5	京都
徳島商業▲	京都より（下）	T13/5/19	6	京都
徳島師範▲	師範の修学旅行 東京日光	T13/4/30	2	※ 関東関西 5/13～5/24
富岡中学▲	富中修学旅行	T13/5/4	1	※ 香川岡山兵庫 5/5～5/11
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/17	5	徳島・神戸・大阪へ
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/18	5	奈良・伊勢へ
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/20	5	伊勢・名古屋へ
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/22	5	江ノ島
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/23	5	鎌倉
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/25	5	東京
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/26	5	東京・日光へ
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/27	5	日光・長野へ
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/28	5	善光寺・名古屋へ
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/29	5	名古屋・京都
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/30	5	京都・大阪へ
三好高女	三好高女東京修学旅行	T13/5/31	5	大阪・小松島港を経て帰校

■ 1925年（大正14年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
	中等学校生徒県外旅行に反対	T14/4/25	2	※ 効果疑問。県、見合せを各校に通牒。
	徳島女師高女登山中止	T14/6/28	3	※ 例年希望者が1週間登山旅行。本年県による修学旅行差し止め中止。以後廃止。

■ 1926年（大正15年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
徳島師範▲	徳島師範四年修学旅行	T15/5/4	2	※ 京阪神 5/4～5/14
女師・高女	徳島女師高女旅行日程	T15/5/6	3	※ 関西関東 5/18～5/29
女師・高女	走馬灯を追うて 徳島女師高女旅行団	T15/5/22	1	神戸・京都
女師・高女	若葉の旅から 東へ東へ 第三信【ママ】	T15/5/24	2	京都
女師・高女	若葉の旅から 鎌倉に昔を弔ふ 徳島女師高女旅行団	T15/5/26	6	鎌倉・横須賀
女師・高女	若葉の旅より 雨の日光にて 徳島女師高女旅行団 第四信	T15/5/27	2	東京
女師・高女	若葉の旅より 雨の日光にて 徳島女師高女旅行団 久し振りの華厳瀑 第五信	T15/5/28	5	日光
女師・高女	若葉の旅より 徳島女師高女旅行団 第六、七信	T15/5/29	1	東京・伊勢へ
女師・高女	若葉の旅より 神城伊勢にて 徳島女師高女旅行団 第八信	T15/5/31	2	伊勢
徳島農業▲	農業学校県外修学旅行	T15/5/10	5	※ 関西関東 5/13～5/23
三好高女	三好高女修学旅行 第一信	T15/5/19	5	神戸
三好高女	三好高女修学旅行 第二信	T15/5/22	6	奈良
三好高女	三好高女修学旅行 第三信	T15/5/28	6	伊勢
三好高女	三好高女修学旅行 第四信	T15/5/29	6	鎌倉・江ノ島・横須賀
三好高女	三好高女修学旅行 第七、八信【ママ】	T15/6/9	2	日光・長野・名古屋へ

■ 1927年（昭和2年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
徳島商業▲	徳商昭和二年度鮮満旅行記	S2/5/6	1	出発
徳島商業▲	徳商昭和二年度鮮満旅行記（二）	S2/5/7	5	呉・広島
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S2/5/10	5	富島・下関・関釜連絡船
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S2/5/11	5	釜山・大邱・京城へ
徳島商業▲	徳商学生団来る 県人の熱誠なる歓迎	S2/5/12	2	※ 県人会の協力と京城及び仁川参観
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S2/5/12	5	京城
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S2/5/13	5	京城・平壤へ
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S2/5/14	5	平壤・鴨綠江国境
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S2/5/17	5	安東・奉天へ
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S2/5/22	6	重中・奉天
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S2/5/23	6	随想
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S2/5/24	5	随想
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記（四）【ママ】	S2/5/26	8	（五）の誤記か。撫順
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記（六）	S2/6/1	5	北陵・奉天・大連へ
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記（七）	S2/6/3	5	大連・旅順
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記（八）	S2/6/5	6	旅順・大連
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記（九）	S2/6/7	5	大連
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記（十）	S2/6/8	6	大連航路出港
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記（十一）	S2/6/9	6	門司・瀬戸内航路
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記（十二）	S2/6/10	5	神戸・徳島帰着
徳島商業▲	「学生の見た満鮮」徳島商業旅行団の公開報告講演会	S2/6/23	2	※ 6月26日に講演会を挙行
徳島商業▲	徳商辯論部の鮮満講演	S2/6/28	2	※ 26日1時より講演会挙行 聴衆200人
徳島農業▲	徳農校県外旅行	S2/5/9	3	※ 東京日光 5/10～5/21
徳島農業▲	県立農業学校 旅のたより	S2/5/14	1	大阪
徳島農業▲	県立農業学校 旅のたより	S2/5/21	5	東京
徳島農業▲	県立農業学校 旅のたより	S2/5/23	1	東京・日光
徳島農業▲	県立農業学校 旅のたより	S2/5/24	5	江ノ島
徳島農業▲	徳農校旅行報告	S2/6/9	5	※ 旅行報告会開催
名西高女	名西高女修学旅行	S2/5/10	2	※ 関東関西 5/16～5/28
女師・高女	女師高女旅行団出発	S2/5/18	3	※ 5/17出発
女師・高女	徳島女師高女 初旅日記 第一、二信	S2/5/22	5	神戸・京都
女師・高女	徳島女師高女 初旅日記 第三、四信	S2/5/26	5	鎌倉・横須賀・日光
女師・高女	徳島女師高女 初旅日記 第五信	S2/5/27	5	日光
女師・高女	徳島女師高女旅行団帰る	S2/5/29	3	※ 5/28に帰着
女師・高女	徳島女師高女 初旅日記 第六信	S2/5/29	5	東京
女師・高女	徳島女師高女 初旅日記 第七信	S2/5/30	5	奈良
女師・高女	徳島女師高女 初旅日記 第八信	S2/5/31	5	大阪・徳島へ

■ 1928年（昭和3年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
	中等学校修学旅行	S3/5/2	2	※ 徳商 満鮮方面 5/2～5/17 師範 関東近畿 5/2～5/12 坂西農畜 関東近畿 5/6～5/16
徳島商業▲	徳島商業鮮満旅行日程	S3/5/2	3	※ 満洲・朝鮮 5/2～5/17
徳島商業▲	商業三四年県外旅行	S3/5/4	5	※ 三四年県外遠足へ
徳島商業▲	徳商鮮満旅行	S3/5/8	2	兵庫・岡山・下関

徳島商業▲	徳商鮮満旅行記 第二信	S3/5/10	6	釜山・京城へ
徳島商業▲	徳商鮮満旅行通信	S3/5/13	2	京城
徳島商業▲	徳商鮮満旅行通信 第三信	S3/5/14	2	仁川・平壤・安東
徳島商業▲	徳商鮮満旅行団 第四信	S3/5/21	2	奉天
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記 帰ってから	S3/5/29	6	
女師・高女	女師高女校修学旅行	S3/5/4	5	※ 関東関西 5/15~5/26
女師・高女	女師高女上級生県外旅行	S3/5/16	3	※ 5/15出発
女師・高女	徳島女師高女旅行団より 第一信	S3/5/18	3	兵庫・京都
女師・高女	徳島女師高女旅行団より 第二信	S3/5/19	3	京都
女師・高女	徳島女師高女旅行団より 第三信	S3/5/23	5	京都
女師・高女	徳島女師高女旅行団より 第五信【ママ】	S3/5/25	5	日光
女師・高女	徳島女師高女旅行団より 第七信【ママ】	S3/5/27	5	東京
女師・高女	徳島女師高女旅行団より 第八信	S3/5/28	5	東京・名古屋・伊勢・奈良
撫養高女	撫養高女旅行	S3/5/10	2	※ 関東近畿 5/23~6/2
名西高女	名西高女修学旅行	S3/5/13	2	※ 5/12出発
徳島農業▲	徳農修学旅行団 第一信	S3/5/24	5	神戸・京都
徳島農業▲	徳農旅行団に小樽県人歓迎	S3/5/30	3	※ 小樽にて県人歓迎
徳島農業▲	徳農旅行団 第三信【ママ】	S3/6/1	1	東京
徳島農業▲	徳農旅行団 第四信	S3/6/4	2	仙台
徳島農業▲	徳農旅行団 第五信	S3/6/5	6	函館
徳島農業▲	徳農旅行団 第六信	S3/6/10	7	札幌・旭川・室蘭
徳島農業▲	徳農旅行団 第七信	S3/6/11	2	酒田
徳島農業▲	徳農旅行団 第八信	S3/6/14	6	大阪・徳島へ

■ 1929年（昭和4年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
徳島県立図書館・国会図書館ともに未収蔵のため詳細不明				

■ 1930年（昭和5年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
徳島県立図書館・国会図書館ともに欠号部分が多いため詳細判明せず				
徳島農業▲	徳島農業校北海道へ旅行	S5/5/6	2	※ 北海道 5/16出発

■ 1931年（昭和6年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
女師・高女	女師高女生満鮮旅行 五月四日出発	S6/4/14	3	※ 満洲・朝鮮 5/4~5/19
女師・高女	女師高女生 満鮮へ出発	S6/5/5	3	※ 満洲・朝鮮へ出発
女師・高女	京城から うれしい県人の歓迎	S6/5/19	5	京城
女師・高女	女師高女生 満鮮旅行団 十九日帰校	S6/5/20	3	満洲・朝鮮より帰校
女師・高女	女師高女満鮮旅行報告会	S6/5/22	3	※ 満鮮旅行報告会
女師・高女	女師運動選手の見た満鮮の印象 古林、原両嬢談	S6/5/23	5	
女師・高女	大陸の待機を呼吸して 花の旅順から	S6/5/24	5	旅順
女師・高女	めまぐるしい思ひ出の日よ	S6/5/25	1	京城
女師・高女	開院宮春仁王殿下御乗船のバイカル丸に乗船して大連にさよならしました	S6/5/28	7	門司へ
女師・高女	島と山のオンパレード うれしかった黒い顔=はい只今	S6/5/29	5	徳島へ
女師・高女	帝都めぐり 徳島女師高女東京だより	S6/5/18	5	東京
女師・高女	花の日光中禅寺湖から 徳島女師高女東京だより	S6/5/22	1	日光
美馬高女	美馬高女修学旅行	S6/4/21	3	※ 関東方面 5/9~5/20
美馬高女	晴れた帝都 美馬高女旅行だより	S6/5/28	1	東京
美馬高女	はじめて故郷を味ふ 美馬高女旅行だより	S6/6/3	5	徳島へ
撫養高女	関東方面へ撫養高女旅行	S6/5/4	1	※ 関東方面 5/20~5/30
徳島農業▲	農業学校五年 北海道へ長期修学旅行	S6/5/9	5	※ 北海道 5/13~5/26
徳島農業▲	裏日本を信濃善光寺へ 徳農五学年旅行記第八信【ママ】	S6/6/2	4	長野
富岡高女	二見の宿から 富岡高女旅行団	S6/5/28	1	伊勢
富岡高女	帝都の一日 富岡高女旅行団より	S6/6/1	7	東京
富岡高女	武蔵野と日光 富岡高女旅行団より 第三信	S6/6/2	1	日光
富岡高女	金沢から京都 富岡高女旅行団より	S6/6/3	1	金沢・京都
富岡高女	富岡高女旅行報告会 元気で真面目な発表	S6/6/6	3	※ 旅行報告会

■ 1932年（昭和7年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	記事標題	掲載日時	ページ	地点など
徳島県立図書館・国会図書館ともに5月14日以降が欠号のため詳細判明せず				
女師・高女	女師高女生 満鮮旅行	S7/4/15	3	※ 満洲事変により満鮮旅行中止
女師・高女	徳島高女 修学旅行 お小使節約	S7/4/29	3	※ 経費節減 小遣いは10円まで
女師・高女	徳島高女五年生 東京旅行 八日徳島駅出発	S7/5/7	3	※ 東京方面 5/8~5/21
女師・高女	旅の徳島高女生から (一)	S7/5/11	5	京都
女師・高女	旅の徳島高女生より第二信	S7/5/13	9	奈良
徳島師範▲	師範修学旅行	S7/4/29	2	※ 近畿・関東 5/11~5/14
徳島師範▲	徳師旅信 文化の高野山に第一夜の夢	S7/5/4	1	高野山
徳島師範▲	徳師旅信 葉桜の吉野 夕の奈良 旅情そぞろ	S7/5/5	9	吉野・奈良
徳島師範▲	徳師旅信(3) 憧れの夢をのせて東海道を	S7/5/7	1	東海道
徳島師範▲	徳師旅信(4) 江之島鎌倉 胸おどる帝都へ	S7/5/9	5	関東

美馬高女	美馬高女修学旅行	S7/5/1	5	※ 近畿・関東 5/6~5/17
三好高女	三好高女旅行団より 第一、二信	S7/5/12	5	伊勢

■ 1933年（昭和8年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
徳島県立図書館・国会図書館ともに欠号部分が多いため詳細不明			

■ 1934年（昭和9年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
女師・高女	敷島の優しき女性の贈物 女師高女満鮮旅行団から満洲国郵総理へ	S9/5/8	3 ※ 新京を訪問
女師・高女	徳島女師高女満鮮旅行団	S9/5/10	9 下関へ
女師・高女	満鮮旅行の徳島女師高女籠球選手 京城女師に快勝	S9/5/13	3 ※ 京城でのスポーツ親善
女師・高女	徳島女師高女満鮮旅行より 船ではゆられたが釜山で県人に迎へられ賑はしくなった京城への列車	S9/5/13	9 釜山・京城
女師・高女	徳島女師高女排球チーム 奉天女師に快勝	S9/5/16	3 ※ 奉天でのスポーツ親善
女師・高女	徳島女師高女満鮮だより 第四信	S9/5/17	9 平壤
女師・高女	徳島女師高女満鮮だより 第五信	S9/5/19	2 奉天
女師・高女	徳島女師高女満鮮だより 第八信【ママ】	S9/5/20	1 新京
女師・高女	高女修学旅行	S9/5/4	5 ※ 伊勢長野関東 5/8~5/18
女師・高女	徳島女師高女東京方面旅行団	S9/5/13	5 神戸・京都
女師・高女	徳島女師高女東京旅行だより	S9/5/21	2 東京
女師・高女	徳島女師高女東京旅行記	S9/5/27	1 帰着後の感想
徳島中学▲	徳中四年生阿蘇登山	S9/5/2	2 ※ 阿蘇登山を予定
徳島中学▲	徳中九州旅行	S9/5/13	2 ※ 九州方面 5/14~5/19
名西高女	名西高女だより 第一信	S9/5/11	9 京都
名西高女	名西高女だより 第二、三信	S9/5/15	1 江ノ島・東京
名西高女	名西高女修学旅行団	S9/5/20	9 東京
名西高女	名西高女修学旅行団	S9/5/21	4 日光・箱根・伊勢
富岡高女	富岡高女修学旅行 第一信	S9/5/15	2 伊勢
富岡高女	富岡高女修学旅行 第二信	S9/5/17	9 東京
富岡高女	富岡高女修学旅行 第三信	S9/5/19	2 東京
富岡高女	富岡高女修学旅行 第五信【ママ】	S9/5/20	1 金沢・京都
美馬高女	美馬高女若葉の旅路 第一信	S9/5/13	9 宇高連絡線・神戸
美馬高女	美馬高女若葉の旅路 第二信	S9/5/15	9 琵琶湖・京都・奈良・伊勢
美馬高女	美馬高女若葉の旅 第四信【ママ】	S9/5/19	1 東京
香蘭高女	香蘭高女四年 関東修学旅行	S9/5/18	3 ※ 関東方面 5/21~6/2
香蘭高女	香蘭高女旅だより【一】	S9/5/26	9 大阪・奈良
香蘭高女	香蘭高女旅だより	S9/5/29	9 伊勢・箱根
香蘭高女	香蘭高女旅行記	S9/6/1	9 東京・日光
香蘭高女	香蘭高女旅信	S9/6/2	5 東京
香蘭高女	香蘭高女旅信	S9/6/3	9 善光寺・金沢へ
香蘭高女	香蘭高女旅行記	S9/6/4	1 京都
徳島農業▲	農業修学旅行	S9/5/7	2 ※ 函館大火で北海道中止し愛知へ 9日発
徳島農業▲	徳農見学旅行記(1)	S9/5/16	9 伊勢
徳島農業▲	徳農見学旅行記(4)【ママ】	S9/5/21	8 鎌倉
徳島農業▲	徳農見学旅行記(5)	S9/5/24	2 東京
徳島農業▲	徳農見学旅行記(6)	S9/5/25	4 大島
徳島農業▲	農業学校旅行	S9/6/2	4 東京・日光・足尾
徳島農業▲	徳島農業旅行記	S9/6/3	9 甲州
小松島高女	小松島高女旅記 第一、二、三信	S9/6/2	8 神戸・名古屋・江ノ島へ
小松島高女	小松島高女旅記 第七信【ママ】	S9/6/4	2 長野・金沢
小松島高女	小松島高女旅記 第八、九信	S9/6/5	4 京都・神戸・徳島へ
小松島高女	小松島高女旅記	S9/6/6	5 出発、奈良・伊勢【補遺?】
撫養高女	撫養高女生の旅【一】	S9/5/26	9 伊勢・名古屋へ
撫養高女	撫養高女旅だより	S9/5/29	8 箱根
撫養高女	撫養高女旅信	S9/5/31	8 東京
撫養高女	撫養高女旅信	S9/6/1	9 東京
撫養高女	撫養高女旅信	S9/6/2	4 東京
撫養高女	撫養高女旅信	S9/6/3	9 日光、中禅寺湖
撫養高女	撫養高女旅信	S9/6/4	3 京都
撫養高女	撫養高女旅記	S9/6/8	1 奈良・大阪・徳島へ

■ 1935年（昭和10年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
徳島中学▲	徳中旅行帰る	S10/4/17	2 ※ 修学旅行より帰着
女師・高女	徳島女師高女 満鮮旅行団 けさ出発	S10/5/4	2 ※ 満洲・朝鮮 5/4~5/19
女師・高女	徳島女師高女鮮満旅行団(2)	S10/5/9	9 釜山
女師・高女	徳島女師高女鮮満旅行団(3)	S10/5/12	9 京城
女師・高女	徳島女師高女鮮満旅行団(4)	S10/5/13	1 京城
女師・高女	徳島女師高女鮮満旅行団(5)	S10/5/14	6 平壤
女師・高女	徳島女師高女鮮満旅行団(6)	S10/5/16	5 新京
女師・高女	徳島女師高女満鮮旅信	S10/5/20	1 奉天
女師・高女	女師高女満鮮旅記	S10/5/21	9 金州・旅順
女師・高女	女師高女満鮮旅記	S10/5/22	8 大連
女師・高女	徳島高女五年関東関西旅行 七日夕出発	S10/5/7	2 ※ 関東関西 5/7~5/19

女師・高女	徳島高女関東旅行団【一】	S10/5/10	2	京都
女師・高女	徳島高女関東旅行団(2)	S10/5/14	1	京都・上諏訪・東京
女師・高女	徳島高女東京旅行	S10/5/16	1	日光・東京
女師・高女	徳島高女東京旅記	S10/5/18	9	東京・鎌倉・江ノ島
女師・高女	徳島高女関東旅記	S10/5/20	2	名古屋・伊勢
女師・高女	女師旅行団三四年生(一)	S10/5/14	9	神戸・名古屋・東京
女師・高女	女師三四東京旅信	S10/5/17	10	東京
女師・高女	女師三四東京旅行	S10/5/20	4	関東
美馬高女	美馬高女修学旅行記(1)	S10/5/11	9	京都・琵琶湖・奈良
美馬高女	美馬高女関東関西旅行記(2)	S10/5/14	9	奈良・伊勢
美馬高女	美馬高女修学旅行記(2)【ママ】	S10/5/17	1	伊勢・小田原・箱根
美馬高女	美馬高女旅行記 五、六信【ママ】	S10/5/20	1	箱根・東京
美馬高女	美馬高女修学旅記 第七信	S10/5/26	9	日光・東京
美馬高女	美馬高女修学旅記 第八信	S10/5/27	5	東京
美馬高女	美馬高女修学旅記 第九信	S10/5/28	5	大阪・徳島へ
徳島農業▲	県立農業校旅行 第一、二信	S10/5/17	10	奈良・伊勢・名古屋・安城
徳島農業▲	県立農業修学旅行 第三信	S10/5/20	8	清水・興津
徳島農業▲	徳島農業旅行記 第四信	S10/5/21	10	安城
徳島農業▲	徳島農業旅行記 第五信	S10/5/23	1	江ノ島・鎌倉・東京
徳島農業▲	徳島農業修学旅行 第六信	S10/5/26	9	東京・大島
徳島農業▲	徳島農業修学旅行 第九信【ママ】	S10/5/29	1	日光・甲府へ
名西高女	名西高女旅行	S10/5/14	10	※関東長野関西 5/14~5/23他
富岡高女	富岡高女四年旅記	S10/5/17	9	奈良・伊勢へ
富岡高女	富岡高女四年旅記 第二、三信	S10/5/18	5	伊勢・名古屋・修善寺
富岡高女	富岡高女旅行団	S10/5/21	9	横須賀・東京
富岡高女	富岡高女旅行記 第五~八信	S10/5/22	1	東京・日光・長野・金沢
富岡高女	富岡高女修学旅行 第九、十信	S10/5/27	5	京都・大阪・徳島へ
富岡高女	富岡高女修学旅行 第四信	S10/5/30	5	鎌倉・東京【配信日時ママ】
徳島商業▲	徳商五学年 鮮満修学旅行	S10/5/24	2	※ 満洲・朝鮮 5/25~6/7
徳島商業▲	徳商鮮満修学旅行 第一信	S10/5/28	2	釜山
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記 第二信	S10/5/31	9	釜山から京城
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記 第三信	S10/6/2	5	京城
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記 第四信	S10/6/4	5	平壤から安東
徳島商業▲	徳島商業鮮満旅信 第六信	S10/6/6	5	国境
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記 第七信	S10/6/7	1	奉天・撫順
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記 第八信	S10/6/8	2	奉天
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記 第九信	S10/6/11	5	旅順
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記 第十信	S10/6/12	10	大連
海部中学▲	海部中学校便り	S10/5/26	5	※ 大阪 5/21~5/23
香蘭高女	徳島香蘭高女旅行	S10/5/26	2	奈良・伊勢へ
香蘭高女	徳島香蘭高女旅行2 第二、三信	S10/5/28	5	伊勢・名古屋・小田原・箱根
香蘭高女	徳島香蘭高女旅行 第五信【ママ】	S10/6/1	9	日光
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第六信	S10/6/4	2	東京
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第七、八信	S10/6/5	5	東京・善光寺・直江津・金沢
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第九信	S10/6/8	2	京都から岡山
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第八信【ママ】	S10/6/10	5	京都
小松島高女	小松島高女旅行記	S10/5/29	9	神戸・名古屋へ
小松島高女	小松島高女旅行記	S10/5/30	9	小田原・箱根
小松島高女	小松島高女旅行記	S10/6/1	9	江ノ島・東京
小松島高女	小松島高女旅行記	S10/6/2	8	東京
小松島高女	小松島高女旅行記	S10/6/3	5	日光
小松島高女	小松島高女旅行記	S10/6/4	10	善光寺・京都
小松島高女	小松島高女旅行記	S10/6/5	9	京都・小松島へ

■ 1936年(昭和11年) 徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
徳島中学▲	徳中四年生九州旅行	S11/4/13	5 ※ 九州方面 5/12~5/18
徳島中学▲	徳中修学旅行団(1)	S11/4/15	1 広島
徳島中学▲	徳中修学旅行団(2)	S11/4/18	9 博多
徳島中学▲	徳中修学旅行団 第三信	S11/4/19	2 熊本
徳島中学▲	徳中修学旅行団 第四日	S11/4/21	9 阿蘇・別府
徳島中学▲	徳中修学旅行団 第五日	S11/4/22	1 瀬戸内海
徳島中学▲	徳中修学旅行団 第六日	S11/4/23	5 瀬戸内海・神戸
徳島中学▲	徳中修学旅行 第七日最終日	S11/4/24	1 六甲・徳島へ
徳島商業▲	鮮満行(一)	S11/4/28	4 満洲・朝鮮へ
徳島商業▲	徳商鮮満旅行 第二信	S11/5/1	9 下関・釜山・京城
徳島商業▲	徳商鮮満旅行	S11/5/3	5 平壤・安東
徳島商業▲	徳商鮮満旅行記	S11/5/4	2 奉天
徳島商業▲	徳商鮮満旅信	S11/5/5	9 新京
徳島商業▲	徳商鮮満旅信	S11/5/6	2 奉天
徳島商業▲	徳商鮮満旅信	S11/5/9	9 奉天・撫順
徳島商業▲	徳商鮮満旅信	S11/5/10	1 大連
徳島商業▲	徳商鮮満旅記	S11/5/15	7 満洲・朝鮮より帰国
女師・高女	女師高女鮮満旅行記 第一信	S11/5/8	9 瀬戸内海
女師・高女	女師高女鮮満旅行記 第二信	S11/5/9	1 玄界灘
女師・高女	女師高女鮮満旅行記 第三、四信	S11/5/12	9 釜山・京城
女師・高女	女師高女鮮満旅行記 第五信	S11/5/14	1 平壤
女師・高女	女師高女鮮満旅行記 第六信	S11/5/15	5 安東

女師・高女	女師高女鮮満旅行記 第七信	S11/5/16	5	安奉線
女師・高女	女師高女鮮満旅行記 第八信	S11/5/18	5	新京・奉天
女師・高女	女師高女鮮満旅行記 第九信	S11/5/18	2	奉天
女師・高女	女師高女満鮮旅記 第十信	S11/5/19	9	撫順
女師・高女	女師高女満鮮旅記 第十一、十二信	S11/5/23	9	金州・旅順
女師・高女	女師高女満鮮旅記 第十三～十五信	S11/5/24	1	大連・帰国の船上・故郷
女師・高女	女師高女旅信 第一、二信	S11/5/13	9	神戸・京都
女師・高女	徳島高女旅行記 第三信	S11/5/15	9	上諏訪
女師・高女	女師高女旅信 第四信	S11/5/17	2	多摩御陵・東京
女師・高女	徳島高女旅行記 第四信【ママ】	S11/5/19	5	日光
女師・高女	徳島高女旅行記	S11/5/21	9	江ノ島・東京
女師・高女	徳島高女旅行記 第六信	S11/5/22	9	箱根
女師・高女	徳島高女旅行記 第七信	S11/5/23	4	伊勢・奈良
女師・高女	徳島高女旅行記 第八信	S11/5/25	5	奈良・徳島へ
撫養高女	撫養高女の関東修学旅行	S11/5/7	10	※関東 5/28～6/8
撫養高女	撫養高女修学旅行 第一信	S11/6/2	9	大阪・京都
撫養高女	撫養高女修学旅行	S11/6/3	2	京都・奈良
撫養高女	撫養高女修学旅行	S11/6/4	5	伊勢
撫養高女	撫養高女修学旅行	S11/6/7	9	熱海・箱根
撫養高女	撫養高女修学旅行	S11/6/9	1	江ノ島・鎌倉・東京
撫養高女	撫養高女修学旅行	S11/6/10	5	中禪寺・日光
撫養高女	撫養高女修学旅行	S11/6/12	9	神戸・岡山・宇高連絡船
富岡高女	富岡高女生修学旅行 九日出発	S11/5/11	5	※ 東京 5/9～5/21
富岡高女	富岡高女修旅団 第一信	S11/5/14	5	大阪
富岡高女	富岡高女修旅団 第三、第四信【ママ】	S11/5/15	9	奈良・伊勢・熱海へ
富岡高女	富岡高女修旅団 第五信	S11/5/18	5	熱海
富岡高女	富岡高女修旅団 第六信	S11/5/19	6	東京
富岡高女	富岡高女修旅団 第七、第八信	S11/5/20	9	東京・日光
富岡高女	富岡高女修旅団 第九、十信	S11/5/24	5	善光寺・金沢・天橋立
富岡高女	富岡高女修旅団 第十二信【ママ】	S11/5/27	9	京都・徳島へ
美馬高女	美馬高女旅行記 第一信	S11/5/13	9	京都
美馬高女	美馬高女旅行記	S11/5/16	8	京都
美馬高女	美馬高女旅行記	S11/5/19	9	京都・二見
美馬高女	美馬高女修学旅行団	S11/5/21	9	伊勢・鎌倉・東京へ
美馬高女	美馬高女旅行記	S11/5/26	2	東京
美馬高女	美馬高女旅行記	S11/5/27	8	日光・東京
美馬高女	美馬高女旅行記	S11/5/28	5	東京・大阪
徳島師範▲	師範学校旅行団 第一信	S11/5/13	1	京都
徳島師範▲	師範学校旅行団 第二、第三信	S11/5/14	9	善光寺・日光
徳島師範▲	徳島師範旅行団	S11/5/15	5	東京
徳島師範▲	徳島師範旅行団 第六信【ママ】	S11/5/17	9	箱根
徳島師範▲	徳島師範旅行 第七、八、九信	S11/5/20	9	伊勢・奈良・大阪・徳島へ
徳島農業▲	農業学校旅記	S11/5/16	8	奈良・伊勢
徳島農業▲	徳農修学旅行記 第二信	S11/5/18	2	伊勢・名古屋
徳島農業▲	農業学校旅行記 第三信	S11/5/22	10	名古屋・碧海
徳島農業▲	徳農関東旅行 第四信	S11/5/24	9	清水・江ノ島へ
徳島農業▲	農業学校旅行記 第五、六信	S11/5/25	1	鎌倉・東京
香蘭高女	香蘭修学旅行 第一信	S11/5/25	1	吉野
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第二、三信	S11/5/29	9	伊勢・名古屋
香蘭高女	香蘭高女旅記	S11/5/30	1	箱根
香蘭高女	香蘭高女 第四信【ママ】	S11/6/2	1	東京
香蘭高女	香蘭高女 第五信	S11/6/3	9	日光
香蘭高女	香蘭高女旅行記 第八信【ママ】	S11/6/5	9	長野・善光寺・金沢
香蘭高女	香蘭高女旅行記 第九信	S11/6/6	5	京都
香蘭高女	香蘭高女旅行記 第十信	S11/6/8	2	大阪・宝塚
	修学旅行の弊 近來続出の不祥事に教育者も疑い出す	S11/5/11	1	※ 物見遊山の修学旅行 修学旅行生の不行跡

■ 1937年（昭和12年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
小松島高女	小松島高女修学旅行	S12/4/28	3 ※ 3年蔵島 5/2～5/8 4年関東 5/2～5/12
徳島商業▲	徳商修学旅行	S12/5/1	5 ※ 満洲・朝鮮 5/1～5/14
徳島商業▲	徳商鮮満の旅 第一信	S12/5/5	2 釜山へ
徳島商業▲	徳商満鮮旅記	S12/5/7	9 満洲・朝鮮
徳島商業▲	徳商鮮満旅記	S12/5/11	2 ※ 徳島商業学生 新京視察
徳島商業▲	徳商満鮮旅記	S12/5/11	2 京城・平壤
徳島商業▲	徳商満鮮旅記	S12/5/14	2 撫順・奉天
徳島商業▲	徳商満鮮旅行	S12/5/17	2 旅順
徳島商業▲	徳商満鮮旅記	S12/5/18	9 大連から徳島
女師・高女	女師高女満鮮へ 一日朝出発	S12/5/1	2 ※ 満洲・朝鮮 5/1～5/16
女師・高女	女師高女満鮮旅行（一）	S12/5/5	2 釜山へ
女師・高女	女師高女満鮮旅行（二）	S12/5/7	9 京城
女師・高女	女師高女満鮮旅行（三）	S12/5/8	9 京城
女師・高女	元気で新京視察 女子師範・徳島高女 一宮教諭代表天機拳	S12/5/11	2 ※ 女師高女学生 新京視察
女師・高女	女師高女満鮮旅信（四）	S12/5/11	9 平壤・安東
女師・高女	女師高女満鮮旅信（五）	S12/5/13	9 新京

女師・高女	女師高女満鮮旅信 (六)	S12/5/14	2	奉天・金州
女師・高女	女師高女満鮮旅信	S12/5/16	2	金州
女師・高女	女師高女満鮮旅信	S12/5/18	2	大連・旅順・帰国へ
女師・高女	女師高女満鮮旅信	S12/5/20	1	神戸から徳島
女師・高女	徳女東京旅信	S12/5/8	2	京都
女師・高女	徳女東京旅記	S12/5/11	9	京都から諏訪
女師・高女	女師高女東京旅信	S12/5/12	9	諏訪から東京
女師・高女	女師高女東京旅信	S12/5/13	2	日光
女師・高女	徳島女師高女東京旅信	S12/5/15	9	日光
女師・高女	徳島女師高女東京旅信	S12/5/16	2	東京・鎌倉
女師・高女	徳島女師高女東京旅信	S12/5/17	2	江ノ島
女師・高女	徳島女師高女東京旅信	S12/5/18	9	伊勢・奈良
三好高女	三好高女旅記 第一信	S12/5/5	9	大阪
三好高女	三好高女旅記 第二信	S12/5/6	9	伊勢
三好高女	三好高女旅記 第四、五、六信【ママ】	S12/5/11	2	名古屋・横須賀・東京
三好高女	三好高女旅信 第八信【ママ】	S12/5/15	2	日光・軽井沢・善光寺・京都
富岡高女	富岡高女旅信 第一信	S12/5/11	2	5/8出発
富岡高女	富岡高女旅信 第二信	S12/5/12	9	高松・岡山・奈良へ
富岡高女	富岡高女旅信 第三、四、五報	S12/5/15	9	奈良・伊勢・小田原・箱根
富岡高女	富岡高女旅信 第六報	S12/5/16	9	小田原
富岡高女	富岡高女旅記 第九報【ママ】	S12/5/18	9	熱海
富岡高女	富岡高女旅信 第十報	S12/5/20	5	長野・善通寺・金沢
富岡高女	富岡高女旅記	S12/5/21	1	天橋立
徳島農業▲	徳島農業旅信 第一、二信	S12/5/19	8	大阪・京都・岐阜・興津
徳島農業▲	徳島農業旅信	S12/5/20	9	鎌倉・東京へ
徳島農業▲	徳島農業旅信 第四、五、六信	S12/5/22	9	東京・伊豆大島・千葉
徳島農業▲	徳島農業旅信 第七信	S12/5/23	9	澗の巣・上田
徳島農業▲	徳島農業旅信 第八信	S12/5/25	5	木曾・中津川・名古屋
徳島農業▲	徳島農業旅信 第十一信【真名】	S12/6/8	9	奈良・徳島へ
香蘭高女	香蘭高女旅信 第一信	S12/5/28	5	大阪
香蘭高女	香蘭高女旅信 第二、三信	S12/5/29	9	吉野・奈良
香蘭高女	香蘭高女旅信 第四信	S12/5/30	1	奈良・伊勢
香蘭高女	香蘭高女旅記 第八、九信【ママ】	S12/6/11	1	名古屋・江ノ島・鎌倉
香蘭高女	香蘭高女旅記 第十一～十三信	S12/6/15	9	日光・東京・長野・金沢
名西高女	名西高女旅信	S12/5/29	1	奈良
名西高女	名西高女旅信 第二信	S12/5/31	2	奈良・伊勢
名西高女	名西高女旅信	S12/6/2	9	木曾
名西高女	名西高女旅信	S12/6/4	9	善光寺・日光
名西高女	名西高女の修旅報告会	S12/6/12	5	※ 報告会開催
撫養高女	撫養高女旅記	S12/6/8	9	京都・奈良・伊勢・名古屋
撫養高女	撫養高女旅記 第五信	S12/6/10	9	名古屋・箱根
撫養高女	撫養高女旅記 第六～九信	S12/6/12	1	江ノ島・東京・日光
撫養高女	修学旅行の撫養高女生高松を経、栗林を見て帰校	S12/6/12	4	※ 『徳島毎日新聞』香川版の記事

■ 1938年(昭和13年)度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
徳島商業▲	徳島商業満鮮修学旅行 三日朝発	S13/5/3	2 ※ 満洲・朝鮮 5/3～5/16
徳島商業▲	徳商満鮮旅行 第一信	S13/5/8	9 徳島より釜山
徳島商業▲	徳商満鮮旅行団 第二、三信	S13/5/11	10 京城・平壤
徳島商業▲	徳商満鮮旅行団 第四信	S13/5/12	10 奉天
徳島商業▲	徳商満鮮旅行団 第五信	S13/5/13	10 新京
徳島商業▲	徳商満鮮旅行団 第六信	S13/5/14	10 新京
徳島商業▲	徳商満鮮旅行団 第七信	S13/5/16	5 奉天・撫順
徳島商業▲	徳商満鮮旅行団 第八、九信	S13/5/18	10 大連・旅順・門司
徳島商業▲	徳商満鮮旅行団 第十信	S13/5/21	7 門司から徳島へ
女師・高女	徳島女師高女満鮮・東京旅行 六日午前夫々出発	S13/5/6	2 ※ 満洲・朝鮮・東京 5/6出発
女師・高女	徳島女師高女 両旅行団出発	S13/5/7	3 ※ 満洲・朝鮮・東京 出発
女師・高女	女師高女満鮮旅行 第一、二信	S13/5/11	10 下関・釜山
女師・高女	女師高女満鮮旅行 第三信	S13/5/12	10 京城
女師・高女	女師高女満鮮旅行	S13/5/15	6 平壤
女師・高女	女師高女満鮮旅行 第六信【ママ】	S13/5/16	7 安東から奉天
女師・高女	女師高女満鮮旅行 第七信	S13/5/17	10 奉天
女師・高女	女師高女満鮮旅行団 第八信	S13/5/18	10 新京
女師・高女	女師高女満鮮旅行 第九、十信	S13/5/22	10 撫順・奉天・南山・旅順
女師・高女	女師高女満鮮旅行 第十二～十五信	S13/5/23	6 大連・帰国船中・門司
女師・高女	女師高女関西関東旅行隊	S13/5/8	9 徳島より神戸
女師・高女	徳島女師高女関東関西旅行隊 第二、三信	S13/5/10	10 大阪・奈良
女師・高女	徳島女師高女関東関西旅行隊	S13/5/11	7 奈良
女師・高女	徳島女師高女関東関西旅行隊	S13/5/12	7 橿原神宮・伊勢
女師・高女	徳島女師高女関西関東旅行団	S13/5/13	10 伊勢から小田原へ
女師・高女	女師高女旅行第二陣	S13/5/14	3 ※ 楠公史蹟・伊勢の2隊および県内遠足
女師・高女	徳島女師高女関西関東旅行団	S13/5/14	6 箱根・江ノ島・鎌倉・東京
女師・高女	徳島女師高女校関西関東旅行団	S13/5/15	6 日光
女師・高女	女師高女関東関西旅行	S13/5/16	7 日光湯元温泉から東京へ
女師・高女	徳島女師高女関西・関東旅行団	S13/5/18	7 東京・諏訪へ
女師・高女	女師高女関東関西旅行	S13/5/19	9 諏訪・京都へ

女師・高女	女師高女関東関西旅行	S13/5/20	9	京都
女師・高女	女師高女関西関東旅行	S13/5/22	6	大阪・神戸
女師・高女	徳島高女修学旅行 第十三信	S13/5/26	10	徳島へ
三好高女	三好高女旅信 第一信	S13/5/7	9	宇高連絡船・奈良・二見へ
三好高女	三好高女旅行団	S13/5/8	5	二見・名古屋
三好高女	三好高女旅行団 第三信	S13/5/10	10	鎌倉・横須賀・江ノ島
三好高女	三好高女旅行団より	S13/5/12	10	東京
三好高女	三好高女旅行団より	S13/5/13	6	日光・長野
三好高女	三好高女旅行団より	S13/5/14	9	長野・京都
三好高女	三好高女旅行団 第十信【ママ】	S13/5/16	5	京都
三好高女	三好高女旅行団 第十一、十二信	S13/5/18	6	大阪・徳島へ
香蘭高女	香蘭高女生修学旅行	S13/5/9	5	※ 関西・関東 5/9~5/21
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第一信	S13/5/12	7	吉野
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第二、三信	S13/5/14	10	吉野・伊勢・名古屋
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第四信	S13/5/16	7	小田原へ
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第五信	S13/5/17	10	鎌倉・横須賀
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第六信	S13/5/18	10	東京
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第七信	S13/5/20	9	東京
香蘭高女	香蘭高女修学旅行 第八~十二信	S13/5/22	10	日光・善光寺・金沢・天橋立
徳島農業▲	農業校旅行	S13/5/11	5	※ 関西・関東 5/9~5/18
美馬高女	美馬高女旅行団 第一信	S13/5/15	10	高松・京都へ
名西高女	名西高女旅行団 第一信	S13/5/26	5	小松島・神戸・奈良へ
名西高女	名西高女東京旅行 第二、三信	S13/5/28	10	奈良・伊勢
名西高女	名西高女東京旅行	S13/5/29	10	伊勢・善光寺
撫養高女	撫養高女旅行団	S13/6/3	10	鳴門・宇高連絡船・京都へ
撫養高女	撫養高女旅行団	S13/6/4	10	京都
撫養高女	撫養高女旅行記	S13/6/5	10	京都・奈良
撫養高女	撫養高女旅行記	S13/6/6	8	伊勢・名古屋へ
撫養高女	撫養高女旅行記 第五信	S13/6/8	5	名古屋・東京
撫養高女	撫養高女修学旅行 第六信	S13/6/9	2	東京
撫養高女	撫養高女旅行記 第七、八信	S13/6/11	10	東京・日光
撫養高女	撫養高女修学旅行	S13/6/12	10	鎌倉・江ノ島・箱根・熱海
撫養高女	撫養高女修学旅行	S13/6/13	8	大阪
撫養高女	撫養高女修学旅行	S13/6/15	10	岡山・宇高連絡船・徳島へ
富岡高女	富岡高女修学旅行	S13/6/5	5	東京
富岡高女	富岡高女旅行団	S13/6/5	10	伊勢から箱根・江ノ島・鎌倉
富岡高女	富岡高女旅行団	S13/6/7	10	東京・長野・上高地・名古屋
富岡高女	富岡高女旅行団	S13/6/8	10	東京・日光・善光寺(前号記事の中に挿入)
板西高実女	関東近畿北陸旅 第一信	S13/6/8	10	慶島・宇高連絡船・岡山
板西高実女	関東近畿北陸の旅 第二信	S13/6/10	10	大阪・奈良・伊勢
板西高実女	関東近畿北陸の旅 第三信	S13/6/13	8	名古屋・江ノ島
板西高実女	関東近畿北陸の旅 第四、五、六信	S13/6/14	10	東京・日光
板西高実女	関東近畿北陸の旅 第七信	S13/6/16	10	善光寺
板西高実女	板西高等実女旅信 第八信	S13/6/19	10	金沢・京都
板西高実女	板西高等実女旅信 第十信【ママ】	S13/6/22	10	京都・大阪・徳島へ
	修学旅行へ県から注意 父兄の負担を軽減 引率教員は行動を慎め	S13/5/6	2	※ 時局に鑑み物見遊山を慎み、経費節約すること。

■ 1939年(昭和14年)度徳島県修学旅行関係記事

学校名称	掲載日時	ページ	地点など
徳島商業▲	徳商満洲旅行団 第一信	S14/5/8	2 徳島から下関
徳島商業▲	徳商満洲旅行団 第二信	S14/5/9	1 釜山・京城
徳島商業▲	徳商満洲旅行団 第四信【ママ】	S14/5/11	1 京城
徳島商業▲	徳商満洲旅行団 第五信	S14/5/13	1 奉天
徳島商業▲	徳商満洲旅行団	S14/5/14	1 新京
徳島商業▲	徳商満洲旅行団 第七信	S14/5/16	4 新京
徳島商業▲	徳商満洲旅行団 第八信	S14/5/18	2 奉天・旅順
徳島商業▲	徳商満洲旅行団 第九、十信	S14/5/19	1 旅順・大連
徳島商業▲	徳商旅行記 二信【ママ】	S14/5/25	1 東京
富岡高女	富岡高女旅行団	S14/5/9	1 箱根
富岡高女	富岡高女旅行団	S14/5/12	6 箱根
富岡高女	富岡高女旅行団 第三信 第四信	S14/5/13	9 江ノ島・東京
富岡高女	富岡高女旅行団 第五信	S14/5/14	2 日光
富岡高女	富岡高女旅行団 第六、七信	S14/5/17	9 東京
富岡高女	富岡高女旅行団 第八信	S14/5/18	1 東京・徳島へ
香蘭高女	香蘭高女旅行	S14/5/10	9 ※ 関東・北陸・関西 5/10~
香蘭高女	香蘭高女旅信 第一信	S14/5/18	2 箱根
香蘭高女	香蘭高女修旅通信 第二信	S14/5/20	5 日光
香蘭高女	香蘭高女旅信 第三信	S14/5/22	1 東京
香蘭高女	香蘭高女修旅通信 第四信	S14/5/23	2 長野・金沢
香蘭高女	香蘭高女旅行団 四信【ママ】	S14/5/27	9 天橋立
香蘭高女	香蘭高女旅行団 第五信	S14/5/29	4 徳島へ
女師・高女	徳島女師高女満洲修学旅行 十七日朝出発	S14/5/14	2 ※ 満洲・朝鮮 5/17~6/1
女師・高女	女師高女鮮満旅信 第二信	S14/5/23	1 京城
女師・高女	女師高女鮮満旅信	S14/5/26	2 平壤
女師・高女	女師高女鮮満旅信 第四信	S14/5/27	9 安東
女師・高女	女師高女鮮満旅信 第五信	S14/5/29	2 奉天

女師・高女	女師高女満鮮旅行 六信	S14/6/1	4	新京・撫順
女師・高女	女師高女満鮮旅行 第七、八信	S14/6/3	9	旅順・大連
女師・高女	女師高女満鮮旅行 第十二信【ママ】	S14/6/4	2	大連から徳島
女師・高女	女師高女東京旅信 第一信	S14/5/24	1	奈良
女師・高女	女師・高女旅行団 第二信	S14/5/26	1	伊勢・名古屋
女師・高女	女師・高女旅行団 第三信 第四信	S14/5/28	1	富士・江ノ島・箱根
女師・高女	女師・高女旅行団 第五、六信	S14/5/30	8	鎌倉・日光・東京
女師・高女	女師高女東京旅行 第七、八信	S14/6/1	5	東京
女師・高女	女師高女東京旅行 第九、十信	S14/6/3	1	多摩御陵・京都
徳島農業▲	徳島農業旅行団	S14/5/12	6	権原・伊勢
徳島農業▲	徳島農業旅行団	S14/5/16	4	伊勢・名古屋
徳島農業▲	徳島農業学校旅信	S14/5/18	2	名古屋・江ノ島
徳島農業▲	徳島農業学校旅信	S14/5/20	5	東京
徳島農業▲	徳島農業旅行記	S14/5/22	2	東京
徳島農業▲	徳島農業旅行記	S14/5/25	2	東京・日光
撫養商業▲	撫養修学旅行団 第一信	S14/5/23	1	箱根・東京
撫養商業▲	撫養修学旅行団 第二信	S14/5/25	1	東京
撫養商業▲	撫養商業旅行 三信	S14/5/28	1	日光・中裡寺湖
撫養商業▲	鎌倉江之島 撫養修学旅行団 第四信	S14/5/29	2	鎌倉・江ノ島
撫養商業▲	撫養商業旅行 第六、七信【ママ】	S14/5/30	1	京都・大阪
名西高女	九州旅行 名西高女旅行団 第一信	S14/5/24	1	高松・広島・下関
名西高女	九州旅行 名西高女旅行団 第二信	S14/5/26	2	下関・博多・長崎
名西高女	あお雲仙 名西高女旅行団 第三信	S14/5/27	9	雲仙・熊本
名西高女	名西高女旅行団 第四信	S14/5/29	4	阿蘇・鹿児島
名西高女	名西高女旅行団 第五信	S14/6/1	5	宮崎・別府
撫養高女	撫養高女旅行記 一、二、三信	S14/6/5	1	高松・京都・奈良
撫養高女	撫養高女旅行記 三信	S14/6/7	2	名古屋
撫養高女	撫養高女旅行記 四信	S14/6/8	5	熱海・箱根・強羅
撫養高女	撫養高女旅行記 五信	S14/6/9	1	江ノ島・鎌倉
撫養高女	撫養高女旅行記 六信	S14/6/11	1	東京
撫養高女	撫養高女修学旅行記 七、八、九信	S14/6/14	9	日光・東京・大阪・徳島へ
海部高女	権原奉仕社	S14/6/2	6	権原神宮

■ 1940年（昭和15年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
香蘭高女	香蘭高女修学旅行	S15/5/5	3 出発（5月4日）
香蘭高女	香蘭高女修旅通信	S15/5/9	5 天橋立・京都
香蘭高女	香蘭高女修旅通信	S15/5/11	5 金沢
香蘭高女	香蘭修旅 第四、五信	S15/5/14	8 長野・日光・東京
香蘭高女	香蘭高女旅の歌信	S15/5/17	8 各地で詠んだ歌
香蘭高女	香蘭高女旅信 第六、第七信	S15/5/18	8 鎌倉・横須賀・江ノ島・名古屋
香蘭高女	香蘭高女旅信 第八信	S15/5/19	1 伊勢・権原神宮
香蘭高女	香蘭高女旅信 第九信	S15/5/23	6 奈良・大阪
富岡高女	富岡高女 新緑の旅 第一、二信	S15/5/10	1 大阪・熱海・箱根
富岡高女	富岡高女旅記 第三信	S15/5/11	1 東京
富岡高女	富岡高女 新緑の旅 第四信	S15/5/12	7 東京
富岡高女	富岡高女 新緑の旅 第五、第六信	S15/5/14	5 日光・東京
富岡高女	富岡高女旅行団 第七、第八信	S15/5/17	5 東京・名古屋・大阪・徳島
徳島農業▲	農業学校旅行記 第一信	S15/5/13	7 奈良
徳島農業▲	農業学校旅行記 第二信	S15/5/14	1 名古屋
徳島農業▲	農業学校旅行記 第三信	S15/5/17	1 名古屋・湘南・東京
徳島農業▲	農業学校旅行記 第四信	S15/5/19	5 東京
徳島農業▲	農業学校旅行記 第五信	S15/5/23	6 立川・日光
徳島農業▲	農業学校旅行記	S15/5/24	8 京都・大阪
女師・高女	女師高女校満鮮旅行行悩み	S15/5/20	3 ※ 6/4出発許可出ず
阿波中学▲	阿波中学校聖地巡拝旅行 第一信	S15/5/20	8 伊勢神宮へ出発。徳島から高松
阿波中学▲	阿波中学校聖地巡拝旅行 第二信	S15/5/22	8 宇高連絡船・権原神宮・奈良
阿波中学▲	阿波中学校聖地巡拝旅行 第三信	S15/5/23	7 伊勢神宮
阿波中学▲	阿波中学校聖地巡拝旅行 第四信	S15/5/24	8 京都
阿波中学▲	阿波中学校聖地巡拝旅行 第五信	S15/5/25	8 宇高連絡船・高松屋島
撫養高女	撫養高女修学旅行	S15/5/27	8 徳島港・大阪・京都
撫養高女	撫養高女修学旅行 第二通信	S15/5/29	6 京都
撫養高女	撫養高女旅行記 第三、四信	S15/5/30	7 熱海
撫養高女	撫養高女旅行記 第五通信	S15/6/1	7 江ノ島・鎌倉
撫養高女	撫養高女旅館【ママ】 第六信	S15/6/3	7 東京
撫養高女	撫養高女旅行記 第七信	S15/6/4	8 日光
撫養高女	撫養高女旅行記 第八信	S15/6/5	8 日光
撫養高女	撫養高女旅行記 第十信	S15/6/6	7 大阪・徳島へ
板西高美女	板西高美女旅信 第一信	S15/6/5	8 高松・連絡船・京都・権原神宮
板西高美女	板西高美女旅信 第二、三信	S15/6/8	8 奈良・伊勢・名古屋・鎌倉へ
板西高美女	板西高美女旅信 第四信	S15/6/9	5 鎌倉・東京
板西高美女	板西高美女旅信 第五信	S15/6/10	7 東京
板西高美女	板西高美女旅信 第六、七信	S15/6/11	7 日光・長野・善光寺
板西高美女	板西高美女旅信 第八信	S15/6/14	7 京都
板西高美女	板西高美女旅信 第九信	S15/6/15	7 京都
板西高美女	板西高美女旅信 第十信	S15/6/16	7 大阪・徳島
	列車混雑緩和のため小中学校の修学旅行禁止 大規模の学術大会等も制限	S15/5/11	5 ※ 小中学校修学旅行の自粛

■ 1941年（昭和16年）度徳島県修学旅行関係記事

学校略称		掲載日時	ページ	地点など
板西高女	板西高女強行歩行訓練	S16/6/20	5	※ 往復40キロ。21日出発。

出所：『徳島毎日新聞』（徳島県立図書館所蔵、国立国会図書館所蔵）